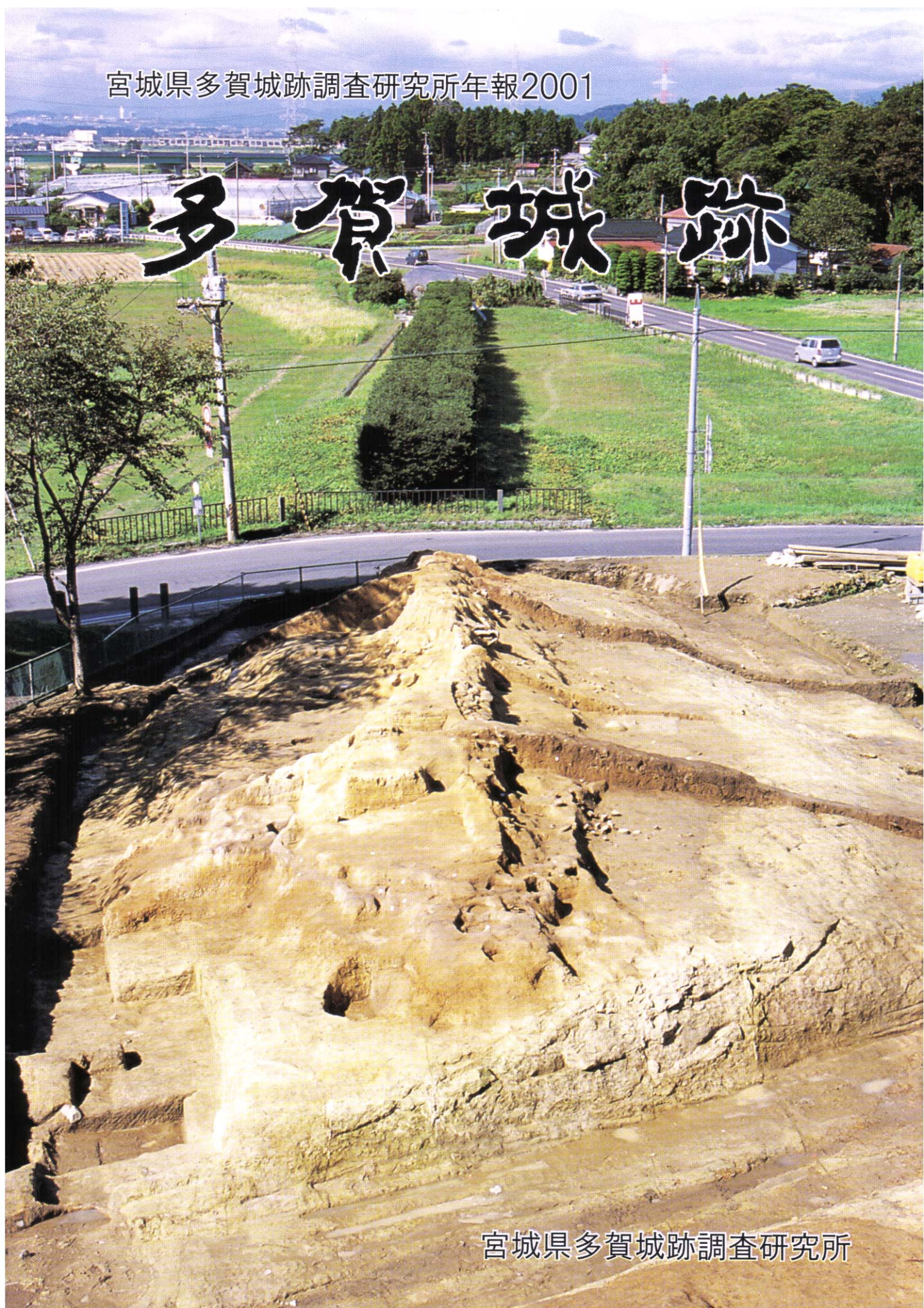


多賀城跡



序 文

当研究所は特別史跡多賀城跡の発掘調査に加え、昭和45年からは調査成果に基づいた環境整備も継続的に実施している。これまでに、政庁地区、南門地区、作貫地区、東門・大畑地区など、おもに多賀城跡東半部を中心とした地域の整備を進めてきた、これにより、多賀城跡は少しずつ歴史公園としての体裁を整えつつあるが、いずれも部分的な整備にとどまっている。そこで、平成7年度には南門－政庁間を重点整備地区として位置付け、多賀城市が実現を目指している多賀城南門の立体復元計画と一体となった面的な整備を行うことにより、野外博物館的な活用を図る計画を立案し、多賀城跡調査研究指導委員会の承認を受けている。

平成10年度から昨年までの政庁南東に隣接する城前地区を対象とした調査はこの計画に沿って実施したものであり、南門政庁間の東に位置するこの地区には、奈良時代から10世紀前半までの5時期にわたる変遷をもつ官衙が存在したことを明らかにした。とくに、奈良時代には5棟の建物が計画的な配置にもとづいて造営された重要な官衙地域であり、それらが宝亀11年(780)の伊治公皆麻呂の攻撃によるとみられる大規模な火災によって焼失していることなども把握した。

本年度からの3カ年は南門地区を対象とした調査を予定し、南門と南辺築地との接続状況、南門と南門－政庁間を結ぶ道路および城外から南門に至る南北大路との取りつき方の解明などを行うことにしている。これらの調査により、南門の立体復元や南門－政庁間道路復元整備の基礎的な資料はほぼ収集できるのではないかと考えている。

本年度の第72次調査はその最初となる調査であり、南門の西と北の状況について調査し、南辺築地や南門政庁間を結ぶ道路の変遷などについて、いくつかの新たな知見を得ることができた。調査成果の詳細については本文に記したとおりである。

また、本書には当研究所が平成7年度から10年度にかけて実施した現状変更に伴う8件の調査結果も収録している。

本書の刊行にあたり、日頃からご指導をいただいている多賀城跡調査研究指導委員会の諸先生、文化庁、多賀城市および多賀城市教育委員会の関係者、調査を支援して下さった他の多くの皆様方に所員一同心から感謝申し上げる次第である。

平成14年3月

宮城県多賀城跡調査研究所
所長 白鳥良一

目 次

I. 調査研究事業の計画	1
II. 第72次調査	
1. 調査の目的と経過	2
2. 地形と層序	4
3. 発見した遺構と遺物	7
4. 考察	31
III. 現状変更に伴う調査	
1. 多賀城跡五万崎地区	40
2. 多賀城跡大畑地区	49
3. 多賀城跡後山地区	58
4. 多賀城廃寺跡地区	59
IV. 付章	
1. 関連研究・普及活動	64
2. 組織と職員	68
3. 沿革と実績	69
写真図版	76
報告書抄録	

例 言

1. 本書は平成13年度に実施した多賀城跡第72次調査、平成7年度から平成10年度に実施した8件の現状変更に関わる調査成果と、多賀城跡の環境整備、関連研究事業、普及活動の概要を収録したものである。
2. 当研究所のおこなう発掘調査と環境整備等の事業は多賀城跡調査研究指導委員会（委員長：芹沢長介）の指導と承認のもとに行っている。
3. 多賀城跡第72次調査の発掘調査体制、調査期間、調査面積は下記のとおりである。
調査 主体 宮城県教育委員会（教育長 千葉真弘）
調査 担当 宮城県多賀城跡調査研究所長 白鳥良一
調 査 員 白鳥良一・阿部恵・後藤秀一・佐藤和彦・古川一明・吾妻俊典・白崎恵介
調査 期間 平成13年5月7日～平成14年2月28日
調査 面積 約1,000 m²
調査参加者 三嶋 滋・金澤義孝・高橋 磨・黒井富士夫・阿部由利夫・猪俣信義・菊池輝夫石川豊輔・沢田 健・後藤節子・鶴巻まき子・中村みつ江・千葉菊枝・佐藤寿子・伊藤とし子・佐久間広恵・高橋美江・山家由子・千葉さおり・竹ヶ原亜希・堺沢亜紀・畠山未津留（東北歴史博物館解説員）・鈴木一議（東京学芸大学学生）王先平（敦煌研究院 考古研究所館員）・禹景準（東北大学大学院）
4. 測量原点は政庁正殿（S B150B）の身舎南側柱列中央に埋設してある。この原点と政庁南門のほぼ中心を結ぶ線を南北の基準線、原点を通りこれに直交する線を東西の基準線に定めた。南北の基準線は真北に対して1° 04' 00" 東に偏している。
5. 瓦の分類基準は多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政庁跡 図録編』（1980年）、『多賀城跡 政庁跡 本文編』（1982年）による。
6. 土色については、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖 1996年版』日本色研事業株式会社（1996年）にもとづいた。
7. 鉄製品の保存処理については、東北歴史博物館手塚均氏、及川規氏の協力を得た。
8. 本調査で得られた資料は、宮城県教育委員会にて保管している。
9. 本調査の成果の一部は、『現地説明会資料』『宮城県遺跡調査成果発表会資料』『古代城柵官衙遺跡検討会資料』で紹介しているが、本書の内容が全てに優先する。
10. 本書は、白鳥良一、阿部恵、後藤秀一、佐藤和彦、古川一明、吾妻俊典、白崎恵介の討議・検討のもとに、I、II、IVを後藤、古川、白崎が、IIIを吾妻、白崎が執筆し、後藤、古川、白崎が編集した。

表紙題字は大塚惣一郎氏の揮毫による 表紙写真 第72次調査で検出した築地塀跡（東から）〔フィルムD23261〕

I. 調査研究事業の計画

当研究所では、多賀城跡の発掘調査、多賀城跡の環境整備、多賀城関連遺跡の発掘調査を計画的・継続的に実施している。ここでは、多賀城跡の発掘調査計画について述べ、多賀城跡の環境整備、多賀城関連遺跡の発掘調査については、付章にその概要を収録した。

多賀城跡の発掘調査は、昭和44年の研究所設立以来、多賀城跡調査研究指導委員会の指導のもとに、5カ年ごとの計画を立案し、実施している。本年度は、平成10年11月の第9回多賀城跡調査研究現地指導委員会で承認された多賀城跡発掘調査第7次5カ年計画（表1）の3年度に当たり、外郭南門地区を対象に第72次調査を実施し、南門西側築地塀と政庁－南門間道路跡の様相を明らかにした。

年次	発掘調査回数(対象地区)	調査面積	予算
平成11年度	第70次調査(城前地区南部)	2,000 m ²	37,700 千円
平成12年度	第71次調査(城前地区南部)	2,000 m ²	32,300 千円
平成13年度	第72次調査(南辺築地塀跡・政庁－南門間道路跡)	1,000 m ²	28,900 千円
平成14年度	第73次調査(南辺築地塀跡・政庁－南門間道路跡)	1,500 m ²	41,000 千円
平成15年度	第74次調査(政庁－南門間道路跡と東側の状況)	1,540 m ²	41,000 千円
合計	5地区	8,040 m ²	180,900 千円

表1 多賀城跡発掘調査第7次5カ年計画

(平成13年までは実績)

	氏名	現職	専門分野
委員長	芹沢 長介	東北福祉大学芹沢_(ケイ)介美術工芸館長	考古学
副委員長	須藤 隆	東北大学教授	考古学
委員	青木 和夫	お茶の水女子大学名誉教授	古代史学
委員	飯淵 康一	東北大学教授	建築史学
委員	井手 久登	東京大学名誉教授	緑地学
委員	今泉 隆雄	東北大学教授	古代史学
委員	岡田 茂弘	東北歴史博物館館長	考古学
委員	笹山 晴生	学習院大学教授	古代史学
委員	佐藤 信	東京大学教授	古代史学
委員	塩田 敏志	元東京人学教授	造園学
委員	坪井 清足	(財)元興寺文化財研究所所長	考古学
委員	檜崎 彰一	(財)瀬戸市埋蔵文化財研究センター所長	考古学
委員	町田 章	独立行政法人文化財研究所理事 奈良文化財研究所長	考古学
委員	渡辺 定夫	工学院大学教授	都市工学

表2 多賀城跡調査研究指導委員会委員名簿

Ⅱ. 第72次調査

1. 調査の目的と経過

(1) 調査の目的

多賀城跡外郭南門地区は、政庁地区から南に延びる緩やかな丘陵の南端にある（第1図）。

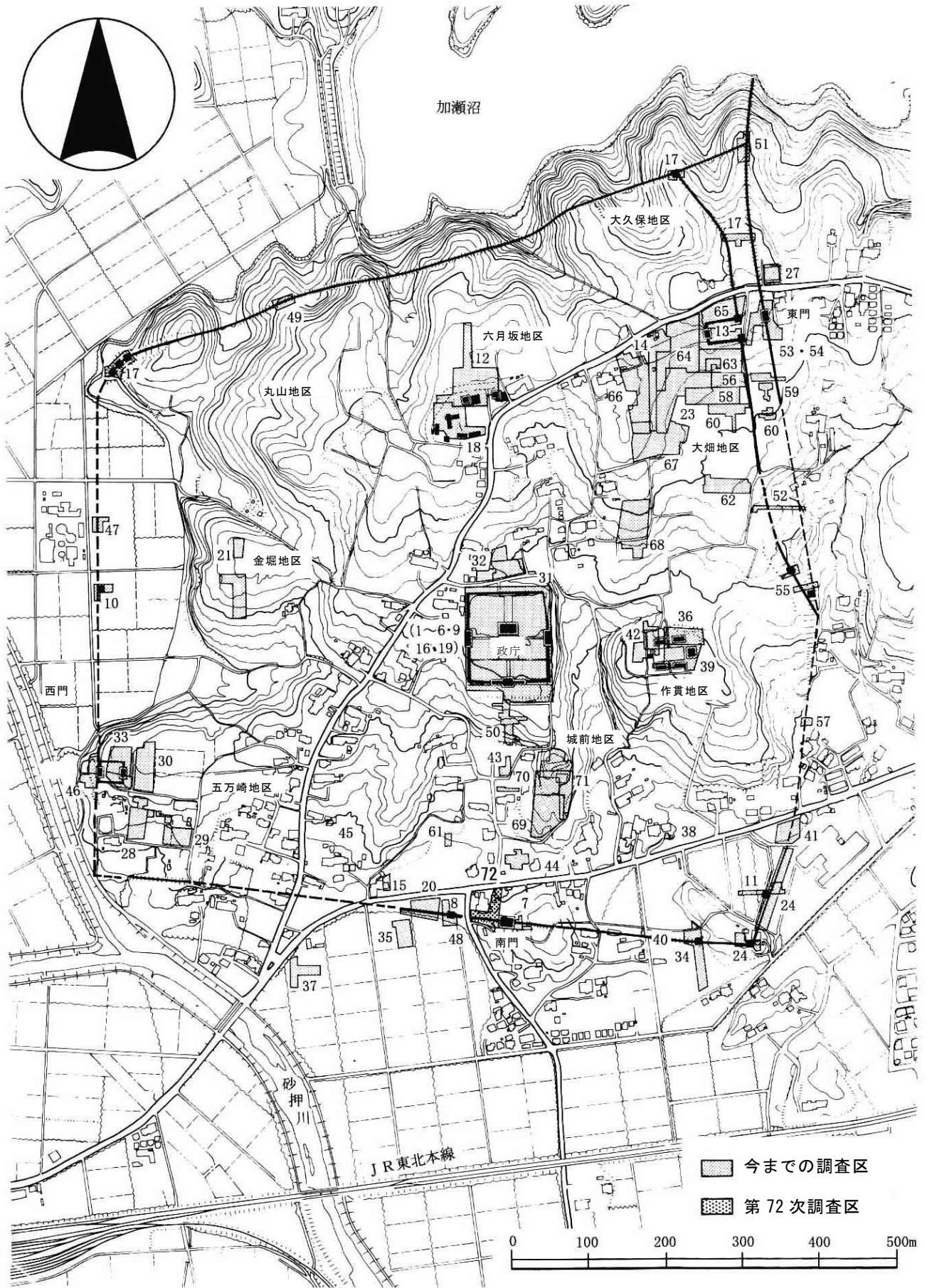
外郭南門地区では、これまで第7次調査（1969）と第48次調査（1985）の調査を実施し、南門とその東側築地塀の構造と変遷を明らかにしている。さらに、外郭南辺築地については、第8次調査（1970）・第20次調査（1973）・第34次調査（1979）で、低湿地に築かれた南辺築地塀の実態を明らかにしている。政庁から南に延び、外郭南門へ至る城内道路（以下、政庁－南門間道路とする）については、今回の調査区の北側で第43・44次調査（1983）、第50次調査（1987）の各調査を実施し、その構造と変遷を検討している。

第72次調査ではこれらの調査成果を踏まえ、外郭南門の西と北に調査区を設定した。調査の目的は南門西側の築地塀の構造と変遷をとらえることと、政庁－南門間道路の変遷と南門への取り付き方を検討することである。なお、南門地区を対象とした発掘調査は3年計画で実施する予定で、今年度はその初年にあたる。

(2) 調査の経過

第72次調査予定地内には雑木が点在していたため、4月24日から伐採を開始し、調査区内にあった民家のコンクリート基礎などを除去した。5月28日にグリット設定と、器材搬入をおこなった。

5月29日からは北半部の民家跡地部分の遺構の残存状況を確認する目的で、「コ」字状のトレンチを設定し、表土除去を開始した。その結果、調査対象地北半部では、近代以降の大規模な整地の痕跡がみられ、西半部には厚さ1m以上の盛土がなされていることが確認された。このため、厚い盛土層をバックホウにより除去する作業を6月1・4・5日の3日間実施した。6月7日から遺構検出作業を調査区中央部より南に向けて行い、最後に調査区西側を行って、8月27日までには表土除去作業を完了した。次いで8月28日から遺構精査と並行しながら測量用の基準点を設置し、9月28日から1/20の遺構平面図の作成を開始した。9月4日から政庁－南門間道路の検出を目的として北東部の多賀城碑西側に拡張区を設定し精査を開始した。10月4日にはラジコン・ヘリコプターによる空中写真撮影を行い、10月12日にはタワーによる写真撮影を行った。10月16～26日に築地塀の断ち割り、断面図作成、断面写真撮影を行い、その後、補足調査を経て、2月28日までに埋め戻しを完了した。その間、10月3日には多賀城跡調査研究現地指導委員会による現地指導を受けた。10月4日に報道機関に対して調査成果を公表し、10月6日に一般の人々を対象に現地説明会を行い、約120名の参加があった。1月19日の平成13年度宮城県遺跡調査成果発表会と、2月9日の第28回古代城柵官衙遺跡検討会で概要を報告した。



第1図 多賀城跡全体図 (1/7,000)

2. 地形と層序

調査対象地内の地形は、西から東に入り込んだ沢地で南北に二分され、多賀城碑付近がその沢頭にあっている。地籍はこの沢地を境として、南側が「田屋場」、北側が「坂下」、沢頭以東が「城前」に分かれていて、南辺築地塀跡は字田屋場、多賀城碑は字城前に含まれ、南門跡は両字にまたがっている（第2図）。調査区内での層序をみると、南部の南辺築地塀跡周辺と、東部の多賀城碑周辺に堆積層が分布し、北部と西部は民家があったため岩盤まで削平されている。そこで、基本的な層序については南部と東部の二地域に分けて説明する。

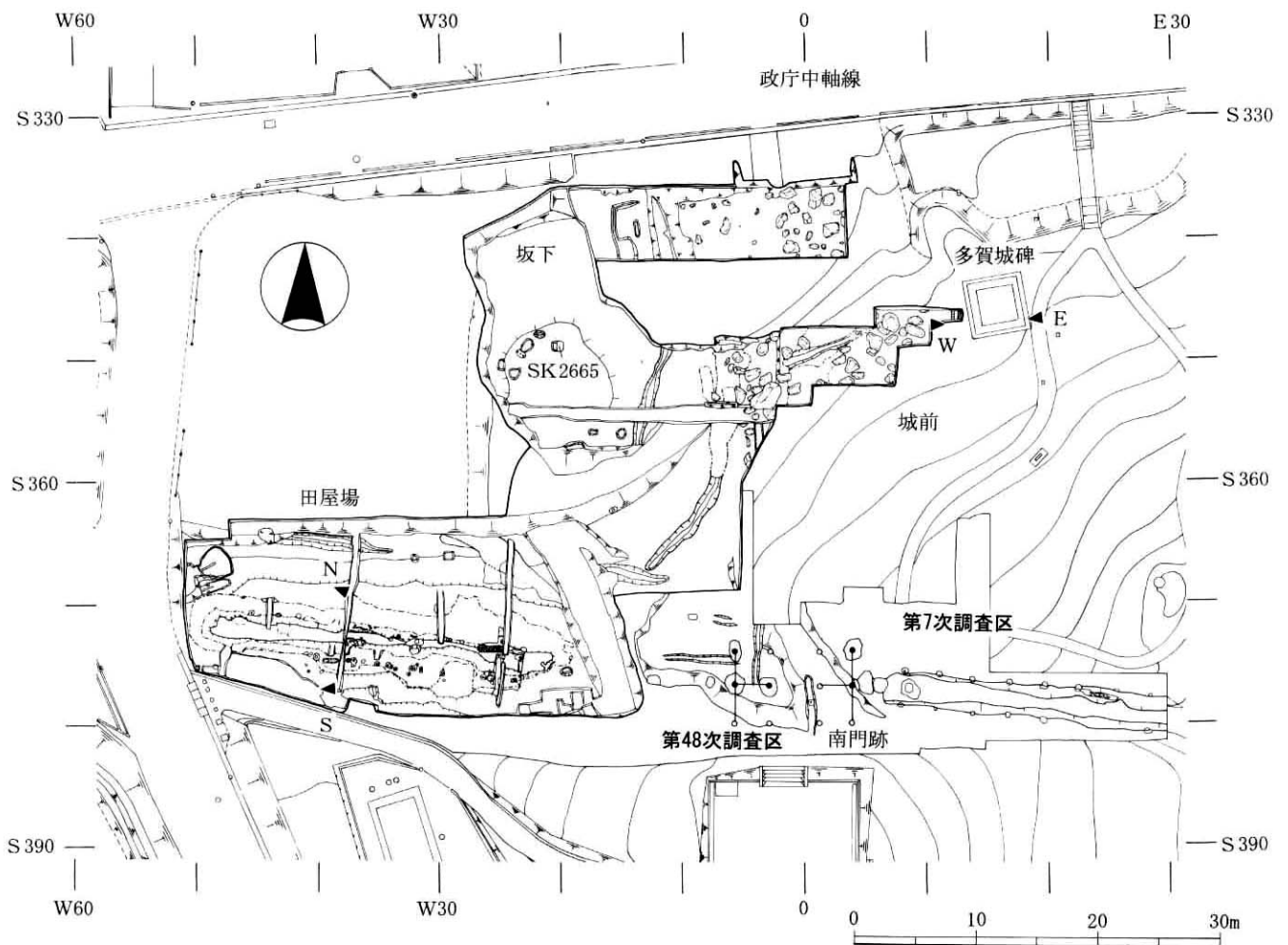
(1) 南部

南門西側の南辺築地塀が立地し、築地塀跡が尾根状の高まりとなって残る場所である。築地塀跡の南北両側に、築地塀の崩壊土を含めた次の各層が堆積している（第3図）。

〔南第1層〕現在の表土で層の厚さ30cmである。

〔南第2層〕灰白色火山灰層である。築地塀北側の窪地に部分的に残存する（第5図）。

〔南第3層〕厚さ10～30cm。築地塀北側に分布する。築地塀崩壊土とみられる。



第2図 第72次調査対象地の地形

〔南第4層〕厚さ20cm～40cm。築地塀南北両側に分布する。築地塀崩壊土とみられる。なお、築地塀南側の第4層は、第48次調査の「E1層」に相当する。

〔南第5層〕厚さ10～15cm。築地塀南北両側に分布する。築地塀の補修にともなう嵩上げ整地層とみられる。なお、築地塀南側の第5層は、第48次調査の「E2層」に相当する。

〔南第6層〕厚さ10～20cm。築地塀南北両側に分布する。築地塀崩壊土とみられる。

〔南第7層〕厚さ20cm。築地塀北側に分布する。築地塀の補修にともなう嵩上げ整地層とみられる。

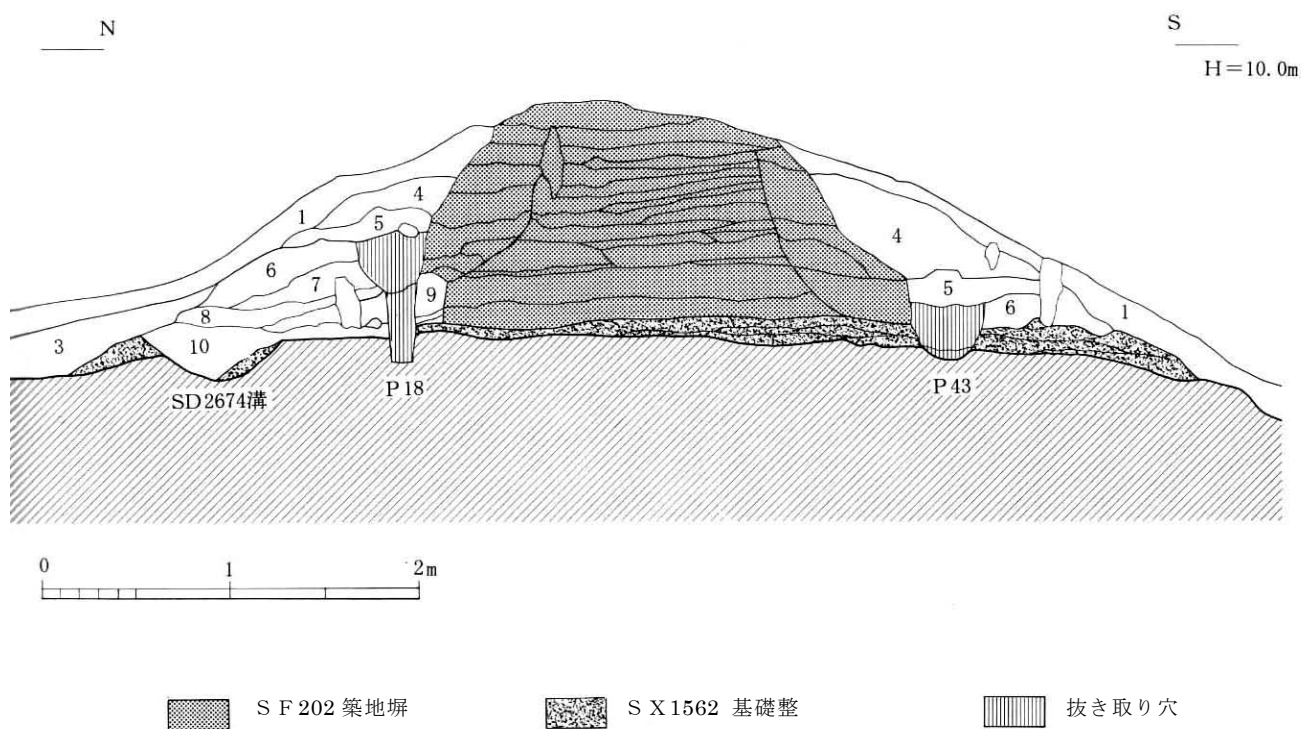
〔南第8層〕厚さ10cm。築地塀北側に分布する。築地塀崩壊土とみられる。

〔南第9層〕厚さ20cm。築地塀北側に分布する。築地塀の補修にともなう嵩上げ整地層とみられる。

〔南第10層〕厚さ10cm。築地塀北側に分布する。築地塀崩壊土とみられる。

〔南第11層〕厚さ10cm前後。築地塀下に分布する。築地塀構築前の旧表土である（第5図）。

〔南第12層〕基盤となる凝灰岩の岩盤である。この層の西側崖面に横穴墓が掘り込まれている。



No.	層名	土色	土性	備考	層の性格
1	南第1層	黒褐色(10YR3/2)	シルト		現在の表土
2	南第2層	灰白色(10YR8/1)	シルト	窪地に部分的に堆積している。(第5図参照)	灰白色火山灰層の純層
3	南第3層	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	0.5～1cmのレキ粒を多く含む。	築地塀崩壊土
4	南第4層	褐色(10YR4/4)	シルト		築地塀崩壊土
5	南第5層	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山粘土をブロック状に多量に含む。	嵩上げ整地層
6	南第6層	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	均質でしまりのない層。	築地塀崩壊土
7	南第7層	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山粘土をブロック状に多量に含む。	嵩上げ整地層
8	南第8層	褐色(10YR4/6)	砂質シルト		築地塀崩壊土
9	南第9層	黄褐色(10YR5/6)	シルト	黒褐色土と黄褐色土のブロックを多量に含む。	嵩上げ整地層
10	南第10層	褐色(10YR4/6)	砂質シルト		築地塀崩壊土
11	南第11層	黒褐色(10YR3/2)	シルト	築地塀構築以前の旧表土。(第5図参照)	築地塀構築以前の土

第3図 調査区南部の層序

(2) 東部

調査区の西から東に入り込んだ沢地の沢頭にあたる地域である。北西向きの緩傾斜地で、浸食による土砂の流出が著しく、大半は基盤の凝灰岩およびアルコース砂岩の残留巨礫が現表土もしくは近世以降の堆積層により直接覆われている（第10図）。

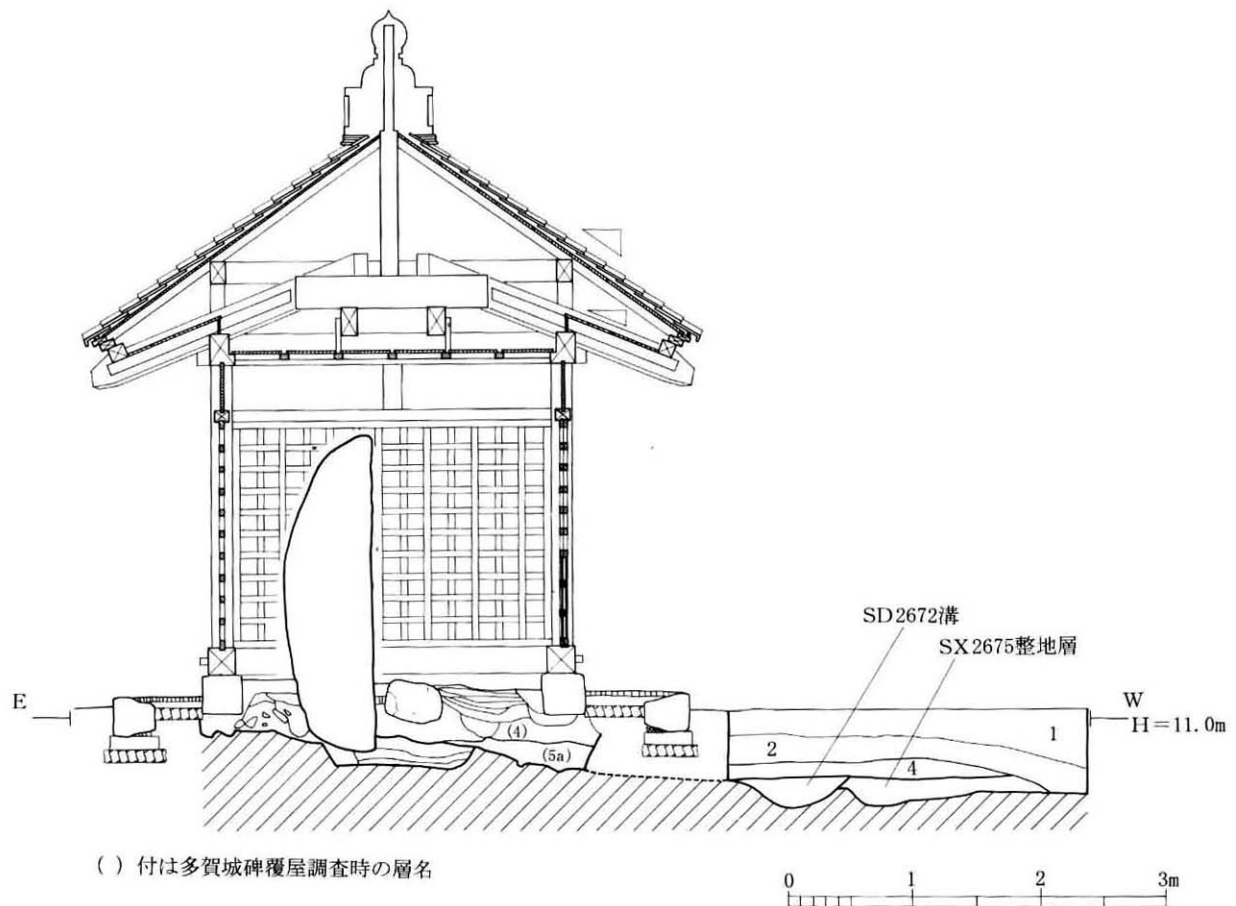
〔東第1層〕 厚さ10cm。現在の表土層である。

〔東第2層〕 厚さ30～50cm。近世以降の堆積層で、沢地部分に分布し、岩盤を直接覆っている。

〔東第3層〕 灰白色火山灰ブロックを含む層で、窪地に部分的に残存する（第10図）。

〔東第4層〕 厚さ20cm。調査区東の多賀城碑覆屋周辺に分布する。

〔東第5層〕 凝灰岩の岩盤である。この中にアルコース砂岩の残留巨礫が多数含まれる。



() 付は多賀城碑覆屋調査時の層名

No.	層名	土色	土性	備考	層の性格
1	東第1層	黒褐色(10YR3/1)	シルト		現在の表土
2	東第2層	黒褐色(10YR3/2)	シルト	近世以降の遺物を含む。	
3	東第3層	暗褐色(10YR3/3)	シルト	灰白色火山灰塊を含む。窪地に堆積。(第10図参照)	
4	東第4層	褐色(10YR4/6)	シルト	多賀城碑周辺にのみ分布。古代の堆積層。	自然堆積層

第4図 調査区東部の層序

3. 発見した遺構と遺物

今回の調査では南門西側築地塀跡の構造と変遷を確認しその下部で横穴墓を発見した。また、政庁－南門間道路跡の道路側溝とみられる溝跡と整地層の一部を検出した。出土遺物は、瓦を中心として平箱で約 280 箱あるが、表土と築地塀崩壊土出土の瓦類が大半で、遺構に伴う遺物は 12 箱分である。以下では南辺築地塀跡、政庁－南門間道路跡、横穴墓、その他の遺構・遺物の順に記述を進める。

(1) 南辺築地塀跡とそれに関連する遺構

南辺築地塀跡の現況は、高さ 1.5m、幅 3 m 前後の土塁状の高まりが 30m にわたって残っている。その南半部は削平を受けているが、北半部は築地塀本体から崩壊土まで良好に残存している。

調査の結果、南辺築地塀は基礎整地上に構築され、築地塀本体には計 4 回の補修の痕跡が確認された。これらの補修は部分的であり、築地塀の基底幅に多少の変化はあるものの、位置や方向については構築当初から廃絶まで変化しない。

以下では、基礎整地と築地塀、築地塀の補修、築地塀に関わる他の遺構の順に記述する。

遺構番号のうち、南門西側の南辺築地塀跡については、第 8・20 次調査では「S F 202 築地塀」としている。第 48 次調査では今回調査を実施した部分を「S F 1556 築地塀」としたが、今回は一連の外郭南辺築地塀跡ということで「S F 202 築地塀跡」として記述し、築地塀の変遷と補修についてはアルファベット小文字 a～e で表記する。

また、S F 202 築地塀跡の両側で検出された小穴については個別にピット番号を付し、遺構等の平面的な位置は、政庁中軸線からの距離 (W〇m) による基準線で示す (第 5 図)。

基礎整地と築地塀

外郭南門西側の S F 202 築地塀跡は、S X 1562 基礎整地層の上に構築されている (第 5・6 図)。

【S X 1562 整地層】

【概要】第 48 次調査で確認された基礎整地層である。外郭南門西側の築地塀下に分布し、北側では凝灰岩の岩盤を削り出した面の上に、丘陵斜面にかかる南側では旧表土上に盛土して整地している。

【層位・重複】第 48 次調査で発見された S P 1559～1561 横穴墓および、今回発見された S P 2660・2661 横穴墓を埋めている。

【整地層】風化礫片を多く含む黄褐色砂層を基調とし、黒褐色土の薄い層を縞状に交互に積んでいる。層の厚さは南門に接する東側で 20cm 前後、西側の丘陵斜面部分では層の厚さを増し、西端部で 2 m を越える。整地層上面は南北横断方向ではほぼ水平であるが、東西縦断方向では西に約 10 度傾斜している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【S F 202 a 築地塀跡】

〔概要〕 S X1562 基礎整地層上面に構築された当初の築地塀である。政庁中軸線の西方 21mから 51 mまでの約 30mにわたって残存する。残存する高さは最大で 1 m前後である。丘陵部西斜面に立地するため、築地塀基底面は東西縦断方向で西に約 10 度傾斜している。寄柱は掘立式で、寄柱穴の位置と残存する積み土から、方向は西で北に約 6 度偏し、基底幅は 2.6mと推定される。両側に幅 1 mの犬走りがあり、北側犬走り北縁は S D2674 溝で画されている。

〔重複〕 b～e 補修、S X2669・2670・2671・2676 土壌より古い。

〔積み土〕 版築によるもので、約 5.8m間隔で計 4 カ所に積み手の違いを確認した。これら積み手の異なる 5 区間では積み土の状況が次のように異なる。

一区目 (W21～W24) : 厚さ 10cm 前後で細かい風化岩片を含む黄色土の版築層

二区目 (W24～W30) : 厚さ 20cm 前後で細かい風化岩片を多く含む黄色砂質土と厚さ 10cm 前後の黒褐色土が互層をなす版築層

三区目 (W30～W36) : 厚さ 30cm 前後で人頭大の砂岩塊を多く含む黄色砂質土と厚さ 10cm 前後の黒褐色土が互層をなす版築層

四区目 (W36～W42) : 厚さ 5 cm 前後の黄褐色砂質土と黒褐色土が互層をなす版築層

五区目 (W42～W51) : 厚さ 10cm 前後の細かい風化岩片を含む黒褐色土の版築層

各区での版築の層理面は南北横断方向ではほぼ水平であるが、東西の縦断方向では基底面と同様に西に緩やかに下がっている。

〔寄柱穴〕 a 築地塀跡に伴うとみられる 6 個の寄柱穴もしくは抜取穴を検出した。

一・二区の積み手の違いの南北両側で一对の抜取穴を検出した (第 5 図 P 5・25)。これらは直径 30cm の隅丸方形で、その半分ほどは a 築地塀の積み土に食い込んだ位置にあり、整地層上面からの深さは 10cm である。柱痕跡は確認できないため、掘立式の寄柱の抜取穴とみられる。

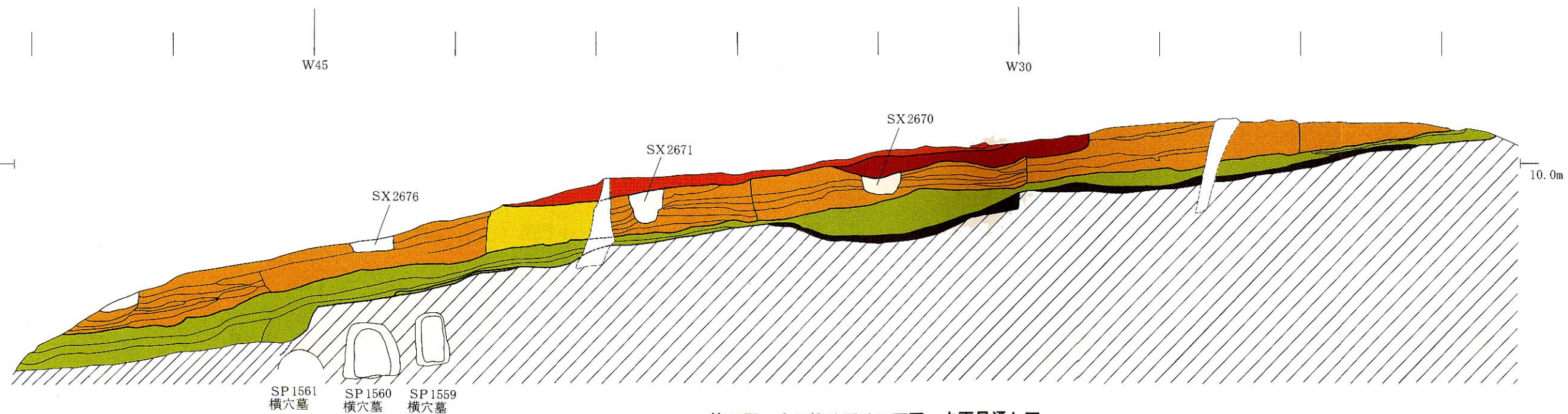
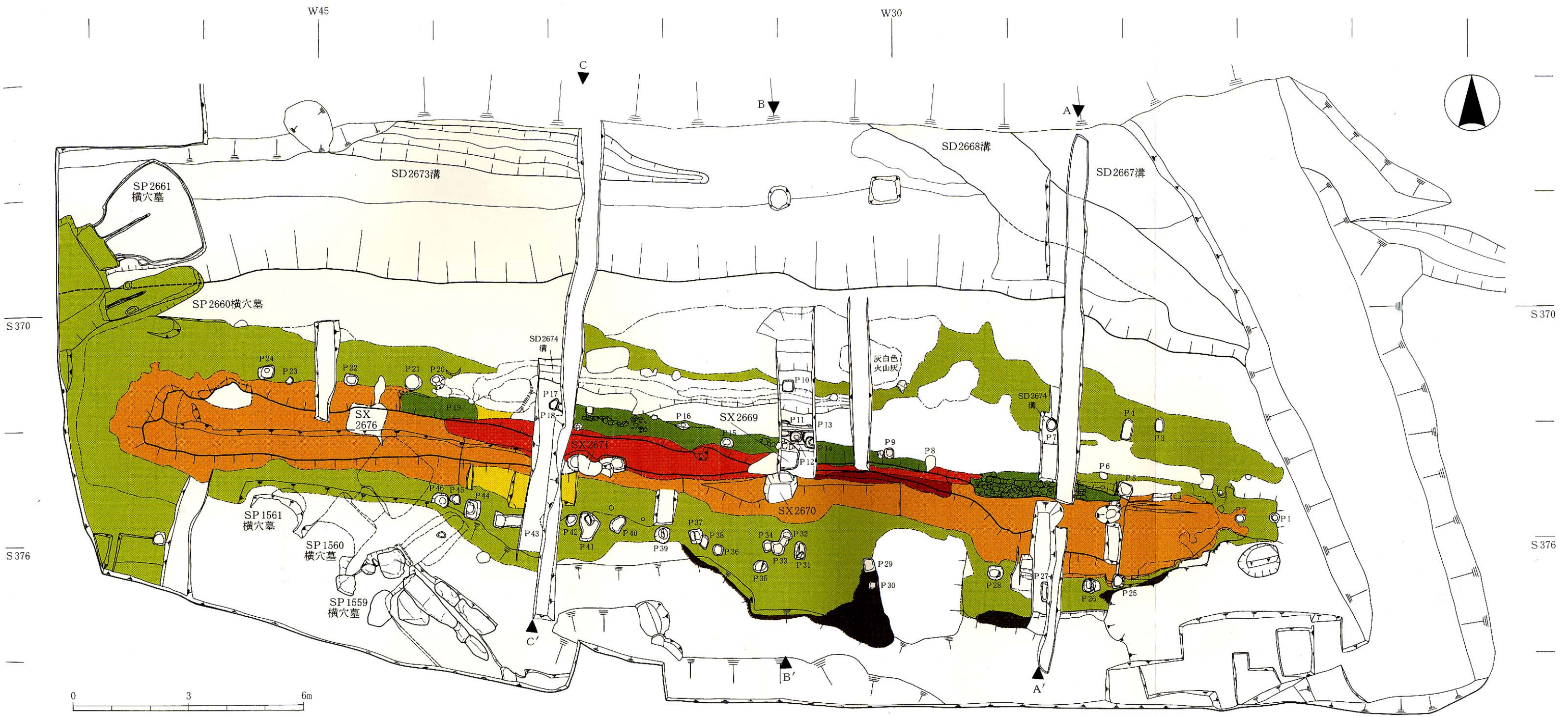
この他、積み土の積み手の違いとの位置関係から、a 築地塀に伴うとみられる寄柱穴もしくはその抜取穴を、築地塀南側で 4 個 (第 5 図 P 28・32・42・45)、北側で 1 個 (第 5 図 P 24) を検出した。平面形は直径 20cm 前後の不整円形、深さ 10cm 前後である。このうち北側の柱穴 (P 24) では径 20cm の柱痕跡を確認した。南側では柱痕跡を確認できなかった。間隔は抜取穴の中心で計測して 2.9～3.0 m である。

〔犬走り〕 a 築地塀南北両側に幅約 1 mの犬走りがある。

〔S D2674 溝〕 北側の犬走り北辺を画する溝で、上幅 60cm 前後、深さ 30cm 前後、長さは 15m以上である。残存する壁・底面は凝灰岩からなり、壁がゆるやかに立ち上がる。築地塀に並行し、東西方向に直線的に延びる。堆積土は南第 10 層である (第 3 図)。

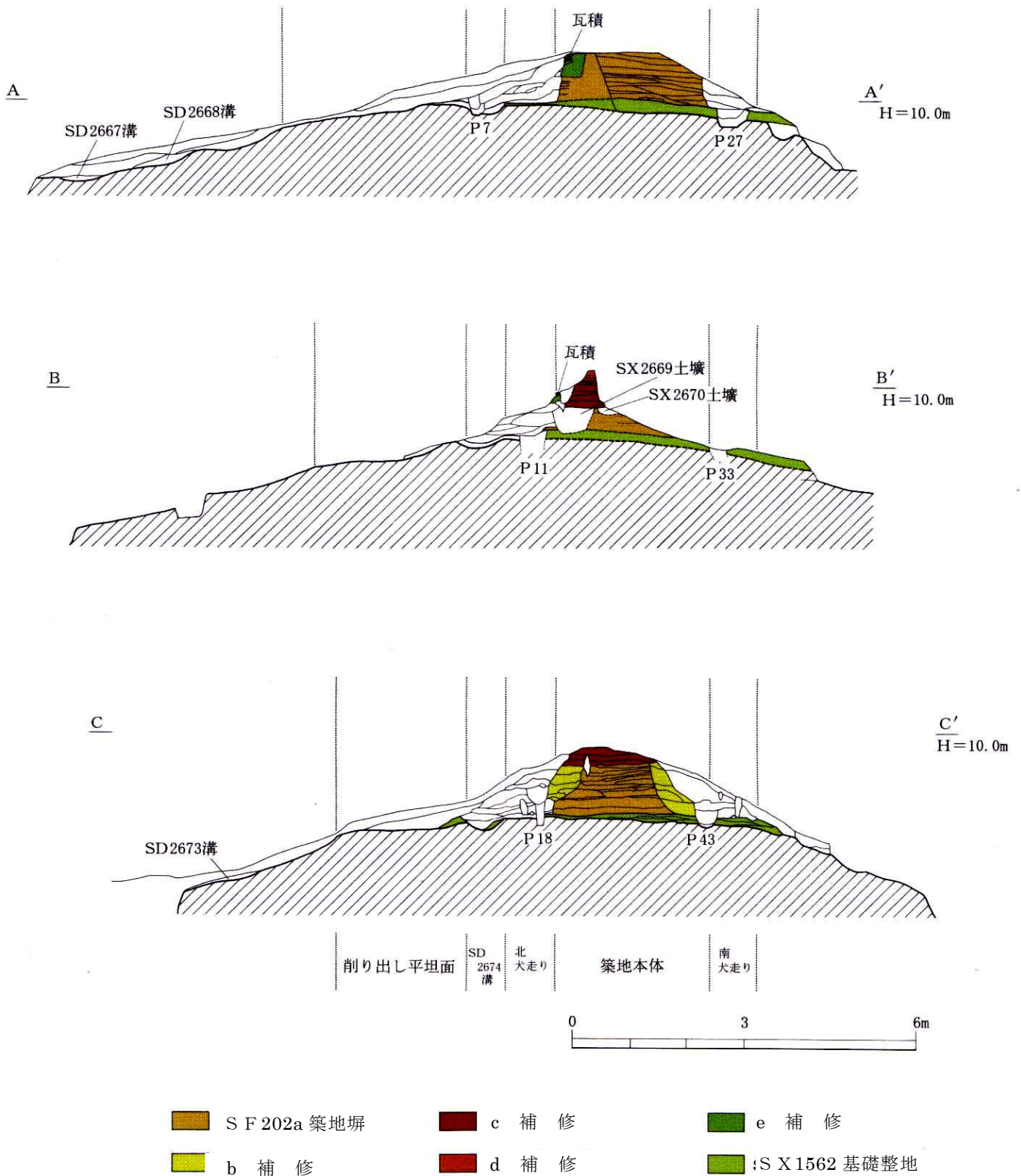
〔崩壊土〕 南第 10 層は、厚さ 10cm の褐色土層である。b 補修にともなう嵩上げ整地層の南第 9 層に覆われることから、a 築地塀の崩壊土とみられる。北側犬走りから S D2674 溝内に堆積している。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。



- 旧表土
- SX1562基礎整地
- SF202a築地塀
- b 補修
- c 補修
- d 補修
- e 補修

第5図 南辺築地塀跡平面図・立面見通し図



第6図 南辺築地塀跡 横断面図

S F 202 築地塀跡の補修痕跡

S F 202 築地塀には4時期（b～e）の補修の痕跡が確認された。

【b補修】

【概要】 a 築地塀跡の部分的な補修で、政庁中軸線の西方36mから42mまでの約6mの範囲で確認した。b補修に伴う寄柱は不明である。

【重複】 c～e補修、S X 2671 土壌より古い。

【積み土】 a 築地塀跡の中央約1.5mを残し、南北両側から削平し、新たに本体を積み直している。積み土は、風化岩片を含む黄色土層で、版築の層理面は南北横断方向では外側にわずかに傾斜している。補修の底面は、南側ではS X 1562 基礎整地層の上面まで削り込んでいるが、北側では築地塀北裾の南第9層上にあって基礎整地層上面より25cm高い。

【嵩上げ整地層】 南第9層は、築地塀北裾に幅約1.2mの帯状に分布する。b補修積み土下にあることから、b補修にともなう嵩上げ整地層で、その上面は北側犬走りであったとみられる。

【崩壊土】 南第8層は、築地塀北裾に堆積した厚さ10cmの褐色砂質土層である。c補修にともなう寄柱穴（P18）より古いことから、b補修の崩壊土とみられる（第3・6図）。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【c補修】

【概要】 aもしくはb補修積み土の上部を削平し、新たに本体を積み直して補修したもので、政庁中軸線の西方28.5mから34mまでの約5.5mの範囲で確認した。残存する高さは最大で0.5m前後である。寄柱は掘立式で、寄柱穴の位置から、基底幅は約3.0mと推定される。

【重複】 S X 2669・2670 土壌より新しく、e補修より古い。

【積み土】 残存する積み土の厚さは30cm～50cm、幅1m前後で、上部はd補修の積み土で覆われている。積み土は厚さ10cm前後の細かい風化岩片をわずかに含む黄褐色土と褐色土が互層をなす版築層で、版築の層理面は南北横断方向、縦断方向ともにほぼ水平である。積み手の違いはみとめられない。

【寄柱穴】 c補修に伴うとみられる8個の寄柱穴もしくはその抜取穴を検出した。

まず、築地塀跡を断ち割ったW39地点で、築地塀跡両側で一对の抜取穴を検出した（第5図P18・43）。これらはいずれも平面形が直径40cmの不整円形である。南側のものは深さ40cmで、柱痕跡は確認できない。北側のものは深さ30cmで、その下部に直径20cmで基礎整地層まで達する深さ40cmの柱痕跡を確認した。いずれも、e補修にともなう嵩上げ整地層とみられる南第5層で覆われている。

この他、築地塀の南北両側に、これらに伴うとみられる寄柱穴もしくはその柱痕跡、抜取穴などを6個検出した。北側に3個（P12・16・22）、南側に3個（P33・39・46）である。掘り方は直径40cm前後の不整円形、深さ20cmで、北側の（P12）、南側の（P46）では径20cmの柱痕跡を確認した。間隔は抜取穴の中心もしくは柱痕跡で計測して2.9～3.0mである。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【d 補修】

【概要】 c 補修積み土の上部を削り、積土をして補修したもので、政庁中軸線の西方 30m から 41m までの約 11m の範囲で確認した。残存高は最大 0.5m 前後である。寄柱は不明である。

【重複】 c 補修より新しく、e 補修より古い。

【積み土】 c 補修積み土の上部を削平し、新たに本体を積み直している。残存する積み土の厚さは 10cm ～50cm、幅 50cm 前後である。積み土は褐色土層で、版築の痕跡は不明瞭である。積み手の違いはみとめられない。

【崩壊土】 南第 6 層は、築地塀南北両裾に堆積した厚さ 10～20cm の黄褐色土層である。e 補修にともなうとみられる嵩上げ整地の南第 5 層に覆われることから、d 補修の崩壊土とみられる。

【出土遺物】 d 補修の積み土から丸瓦、平瓦の破片が出土している。丸瓦はⅡ類が 2 点、平瓦はⅡ B 類が 2 点で、平瓦は黒褐色で軟質である。

【e 補修】

【概要】 a 築地塀跡、c・d 補修の積み土の北側面を奥行 20～30cm まで削り取った後、新たに本体を積み直し、外側に瓦を積んで補修したものである。

【位置・検出状況】 積み土は築地塀跡の北側で、政庁中軸線の西方 24m から 39m までの約 15m の範囲で確認した。瓦積みは、政庁中軸線の西方 25m から 28m までの 3 m、33m から 34m までの 1 m、37m から 39m までの 2 m の計 3 区間に部分的に残存している。

【重複】 b～d 補修、S X 2669・2670・2671 土壌のいずれよりも新しい。

【積み土・瓦積み】 下層に明黄褐色の積み土をし、その上に瓦を積み、裏込めとして黄褐色土を積んでいる。この補修の底面は、当初の基礎整地層上面より 40cm 高い。

下層の積み土は、明黄褐色土で厚さは 20cm 前後、奥行 30cm 前後である。版築は不明瞭で、しまりがない。上層の瓦積みは残りのよい場所で 4 段まで確認している。使用された瓦は、丸瓦、平瓦、軒平瓦などの破片で、瓦の側辺をそろえるように整然と積み重ねている。

【嵩上げ整地層】 南第 5 層は、築地塀南北両裾に幅約 0.9m の帯状に分布する、厚さ 10～15cm の灰黄褐色土層である。d 補修の崩壊土とみられる南第 6 層の上にあることから、e 補修に伴う嵩上げ整地層で、その上面は犬走りであったとみられる。

【崩壊土】 南第 4 層は、築地塀南北両側に堆積した厚さ 20～40cm の褐色土層である。e 補修にともなう嵩上げ整地層とみられる南第 5 層の上に堆積していることから e 補修後の崩壊土とみられる。

【出土遺物】 e 補修の瓦積に使用された瓦がある。軒平瓦、丸瓦、平瓦の破片が出土している（第 7 図）。大半が平瓦である。取り上げた瓦をみると、軒平瓦は 640 単弧文軒平瓦（第 7 図 5）と 641 無文軒平瓦が各 1 点、丸瓦Ⅱ類が 4 点、平瓦Ⅱ B 類が 5 点、Ⅱ C 類が 1 点である。このうち平瓦Ⅱ B 類の 1 点と無文軒平瓦は焼瓦で、平瓦Ⅱ B 類の凹面には刻印「丸」-A がみられ（第 7 図 4）、無文軒平瓦の顎部には朱が付着している。また、平瓦Ⅱ B 類の中には、621 偏行唐草文軒平瓦に用いられる凸面に稲妻状の叩き目がみられるものがある（第 7 図 2）。

S F 202 築地塀跡崩壊土出土遺物

築地塀南北両側に e 補修以降の崩壊土である南第 3 層が堆積しており、この崩壊土からは多量の瓦と少量の土器類が出土している。

土器には土師器、須恵器、須恵系土器があるが、いずれも小破片資料で図示できるものはない。土師器には坏と甕があり、ともにロクロ調整と非ロクロ調整のものがみられる。須恵器には坏、高台坏、甕、瓶類があり、この中の坏について底部の切り離し技法と調整をみると、ヘラ切り無調整、切り離し技法が不明で手持ちヘラ削り調整と回転ヘラ削り調整のものがある。須恵系土器には坏と高台坏が各 1 点みられる。

瓦には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、鬼瓦がある（第 7～9 図）。この中の平瓦と丸瓦には表面がボロボロである焼瓦が一定量認められる。軒瓦には 221～223 とみられる重弁蓮花文軒丸瓦（第 9 図 17）、320 重弁蓮花文軒丸瓦（第 9 図 19）、243 と 240～243 とみられる重圈文軒丸瓦（第 9 図 15・18・23）、311 あるいは 313 細弁蓮花文軒丸瓦（第 9 図 16）、511 重弧文軒平瓦（第 7 図 1）、640 単弧文軒平瓦（第 7 図 6）、721-A 均整唐草文軒平瓦（第 7 図 7）の他に瓦当文様が判別できない軒丸瓦がある。この中の 243 重圈文軒丸瓦（23）の裏面には刻印「伊」が押印されている。

丸瓦は確認できたものはすべてⅡ類である。完形に近いⅡB類（第 8 図 14）や、凸面に刻印「伊」が押印されているもの、凹面に記号「本」？が押印されているもの、凹面にヘラ書き「大」？のみられるものなどがある。平瓦にはⅠA類、ⅠB類、ⅠC類 a タイプ、ⅠC類 b タイプ、ⅡA類、ⅡB類、ⅡB類 a タイプ、ⅡB類 b タイプ、ⅡC類がある。この中のⅠC類 a タイプは凹面には凸型台の陰刻文字「今」-C がみられるもの（第 8 図 9）、ⅡB類 a タイプは凹面に刻印「丸」-A（第 8 図 10）、「矢」-A（第 7 図 3）、「物」-A（第 8 図 11）が押印されているものがある。また、ⅡB類には凸面に方形突出がみられるもの、ⅡC類には凹面に記号「⊕」（第 8 図 12）、「田」（第 8 図 13）、「⊙」（第 9 図 21）が押印されているものや「×」、「大」（第 8 図 8）などがヘラ書きされているものがある。

鬼瓦は重弁蓮花文の弁端付近の小破片で、裏面には簀の子状の圧痕がみられる（第 9 図 20）。砂粒を多く含む胎土や焼成状況および色調が表土出土の 953 鬼瓦とみられる周縁部資料（第 17 図 10）と酷似していることから、これと同種あるいは同一個体の可能性も考えられる。なお、953 鬼瓦は、第 35・48 次調査で出土している鬼瓦である。

熨斗瓦は平坦で表裏両面に縄叩き痕跡がみられるものである（第 9 図 22）。

S F 202 築地塀跡に関わる他の遺構

S F 202 築地塀跡に重複する土壌 4 基と、S F 202 築地塀跡の両側で検出された組み合わせ不明のピット群がある。

【S X 2669 土壌】

〔位置・検出状況〕 a 築地塀積み土積み手の違いの東から三区目のほぼ中央北よりに位置する（第 5 図）。S F 202 a 築地塀と、南第 7 層を掘り込み、c 補修の積み土および南第 6 層に覆われている（第 6 図 B - B'）。

〔形態・規模〕 平面形が径 70cm の不整円形で、深さは約 50cm である。

〔堆積土〕 風化礫片を多く含む黄褐色砂で、人為堆積である。

〔出土遺物〕 須恵器甕の破片が 1 点出土している。

【S X 2670 土壌】

〔位置・検出状況〕 a 築地塀積み土積み手の違いの東から三区目のほぼ中央に位置する（第 5 図）。S F 202 a 築地塀を掘り込み、c 補修積み土に覆われている（第 6 図 B - B'）。

〔形態・規模〕 南半が削平されているため平面形は不明であるが、径 70cm の不整円形と推定され、深さは約 15cm である。

〔堆積土〕 風化礫片を多く含む黄褐色砂で、人為堆積である。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

【S X 2671 土壌】

〔位置・検出状況〕 a 築地塀積み土積み手の違いの東から四区目のほぼ中央に位置する。S F 202 a 築地塀を掘り込み、d 補修積み土に覆われている（第 5 図）。

〔形態・規模〕 径 70cm の不整円形と推定される。深さは約 75cm である。

〔堆積土〕 風化礫片を多く含む黄褐色砂で、人為堆積である。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

【S X 2676 土壌】

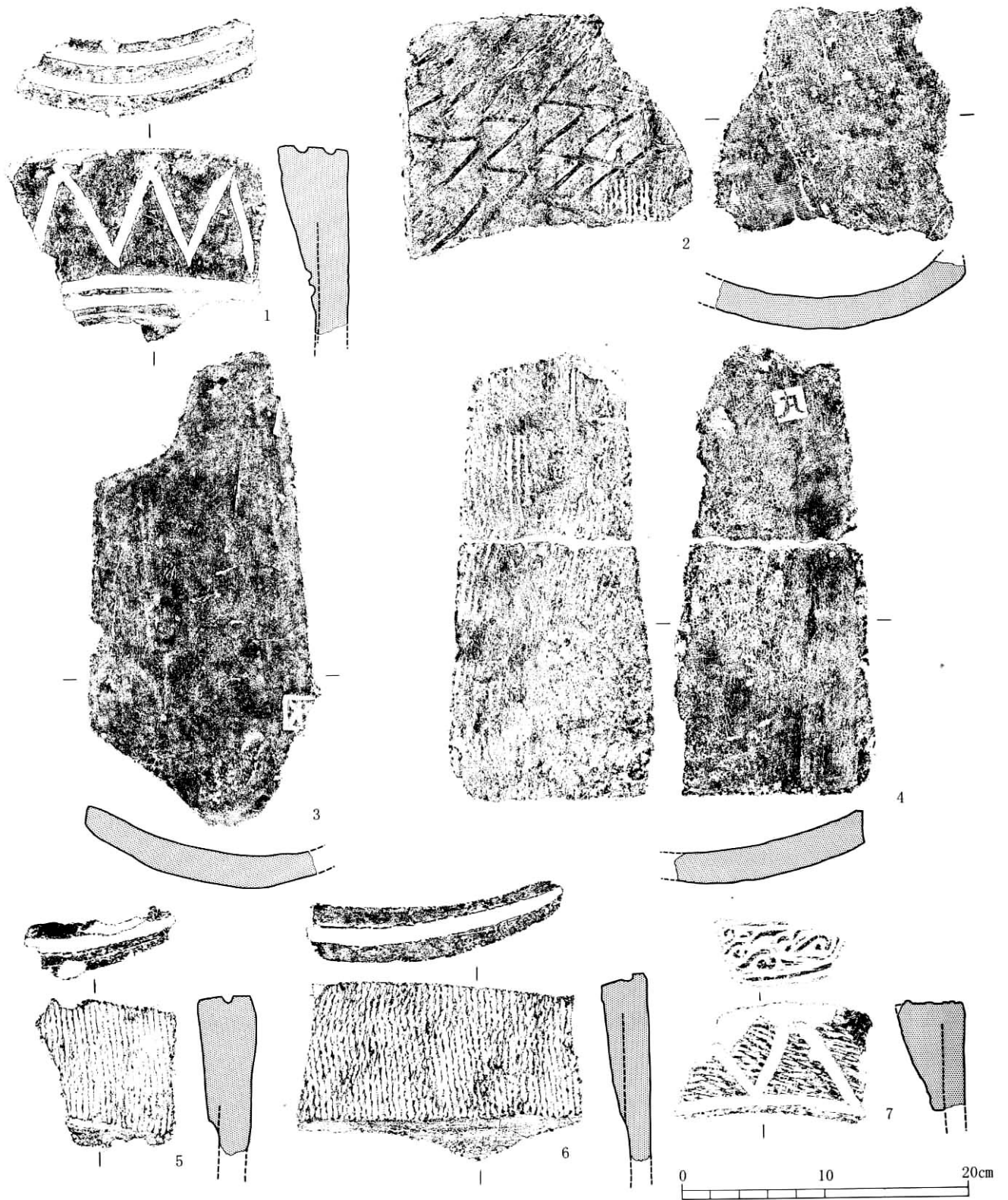
〔位置・検出状況〕 a 築地塀積み土積み手の違いの東から五区目のほぼ中央に位置する（第 5 図）。S F 202 a 築地塀を掘り込んでいる。

〔形態・規模〕 一辺約 1 m の方形で、深さは 20cm 以上である。

〔堆積土〕 風化礫片を多く含む黄褐色砂で、人為堆積である。

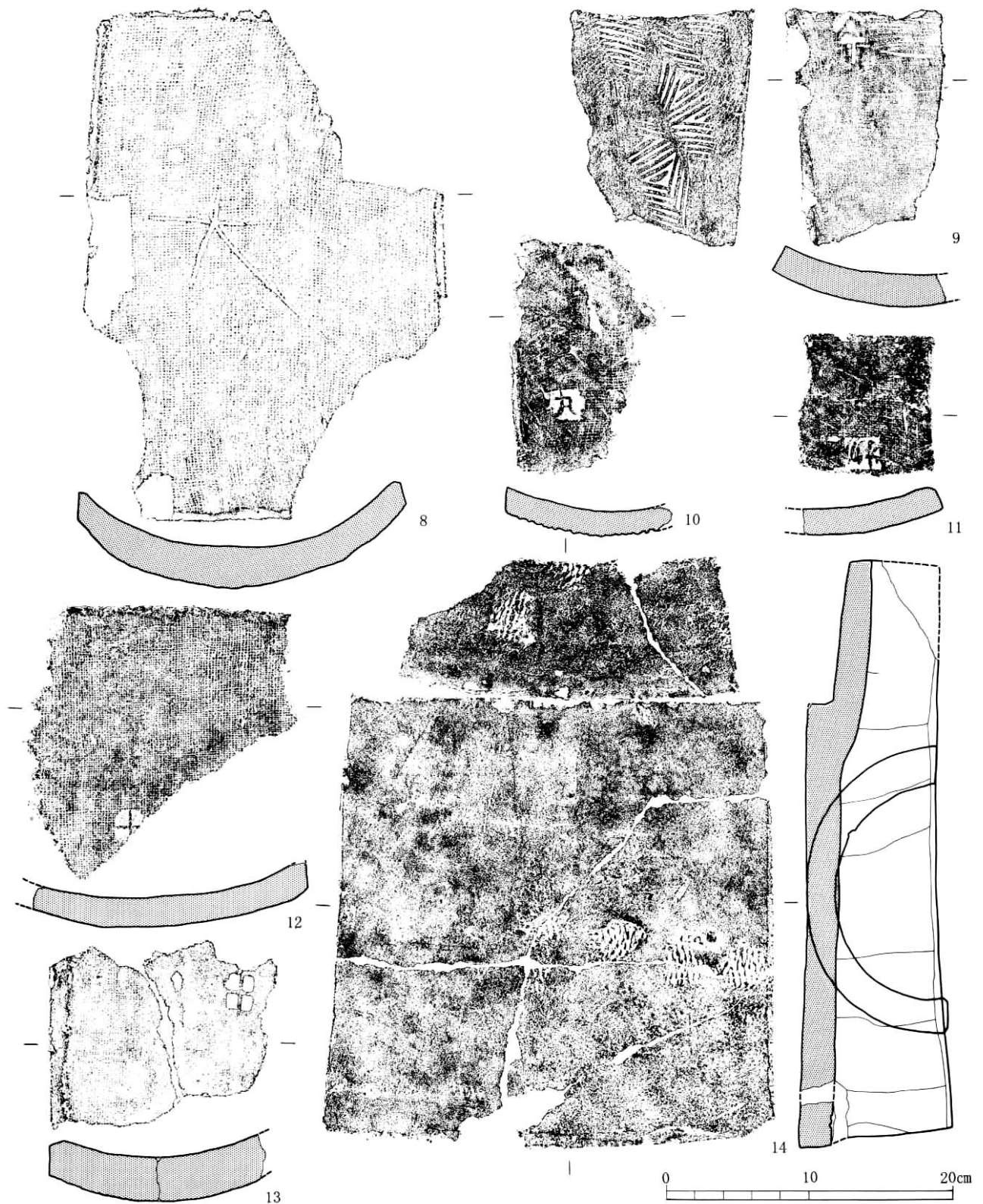
〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

〔ピット群〕 S F 202 築地塀跡の両側に 46 個のピットが検出された。a 築地塀にともなうとみられる 7 個、c 補修にともなうとみられる 8 個、第 48 次調査で確認された S A 1557 柱列（P 31・37・41・44）4 個が含まれるが、その他は組み合わせ不明のピットである。これらの中には足場穴や、側柱などの柱穴も含まれるとみられるが、特定はできない。ピットからの出土遺物はない。



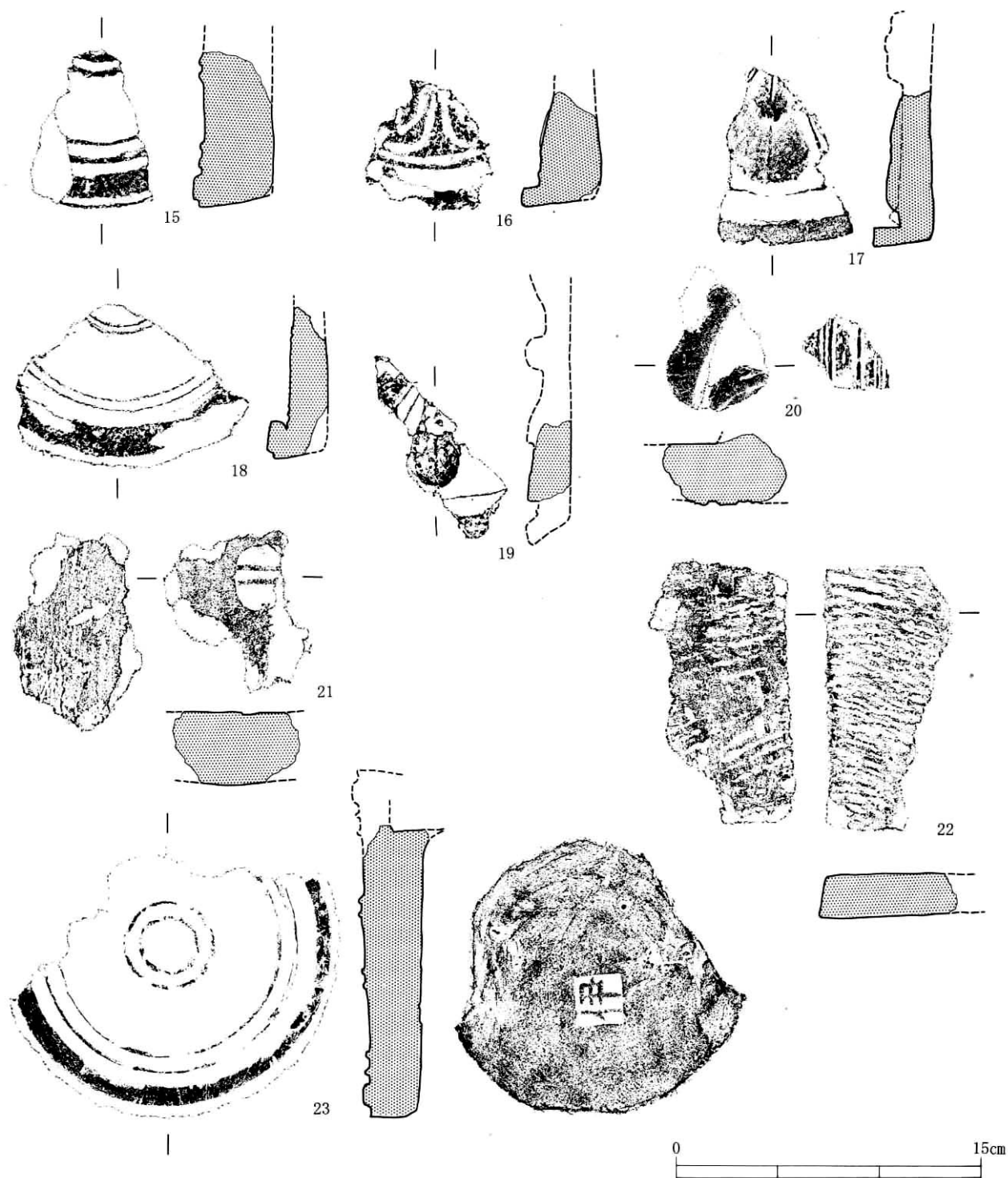
No.	種類	遺構・層位	特徴	登録	箱番号	ネガ番号
1	軒平瓦	南第3層 (SF202e 築地崩壊土)	511 重弧文、第I期	R24	B13238	D23380
2	平瓦	SF202e 瓦列2 No.2	凸面稻妻状叩き、第II期	R3	B13236	D23378
3	文字瓦	南第3層 (SF202e 築地崩壊土)	平瓦II B類、凹面刻印「矢」-A、第II期	R4	B13239	D23421
4	文字瓦	SF202e 瓦列2 No.1	平瓦II B類、凹面刻印「丸」-A、第II期、焼瓦	R1	B13236	D23377
5	軒平瓦	SF202e 積土	640 単弧文、第II期	R2	B13236	D23384
6	軒平瓦	南第3層 (SF202e 築地崩壊土)	640 単弧文、第II期	R28	B13238	D23387
7	軒平瓦	南第3層 (SF202e 築地崩壊土)	721-A 均整唐草文、第III期	R6	B13239	D23427

第7図 南辺築地塀跡・南第3層出土遺物



No.	種類	遺構・層位	特徴	登録	箱番号	ネガ番号
8	平瓦	南第3層(SF202e築地崩壊土)	ⅡC類、ヘラ書き「大」、第Ⅰ期	R26	B13238	D23422
9	平瓦	南第3層(SF202e築地崩壊土)	ⅠC類aタイプ、凹面陰刻文字「今」-C、第Ⅰ期	R41	B13238	D23414・23415
10	文字瓦	南第3層(SF202e築地崩壊土)	平瓦ⅡB類aタイプ、凹面刻印「丸」-A、第Ⅱ期	R9	B13239	D23433
11	文字瓦	南第3層(SF202e築地崩壊土)	平瓦ⅡB類aタイプ、凹面刻印「物」-A、第Ⅱ期	R10	B13239	D23396
12	記号瓦	南第3層(SF202e築地崩壊土)	平瓦ⅡC類、凹面槽円形で「田」の記号、第Ⅳ期	R5	B13239	D23398
13	記号瓦	南第3層(SF202e築地崩壊土)	平瓦ⅡC類、凹面長方形で「田」の記号、第Ⅳ期	R27	B13238	D23435
14	丸瓦	南第3層(SF202e築地崩壊土)	ⅡB類、ほぼ完形	R1	B13237	D23419

第8図 南第3層出土遺物(1)



No.	種類	遺構・層位	特徴	登録	箱番号	ネガ番号
15	軒丸瓦	南第3層 (SF202e 築地崩壊土)	243 重圏文、第Ⅱ期	R4	B13237	D23401
16	軒丸瓦	南第3層 (SF202e 築地崩壊土)	311 か 213 細弁蓮花文、第Ⅲ期	R3	B13239	D23404
17	軒丸瓦	南第3層 (SF202e 築地崩壊土)	221~223 重弁蓮花文、第Ⅲ期	R7	B13237	D23403
18	軒丸瓦	南第3層 (SF202e 築地崩壊土)	240~242 重圏文、第Ⅲ期	R1	B13239	D23383
19	軒丸瓦	南第3層 (SF202e 築地崩壊土)	320 重弁蓮花文、第Ⅲ期	R8	B13237	D23410
20	鬼瓦	南第3層 (SF202e 築地崩壊土)	953 鬼瓦、裏面簧の子状圧痕、第Ⅱ期	R2	B13237	D23405
21	記号瓦	南第3層 (SF202e 築地崩壊土)	平瓦ⅡC類、凹面楕円形で「□」の記号、第Ⅳ期	R37	B13238	D23379
22	熨斗瓦	南第3層 (SF202e 築地崩壊土)	表裏両面縄叩き	R25	B13238	D23390・23391
23	軒丸瓦	南第3層 (SF202e 築地崩壊土)	243 重圏文、裏面刻印「伊」、第Ⅱ期	R3	B13237	D23423・23424

第9図 南第3層出土遺物(2)

(2) 政庁－南門間道路跡とそれに関連する遺構

調査区東部の南門北側一帯は、近世以降の遺物を含む東第2層が岩盤直上に堆積しており、古代の堆積層と遺構の残存状態は悪く、その大半は浸食により失われた可能性が高い。古代の遺構としては次にみる溝4条と2カ所で検出した整地層がある。

溝跡

検出した4条の溝は、位置や方向などから、時期の異なる政庁－南門間道路跡の側溝とみられる。

【S D 2663 溝】

〔位置・検出状況〕 政庁中軸線の西約4.5mに位置する南北方向の溝である。約1.5m分を調査した。

〔層位・重複〕 S X 2664 整地層より古い。

〔規模・形状〕 検出面での上幅は約0.7m、深さは0.2mである。残存する壁・底面は岩盤からなり、平坦な底面からゆるやかに壁が立ち上がる。

〔堆積土・出土遺物〕 褐色土の自然堆積層である。遺物は出土していない。

【S D 2657 溝】

〔位置・検出状況〕 政庁中軸線の西約7mに位置する南北方向の溝である。約20m分を調査した。

〔層位・重複〕 S X 2664 整地層より古い。

〔規模・形状〕 検出面での上幅は約1.5m、深さは0.5mである。残存する壁・底面は岩盤からなり、平坦な底面からゆるやかに壁が立ち上がる。多賀城碑の西側から南門跡の北西側にかけて、南北方向に緩やかな弧を描くように延びている。南側は徐々に浅くなり途切れている。

〔堆積土・出土遺物〕 黄褐色砂質土の自然堆積層である。遺物は出土していない。

【S D 2658 溝】

〔位置・検出状況〕 政庁中軸線の西約12mに位置する南北方向の溝である。約8m分を調査した。

〔層位・重複〕 表土に直接覆われている。

〔規模・形状〕 検出面での上幅は約1.2m、深さは0.1m前後である。残存する壁・底面は岩盤からなり、平坦な底面からゆるやかに壁が立ち上がる。南南西から北北東にほぼ直線的に延びている。

〔堆積土・出土遺物〕 褐色砂質土の自然堆積層である。土器と瓦が出土している。土器は、須恵器甕・瓶の破片が少数で図示できるものはない。瓦は、丸瓦はⅡ類、平瓦はⅡB類、ⅡB類aタイプ、ⅡC類の破片が出土している。

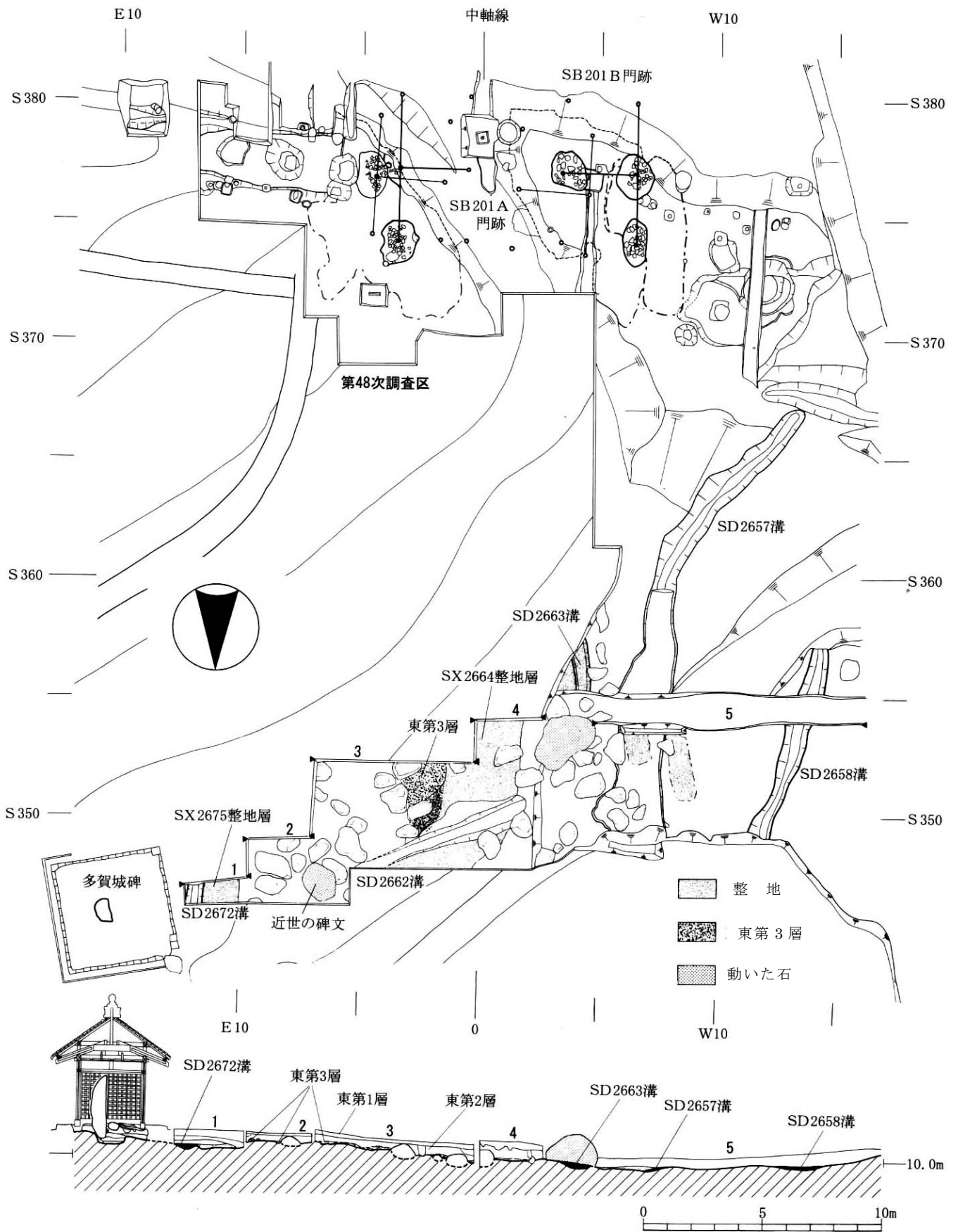
【S D 2672 溝】

〔位置・検出状況〕 政庁中軸線の東約11mに位置する南北方向の溝で、約1m分を調査した。

〔層位・重複〕 表土直下にある。

〔規模・形状〕 検出面での上幅は約1.2m、深さは0.1m前後である。残存する壁・底面は岩盤からなり、平坦な底面からゆるやかに壁が立ち上がる。南南西から北北東にほぼ直線的に延びている。

〔堆積土・出土遺物〕 褐色砂質土の自然堆積層である。すべて破片資料で、丸瓦と平瓦が少量出土している。丸瓦は3点で、すべてⅡ類である。平瓦にはⅠA類、ⅡB類aタイプ、ⅡC類がある。



第 10 図 南門北側調査区平面図・横断面図

整地層

検出した整地層は政庁－南門間道路跡の路面下の整地層とみられる。

【S X 2664 整地層】

〔位置・検出状況〕 政庁中軸線の西側に分布し、約 50 m²の範囲を検出した。

〔層位・重複〕 東第 3 層の下層にある。S D 2663、2657 溝より新しい。

〔概要〕 黒褐色土層で、南東から北西方向に緩やかに傾斜している。層の厚さは 5～10cm で、角の取れた瓦の小破片が多量に含まれている。

〔出土遺物〕 少量の土器と多量の瓦の他に鉄刀が出土している（第 11 図）。鉄刀は茎から刀身にかけての資料で、平棟、平造で両区の刀である（第 11 図 31）。土器はいずれも小破片資料で図示できるものはないが、土師器と須恵器が少量出土している。土師器には甕、須恵器には坏・甕・瓶類がある。土師器の甕は摩滅して特徴を把握しがたいものも多いが、ロクロ調整のものがみられる。須恵器の坏では底部の切り離し技法がへら切りで、ナデ調整のものがある。

瓦は大部分が摩滅して角のとれた小破片が多量（1614 点）に出土している。種類には軒丸・軒平瓦・丸瓦・平瓦があり、この中では丸瓦と平瓦が大部分を占める。軒瓦としては 420 宝相華文軒丸瓦（第 11 図 24）・450 陰刻花文軒丸瓦（26）・310A・B 不明細弁蓮花軒丸瓦（25）、660 均整唐草文軒平瓦（29）・640 単弧文軒平瓦（30）・641 無文軒平瓦（28）がある。平瓦には I A 類、I B 類、I C 類 a タイプ、II B 類、II B 類 a タイプ、II B 類 b タイプ、II C 類があり、この中では II C 類が最も多い。また平瓦 II B 類の中には表面がボロボロである焼瓦が少量認められる。丸瓦は確認できたものはすべて II 類で、この中には凹面にへら書き「大」（27）がみられるものがある。平瓦と同様に焼瓦も認められる。

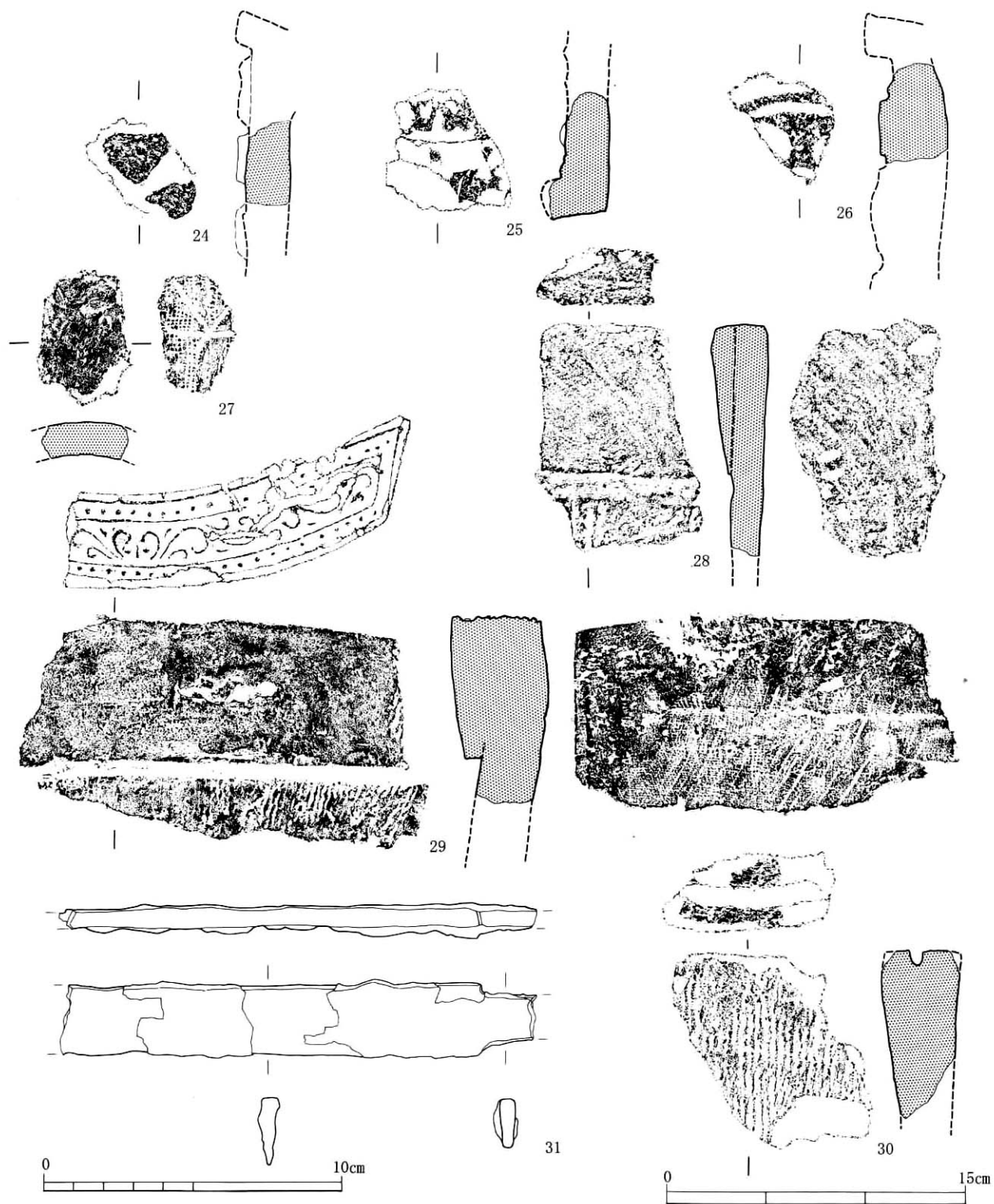
【S X 2675 整地層】

〔位置・検出状況〕 S D 2672 溝西側に分布し、約 5 m²の範囲を検出した。

〔層位・重複〕 S D 2672 溝より新しい。

〔概要〕 堅くしまりのある砂質土層で、南から北に緩やかに傾斜している。層の厚さは 5～30cm で、小さく角の取れた瓦の破片が含まれている。

〔出土遺物〕 少量の土器と多量の瓦の他に硯が 1 点出土している（第 17 図）。土器は小破片のため図示できないが、須恵器の甕が少数出土している。硯は小破片であるが風字硯とみられるものである（第 17 図 2）。瓦はすべて小破片で、大部分が摩滅して角のとれたものである。種類には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦があり、この中では丸瓦と平瓦が主体を占める。軒瓦には 240～243 重圈文軒丸瓦、451 陰刻花文軒丸瓦（1）、不明の軒丸瓦、721-A？均整唐草文軒平瓦（5）、721 均整唐草文とみられる軒平瓦（4）がある。丸瓦は II B 類で、I 類はない。平瓦には I A 類、I B 類、II B 類、II B 類 a タイプ、II B 類 b タイプ、II C 類があり、この中では II B 類が主体を占める。また II B 類の平瓦の中には凹面に刻印「丸」-A、「物」が押印されたものがある。



No.	種類	遺構・層位	特徴	登録	箱番号	ネガ番号
24	軒丸瓦	SX2664	420 宝相花文、第Ⅳ期	R8	B13240	D23407
25	軒丸瓦	SX2664	310A・B 不明細弁蓮花文、第Ⅲ～Ⅳ期	R9	B13240	D23436
26	軒丸瓦	SX2664	陰刻花文(450か?)、第Ⅳ期	R7	B13240	D23408
27	文字瓦	SX2664	丸瓦Ⅱ類、凹面へラ書き「大」か?	R10	B13240	D23409
28	軒丸瓦	SX2664	641 無文、焼瓦、第Ⅱ期	R3	B13240	
29	軒丸瓦	SX2664	660 均整唐草文、第Ⅰ期	R1	B13240	D23389
30	軒丸瓦	SX2664	640 単弧文、第Ⅱ期	R2	B13240	D23386
31	鉄刀	SX2664	平棟平造、両区	R11	B13242	D23417

第 11 図 SX2664 整地層出土遺物

(3) 横穴墓

調査区西端の築地塀基礎整地層下で、2基の横穴墓を発見し調査した。南門の立地する丘陵の南西端の西斜面に位置し、南西に広がる沖積地との比高差は2～3mである。築地塀北側の旧地形は削平され判然としないが、周辺の地形からみて、本来は、基盤の凝灰岩からなる西南向きの急傾斜地であったと推定される。こうした旧地形に沿って、第48次調査で3基の横穴墓が発見されている。したがって、今回発見された2基の横穴墓の両側には、さらに複数の横穴墓が埋没していると推定される。

【S P 2660 横穴墓】

【位置・検出状況】築地塀の北壁から2mほど北に位置する。南西に開口し、長軸方向は東で北に約23度偏している。天井部と北壁が大きく削平され、全体が築地塀の基礎整地層下に埋もれていた。

【重複】本横穴墓の前庭部は、北側に隣接するS P 2661 横穴墓の前庭部と重複しており、S P 2661 横穴墓前庭部の造成後に本横穴墓が造営されている。また、築地塀基礎整地層との関係は、基礎整地層が玄室床直上の堆積層を直接覆っていて、他の堆積層や天井崩落土がみられないことから、築地塀の基礎地業施工時に天井部が削り去られ、基礎整地層で埋め立てられたものと考えられる。

【形態・規模】平面形は、奥行き長い長方形を基調とし、奥にゆくにつれ幅狭くなる。全長2.5m、玄室奥行1.7m、玄門部0.3m、羨道部長0.5m、幅は奥壁で約0.4m、玄門部から羨道部は0.8mである。

床はほぼ平坦であるが、奥壁から羨道まで約7度の傾斜があり、羨道部前端は玄室奥壁下端より40cmほど低い。玄室前半から前庭部にかけての中軸線上には幅5cmの排水溝が延びている。残存する奥壁は残存高0.4m、南壁は0.6mで、床から丸みをもって立ち上がり、屈曲して天井部に至る。壁や床には、部分的に構築時のものとみられる粗い工具痕跡が残るが、方向などに規則性はみられない。

玄門部床には閉塞施設に関連するとみられる浅い掘り込みがある。

【堆積土】床直上に厚さ3cm前後の黒褐色土層が薄く堆積し、その上は築地塀基礎整地層で埋め戻されている。上層の築地塀基礎整地層は南側から北側に傾斜している。

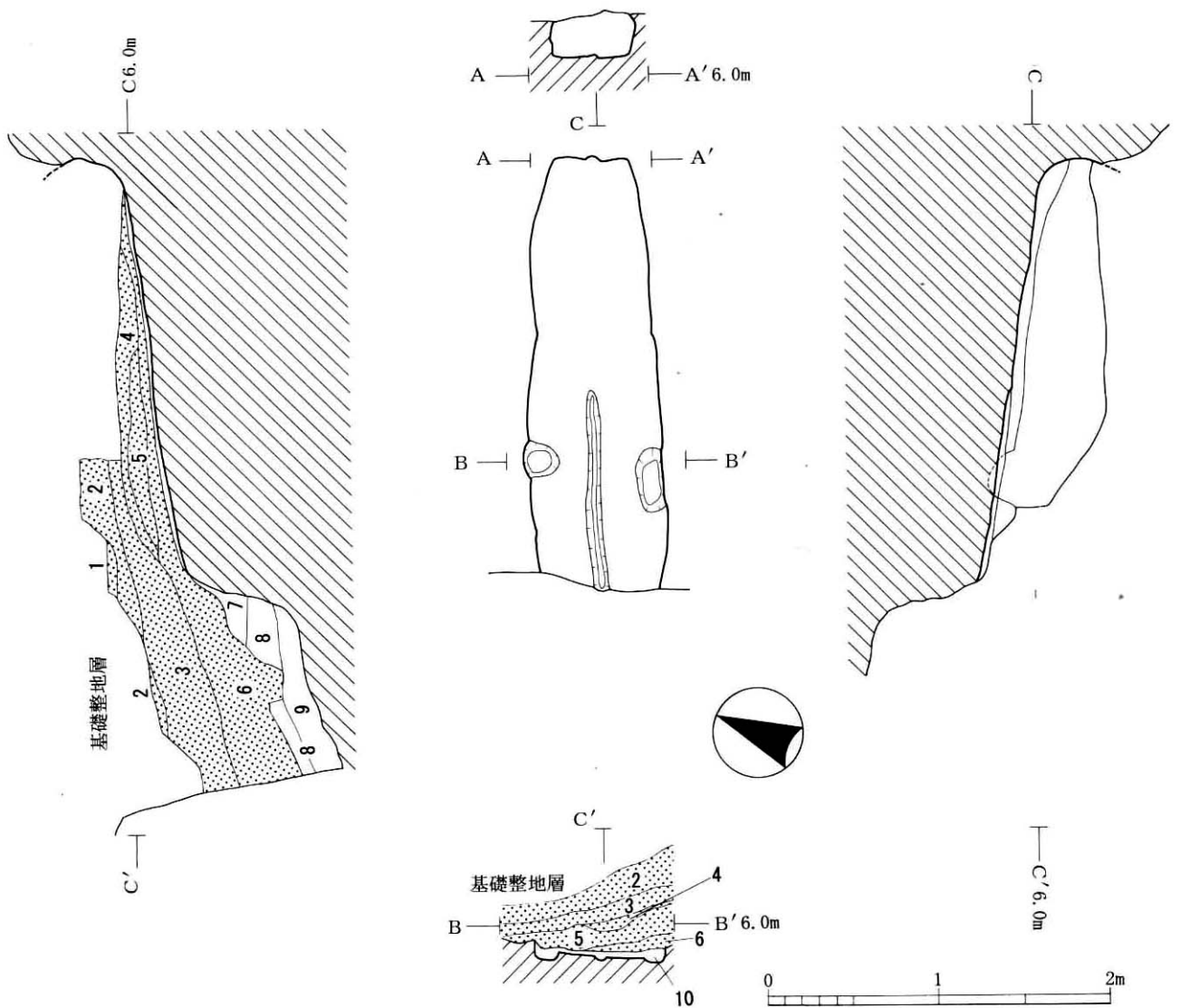
【出土遺物】遺物は出土していない。

【S P 2661 横穴墓】

【位置・検出状況】築地塀の北壁から3mほど北に位置する。南西に開口し、長軸方向は東で北に約25度偏している。前庭部は築地塀のS X 1562 基礎整地層に覆われていた。

【他の遺構との重複】本横穴墓の前庭部は、南側に隣接するS P 2660 横穴墓の羨道部と重複し、本横穴墓前庭部の構築後にS P 2660 横穴墓が造営されている。築地塀基礎整地層との関係は、基礎整地層が前底部堆積層から羨道部の天井崩落土層を覆っていることと、玄室部の天井崩落土層の上に灰白色火山灰を含む自然堆積層がみられることから、玄室天井部は築地塀の基礎整地後に崩壊し、灰白色火山灰が降下した10世紀前半頃には玄室上部が窪地となっていたと考えられる。

【形態・規模】平面形は、奥壁に丸みがあり、側壁は玄門から奥壁に直線的に開く扇形を呈する。全長3.2m、玄室奥行2.1m、玄門部0.5m、羨道部長0.5m、幅は奥壁で2.8m、玄門部内側で1.8m、玄門部は1.1m、羨道部は玄門外側で1.3m、羨門部1.0mである。



No.	土色	土性	備考	性格
1	黄褐色 (10YR5/8)	シルト		S X 1562 基礎整地層
2	黄褐色 (10YR5/8)	シルト	凝灰岩ブロックを多量に含む。	
3	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	凝灰岩ブロックを少量含む。	
4	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	2.5YR6/2 灰黄褐色土をブロック状に含む。	
5	褐色 (10YR4/4)	シルト	凝灰岩ブロックを少量含む。	
6	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	10YR7/8 黄橙色粘性の強いシルトをブロック状に多量に含む。	
7	褐色 (10YR4/4)	シルト	2.5YR4/2 暗灰黄色シルト凝灰岩ブロックを含む。自然堆積層。	SP2661 前庭部堆積層
8	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	凝灰岩ブロックを多量に含む。自然堆積層。	
9	褐色 (10YR4/4)	シルト	自然堆積層。	
10	黒褐色 (10YR2/2)	シルト		玄室内堆積層

第 12 図 SP2660 横穴墓

床はほぼ平坦であるが、奥壁部側から前庭部側に傾斜し、玄門と羨門の床にはそれぞれ約 10cm の段差がある。玄室部から玄門までの壁際と玄室前半から玄門部にかけての中軸線上には幅 5 cm 前後の排水溝がある。壁は残存高 0.8m 前後で、床から内傾気味に立ち上がる。壁や床には、部分的に造営時のものとみられる粗い工具痕跡が残るが、方向などに規則性はみられない。

奥に向かって開く玄門と羨道を経て「コ」字状に開く前庭に至る。羨道部には閉塞施設として積まれていた人頭大の河原石が 2～3 段残る。

〔堆積土〕 4 層ある。まず、玄室から前底部までの床直上に厚さ 3 cm 前後の黒褐色土が堆積し、その上に厚さ 40cm 前後の褐色土が堆積している。その上層の玄室から羨道部にかけては主に砂岩破片からなる天井崩落土が堆積し、羨道から前底部では築地塀基礎整地が堆積している。さらに玄室部天井崩落土上の窪みには灰白色火山灰を含む層が堆積している。

〔出土遺物〕 玄室床から、土器、鉄刀、刀子、鉄鏃が出土している。このうち、鉄刀（第 14 図 1）は玄室奥壁沿いの北側、鉄鏃（第 14 図 2）は南側の床から出土した。須恵器提瓶（第 15 図 7）、広口壺（第 15 図 8）は玄門北壁沿いに立てかけられた状態で出土した。（第 13 図）

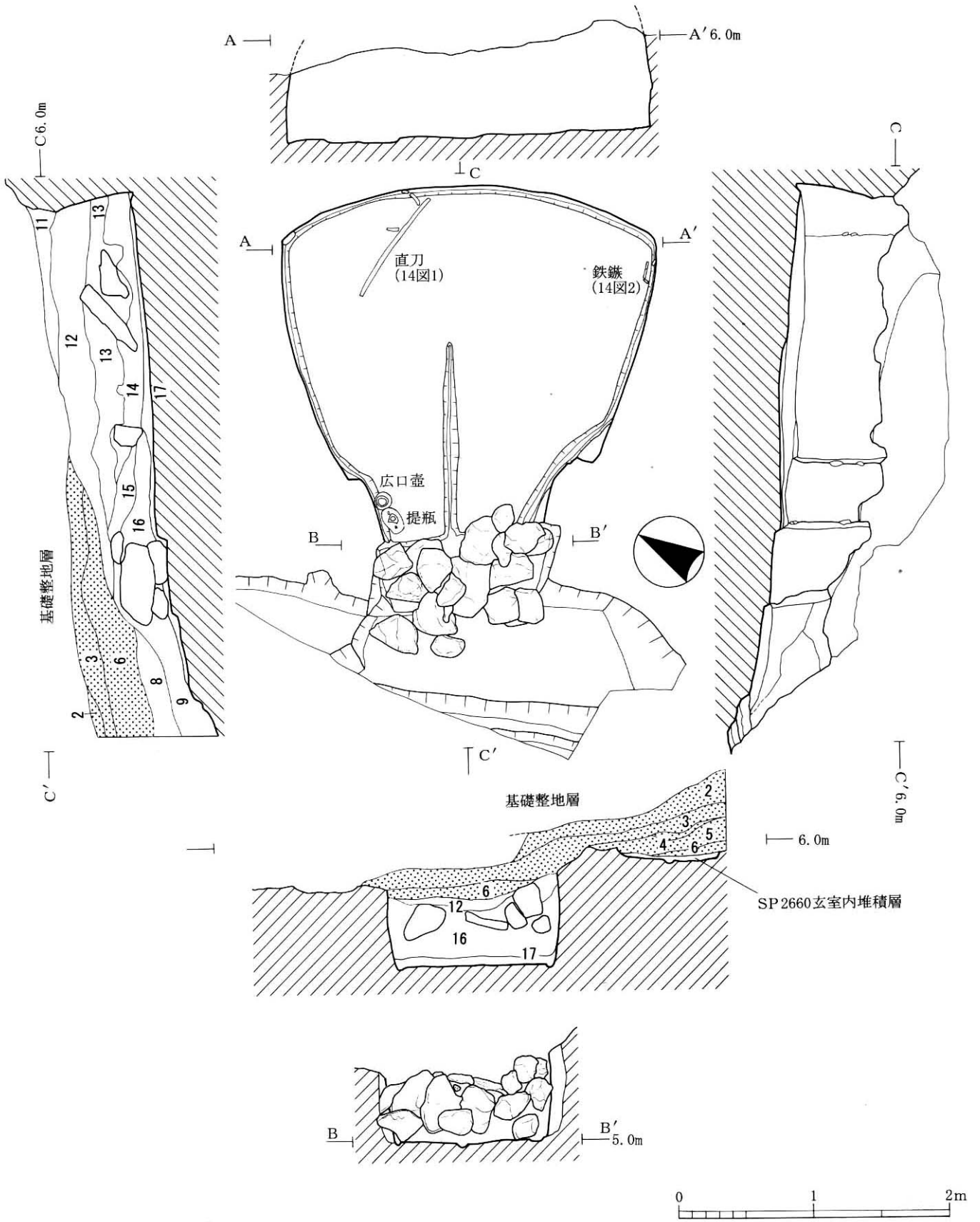
鉄刀（第 14 図 1）は全長約 90cm、身幅約 2.5cm の刀身がほぼ完存する直刀である。錆化が著しく拵えや細部は不明である。茎尻に目釘が残り、その片側に倒卵形で八窓の板鏢の破片が錆着している。鉄鏃（第 14 図 2）は長さ 15cm の長頸の端刃箭で、茎に糸巻きの痕跡が残る。

須恵器提瓶（第 15 図 7）は、口縁部をわずかに欠くがほぼ完形である。単純に開く無文の口頸部で、肩部に鈎手状の鈎手が付く。底部に残る楕円形の焼台痕跡の部分を除き、ほぼ全面に光沢のある黒灰色の光沢を帯びた自然釉がかかる。広口壺（第 15 図 8）は、口縁部がほぼ直立し、肩の張る器形で、体部下半はヘラケズリが施され丸底である。

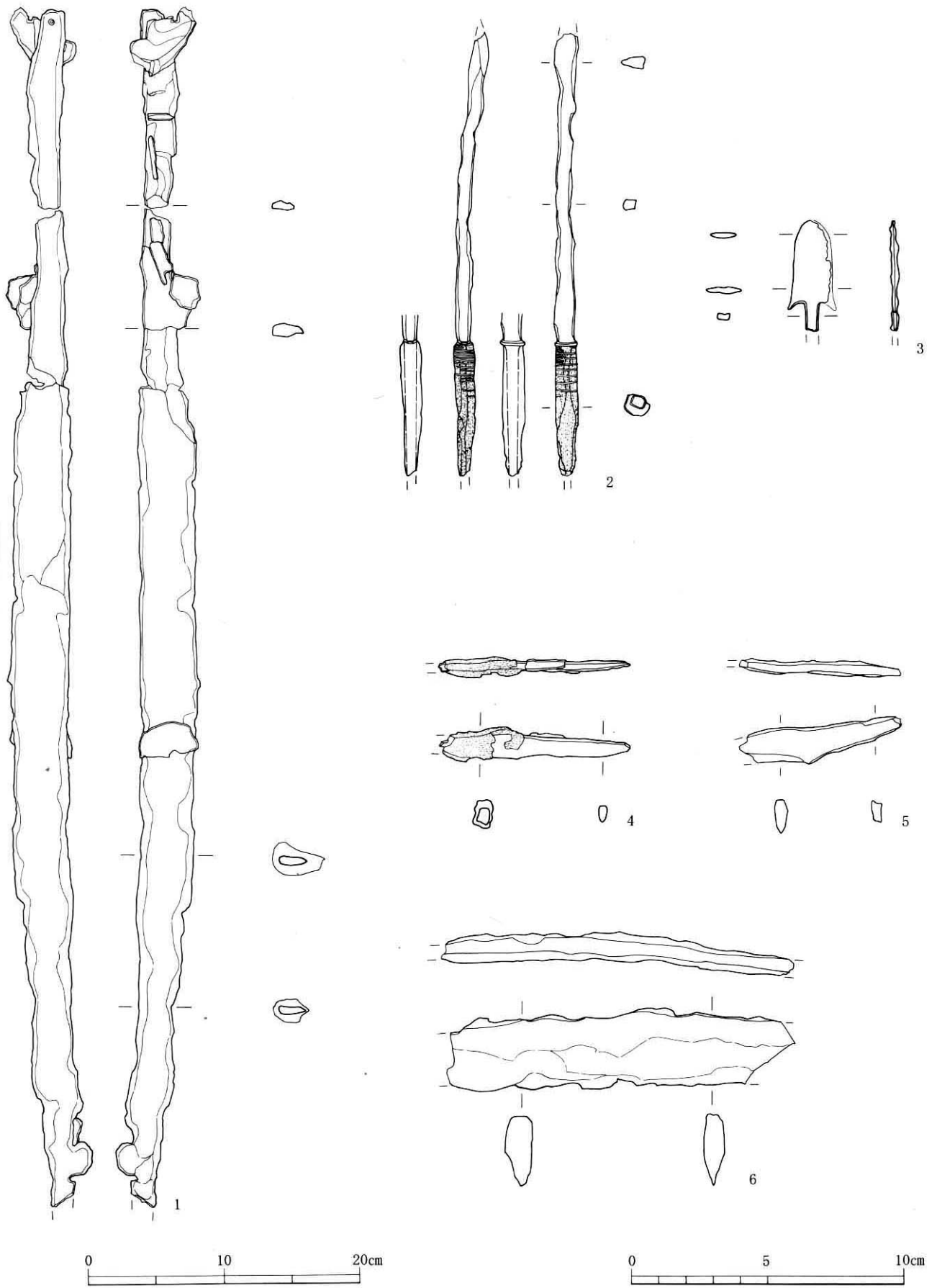
この他、玄室床もしくはその直上の黒褐色土層から、鉄刀、刀装具の破片や鉄鏃破片が出土している。また、玄室内の褐色土層から土師器有段丸底坏、陥没坑に堆積した灰白色火山灰を含む層からは須恵系土器が出土しているが、いずれも小破片で図示できるものはない。

No.	土色	土性	備考	性格
11	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	シルト	凝灰岩片を多量に含む。	天井崩壊土
12	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	凝灰岩片を多量に含む。	
13	褐色 (10YR4/6)	シルト	凝灰岩片を含む。	
14	黒褐色 (10YR2/2)	シルト		玄室内堆積層
15	暗褐色 (10YR3/4)	シルト		
16	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト		
17	黒褐色 (10YR2/2)	シルト		

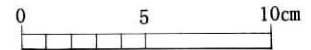
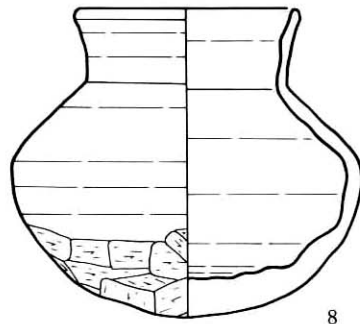
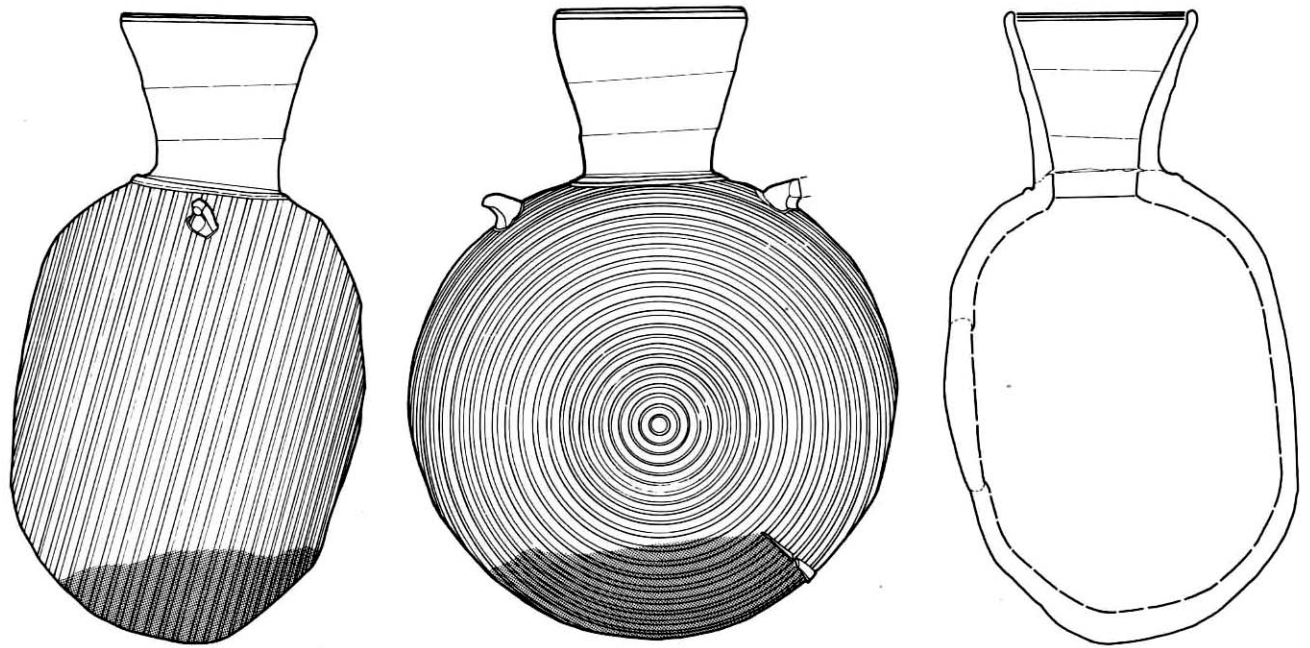
第 13 図 SP2661 横穴墓堆積土層観察表



第 13 图 SP2661 横穴墓



第 14 图 SP2661 横穴墓出土遺物 (1)



第 15 図 SP2661 横穴墓出土遺物（2）

No.	種類	遺構・層位	特 徴	登 録	箱番号	ネガ番号
1	鉄刀	SP2661・床	全長 90 cm、刃幅 2.5 cm、茎尻に目釘穴 1 つ。茎に倒卵形の八窓板鏝の破片が付着。関は不明。	72RM-1	B13242	D23418 D23417-9
2	鉄鏃	SP2661・床	長さ 15 cm の長頸式の端刃箭。茎に矢柄の木質と糸巻きが残る。	72RM-2	B13242	D23417-7
3	鉄鏃	SP2661・床	長さ 4 cm。平根式の逆刺を有する鏃。	72RM-3	B13242	D23417-8
4	刀子	SP2661・床	残存長 7 cm、刃幅 1 cm、刃部に木質が残存。	72RM-4	B13242	D23417-5
5	刀子	SP2661・床	残存長 6 cm、刃幅 1.3 cm、刃部に木質が残存。	72RM-5	B13242	D23417-6
6	鉄刀	SP2661・床	刃部のみの破片。残存長 13 cm、刃幅 3 cm。	72RM-6	B13242	D23417-4

No.	種類	遺構・層位	特 徴	登 録	箱番号	ネガ番号
7	須恵器提瓶	SP2661・床	焼成堅緻。肩部に鈎手状の釣手。底部に焼台痕跡が残る。	SP2661-R1	B13235	D23373A
8	須恵器壺	SP2661・床	焼成軟質。丸底。底部はヘラケズリ。	SP2661-R2	B13235	D23373A

(4) その他の遺構と出土遺物

土壙（S K 2665）、溝跡（S D 2662・2667・2668・2673）、近世に碑文（写真図版 6）が刻まれた自然石（第 10 図）がある。

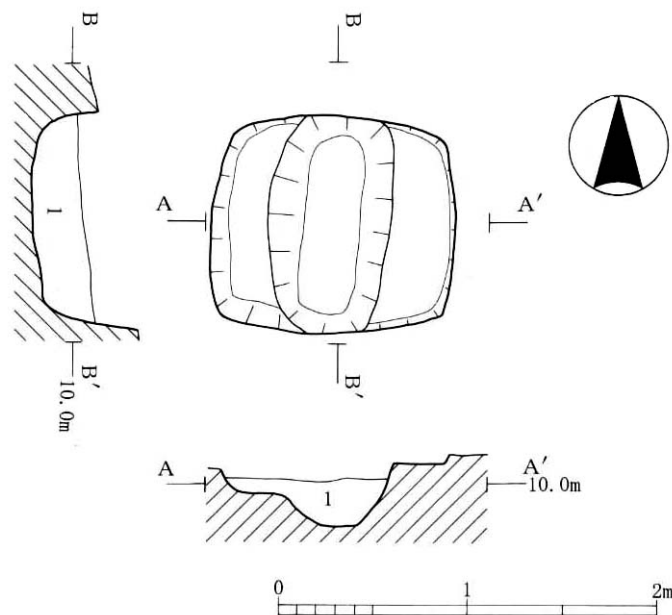
【S K 2665 土壙】

〔位置・検出状況〕 調査区北部の微高地上の現表土直下で検出した（第 2 図）。

〔形態・規模〕 平面形は東西 1.2m、南北 1m の長方形を呈する。底面には凹凸があって、中央部は確認面からの深さが 40cm の深いピット状をなす。基盤の凝灰岩を掘り込んでいて、壁や底面には、掘削に用いた刃幅 5cm 前後の工具痕が残る。

〔堆積土〕 1 層で、砂岩片を多く含む黄褐色土層である。人為堆積とみられる。

〔出土遺物〕 いずれも破片であるが、丸瓦Ⅱ類が 1 点と平瓦ⅡB類 1 点、一枚作りとみられるもの（Ⅱ類）が 1 点出土している。



No.	土色	土性	備考
1	黄褐色 (10YR5/8)	シルト	凝灰岩ブロックを多量に含む。

第 16 図 SK2665 土壙平面図・断面図

【S D 2662 溝】

〔位置・検出状況〕 多賀城碑の西側約 10m に位置する（第 10 図）。南西から北東方向に延びる溝跡で、約 10m 分を検出した。南西から北東の両側は削平されている。

〔他の遺構との重複〕 S X 2664 整地層より新しく、東第 2 層に覆われている。

〔形態・規模〕 幅 2m 前後、深さは 10cm 前後である。

〔堆積土〕 1 層で、褐色土層である。

〔出土遺物〕 近世の瓦の他に古代の土器と瓦および風字碇（第 17 図 3）も出土している。近世の瓦には平瓦片と軒丸瓦があり、軒丸瓦は周縁に珠文を配した三巴文軒丸瓦である。

古代の土器は土師器の甕、須恵器の坏と甕が少量あるが、いずれも小破片資料で図示できるものはない。瓦は摩滅して角のとれた小破片資料が多量に出土している。種類には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦があり、丸瓦と平瓦が主体を占める。軒瓦には 7210-A・B 不明均整唐草文軒平瓦（6）、640 単弧文軒平瓦の他に瓦当面が剥落した軒丸瓦がある。丸瓦は確認できたものはすべてⅡ類である。

平瓦にはⅠA類、ⅡB類、ⅡB類 a タイプ、ⅡB類 b タイプ、ⅡC類がある。

【S D 2667 溝】

〔位置・検出状況〕 調査区中央部で S F 202 築地堀跡の北側約 7m に位置する（第 5 図）。築地堀に並行しほぼ東西方向に延びる溝跡で、約 9m 分を検出した。東西両側は削平されている。

〔他の遺構との重複〕南第3層に覆われている（第6図A-A'）。

〔形態・規模〕築地塀に並行しほぼ東西方向に直線的に延びる幅1m前後の溝跡である。北斜面を削り出していて、断面は浅い「U」字状をなす。深さは南壁で20cm前後である。

〔堆積土〕1層で、褐色土層である。

〔出土遺物〕摩滅して角のとれた瓦の破片資料が少量出土している。種類には丸瓦と平瓦がある。丸瓦はⅡ類で、平瓦はⅠA類、ⅡB類、ⅡB類bタイプである。

【SD2668 溝】

〔位置・検出状況〕調査区中央部でSF202 築地塀跡の北側約8mに位置する（第5図）。築地塀に並行しほぼ東西方向に延びる溝跡で、約10m分を検出した。東西両側は削平されている。

〔他の遺構との重複〕南第3層に覆われている（第6図A-A'）。

〔形態・規模〕築地塀に並行しほぼ東西方向に直線的に延びる幅1m前後の溝跡である。北斜面を削り出していて、断面は浅い「U」字状をなす。深さは南壁で10cm前後である。

〔堆積層〕1層で、褐色土層である。

〔出土遺物〕摩滅して角のとれた瓦の破片資料が多量出土している。丸瓦と平瓦があり、丸瓦はすべてⅡ類である。平瓦はⅠA類、ⅡB類、ⅡB類aタイプ、ⅡB類bタイプ、ⅡC類である。

【SD2673 溝】

〔位置・検出状況〕調査区南西部でSF202 築地塀跡の北側約8mに位置する（第5図）。築地塀に並行しほぼ東西方向に延びる溝跡で、約10m分を検出した。東西両側は削平されている。

〔他の遺構との重複〕南第3層に覆われている（第6図C-C'）。

〔形態・規模〕築地塀に並行しほぼ東西方向に直線的に延びる幅1m前後の溝跡である。北斜面を削り出していて、断面は浅い「U」字状をなす。深さは10cm前後である。

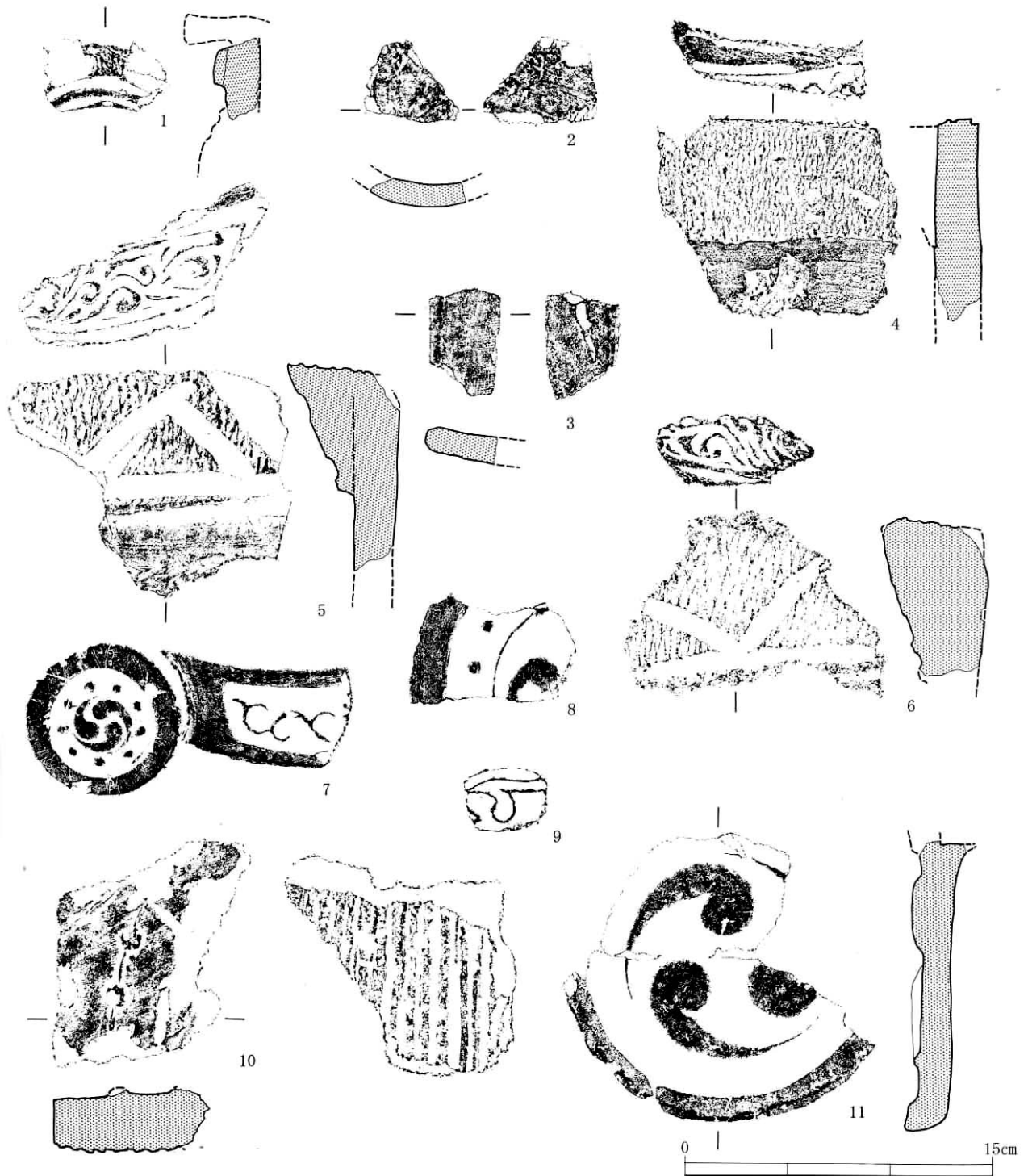
〔堆積層〕1層で、黒褐色土層である。

〔出土遺物〕摩滅して角のとれた瓦の破片資料が少量出土している。種類には丸瓦と平瓦がある。丸瓦は確認できたものはすべてⅡ類で、Ⅰ類は確認できない。平瓦はⅡB類、ⅡC類である。

（5）その他の出土遺物

近世の堆積層である北2層と表土から少量の土器類の他に、古代と近世の瓦が多量に出土している。土器類には古代の土師器、須恵器、須恵系土器の他に近世から現代までの陶磁器類が出土している。これらはいずれも破片資料で図示できるものはない。

近世の瓦には本瓦と棧瓦（第17図7）の2種類ある。本瓦には三巴文軒丸瓦（8・11）、軒平瓦（9）、丸瓦、平瓦があり、これらの瓦は多賀城碑の覆屋に葺かれていた瓦と考えられる。古代の瓦も多量に出土しており、種類としては軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦の他に鬼瓦の破片（10）が出土している。鬼瓦は、中央に配された重弁蓮花文の周縁に珠文と偏向唐草文がめぐる破片で、裏面には篲の子状の圧痕がみられる。この様な特徴は第48次調査で出土した953鬼瓦と共通している。



No.	種類	遺構・層位	特徴	登録	箱番号	ネガ番号
1	軒丸瓦	SX2675 整地層	陰刻花文 (451)、第IV期	R2	B13240	D23406
2	風字硯か?	SX2675 整地層	表面ケズリ、裏面ナデ?	R5	B13240	D23432
3	風字硯か?	SD2662 溝	表面 (凹面) 布目→ナデ?、裏面 (凸面) ナデ	R2	B13240	
4	軒平瓦	SX2675 整地層	均整唐草文 (721)?、第Ⅲ~Ⅳ期	R3	B13240	D23428
5	軒平瓦	SX2675 整地層	均整唐草文 (721-A)?、第Ⅲ~Ⅳ期	R4	B13240	D23385
6	軒平瓦	SD2662 溝	均整唐草文 (721-A・B 不明)、第Ⅲ~Ⅳ期	R1	B13240	
7	軒棧瓦	表土	丸瓦部; 連珠三巴文、平瓦部; 均整唐草文、近世	R3	B13241	D23392
8	軒丸瓦	表土	連珠三巴文、近世	R4	B13241	D23402
9	軒棧瓦	表土	平瓦部; 均整唐草文、近世	R7	B13241	D23393
10	鬼瓦	表土	953 鬼瓦、裏面簀の子状圧痕、第Ⅱ期	R1	B13241	D23425・23426
11	軒丸瓦	表土	三巴文、近世	R2	B13241	D23416

第 17 図 SX2675 整地層出土遺物・その他の出土遺物

4. 考察

第72次調査で検出した主な遺構は、南辺築地塀跡に関連する遺構、政庁－南門間道路跡に関連する遺構、横穴墓がある。以下、要点を整理し、これまでの調査の各成果と比較検討することで、本地区のそれぞれの遺構の変遷・年代・性格について考察する。

(1) 南辺築地塀跡について

今回の調査で確認された築地塀跡とその補修および崩壊土、整地層の関係は次のように整理される。

築地塀跡、崩壊土、嵩上げ整地層の層位関係

【a 築地塀跡とその補修】

- ・ a 築地塀跡に b～e の4回の補修が確認された。
- ・ S X 2670・2671・2676 土壌は、S X 2670 土壌が c 補修以前、S X 2671 土壌が b 補修以後で d 補修以前であるが、ほぼ等間隔で並ぶこと、規模・形状が類似すること、堆積土が類似することなどから同時期に構築された一連の遺構である可能性が高く、その時期は層位関係が明確な S X 2670・2671 土壌のありかたからみて、b 補修以後で c 補修以前と考えられる。

- ・ これらの新旧関係は次のように整理される。

S F 202 a 築地塀→ b 補修→ (S X 2670・2671・2676 土壌) → c 補修→ d 補修→ e 補修

【崩壊土、整地層の層位関係】

- ・ 築地塀北側には崩壊土が5層と、整地層が3層堆積している。
- ・ 築地塀南側には崩壊土が2層と整地層が1層堆積している。
- ・ 築地塀南北両側の層の対比により、堆積層は次のように整理される。

築地塀北側の堆積層	築地塀本体	築地塀南側の堆積層
南第3層 (崩壊土)		
南第4層 (崩壊土)		南第4層 (崩壊土)
南第5層 (整地層)	e 補修	南第5層 (整地層)
南第6層 (崩壊土)	c・d 補修	南第6層 (崩壊土)
南第7層 (整地層)	SX2670・2671・2676 土壌	
南第8層 (崩壊土)		
南第9層 (整地層)	b 補修	
南第10層 (崩壊土)	a 築地塀跡	

- ・ なお、南側の堆積層が少ないのは補修にともなって築地基底まで堆積層を削り出したためと考えられる(註)。

【築地塀跡と堆積層の関係】

- ・ 南第10層は a 築地塀の北側犬走り北辺の S D 2674 溝を埋めていることと、南第9層 (b 補修に伴う嵩上げ整地層) の下層にあることから、b 補修以前の崩壊土と考えられる。
- ・ 南第9層は a 築地塀の崩壊土 (南第10層) 上にあり、b 補修積み土の下層にあることから、b 補修に伴う犬走りの嵩上げ整地層とみられる。
- ・ 南第8層は b 補修に伴う嵩上げ整地層 (南第9層) の上にあり、S X 2669 土壌を覆うこと、南第7層は S X 2669 土壌の下層にあることから、南第8層は b 補修後の崩壊土で、南第7層は S X 2669 土壌

の構築に伴う整地層と考えられる。

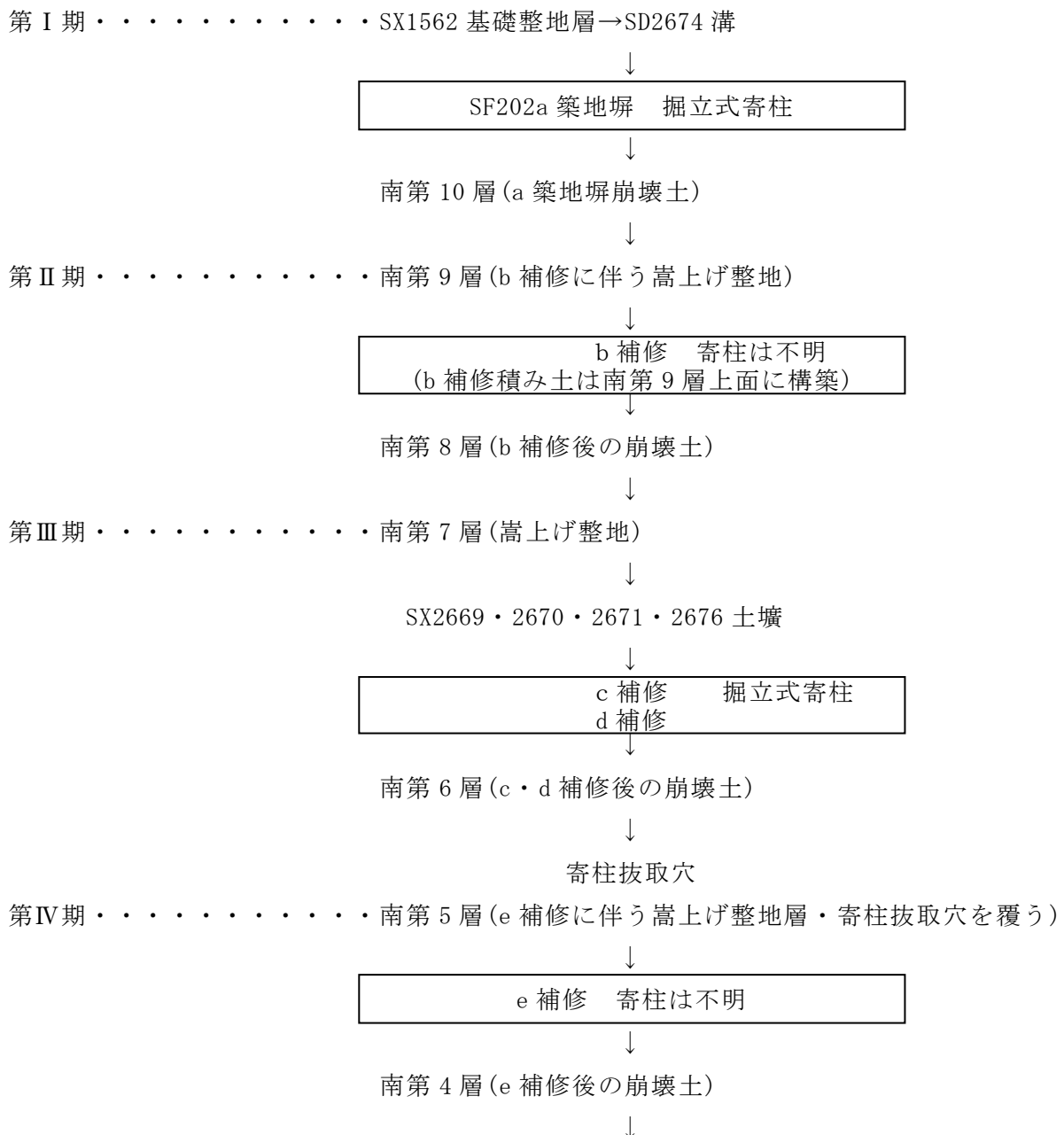
・南第6層はe補修積み土の下層にあり、S X2669 土壌を覆っていることから、e補修前でc補修後の崩壊土と考えられる。

・寄柱抜取穴(P18・43)は、b補修積み土との関係からc補修以後で、南第6層を掘り込んでいることから、d補修における柱の抜取穴である可能性が高いと考えられる。したがって寄柱穴はc補修に伴うと考えられる。また、抜き取り穴を直接覆う南第5層はd補修後で、e補修に伴うと考えられる。

・南第3・4層はe補修積み土の上であり灰白色火山灰層の下にあることから、e補修後で灰白色火山灰降下以前の崩壊土と考えられる。

【築地塀跡と堆積層の変遷】

以上のことから、S F202 築地塀跡に関連する遺構と堆積層の変遷は、次のように整理される。



南第3層（e 補修以降、灰白色火山灰降下以前の崩壊土）



南第2層（灰白色火山灰層）

これまでの調査成果との対比

【南辺築地塀跡に関わるこれまでの調査成果】

南辺築地塀に関わるこれまでの調査成果（第7・8・20・34・48次）を南門の東西に分けて概括すると次のようになる。（表3）

外郭南門西側（第8・20次調査）

【第Ⅰ期】基礎整地上に版築された築地塀S F 202A。基底幅が2.7mで寄柱は掘立式。

【第Ⅱ期】S F 202Aに部分的補修をした礎石式寄柱の築地塀S F 202B（第8次調査）。

【第Ⅳ期】焼土を含む整地層上に版築されたS F 202C（第20次調査）。

外郭南門東側（第7・34・48次調査）

【第Ⅰ期】基礎整地上に版築された基底幅2.7mで掘立式寄柱のS F 202A築地塀。

【第Ⅱ期】S F 202築地塀上部を削平して版築した礎石式寄柱の築地塀。

基底幅は、第7次では2.6m、第48次では2.7m、第34次では3.1m。

第7次調査では礎石上で焼土層を確認している。

【第Ⅲ期】S F 202築地塀上部を削平して版築した基底幅2.4mの築地塀。

寄柱は、第24次では掘立式、第34・48次では礎石式である。

【第Ⅳ期】築地塀上部を削平して版築し、基底部に瓦列を伴う基底幅2.1mの築地塀。

寄柱は、第24・34次では掘立式、第7・48次では礎石式である。

【第Ⅳ期後半】掘立式で基底部に瓦列をともなう第34次調査の築地塀S F 202E。

【今回の南辺築地塀跡の位置づけ】

今回の調査では、S F 202築地塀跡に関わる火災の痕跡や出土遺物などの時期的位置付けをおこなう具体的な資料は得られなかった。しかし、今回の築地塀跡の調査成果をこれまでの南辺築地塀の調査成果と比較すると、a築地塀跡は、基礎整地上に版築された基底幅2.6mの掘立式寄柱の築地塀であることから、これとほぼ同様の規模・構造とみられる第7・8・20・34・48次調査のS F 202Aと一連のものと考えられ、a築地塀跡については政庁遺構期の第Ⅰ期に位置付けられる。一方、e補修は、基底部に瓦列を伴う特徴から、第7次調査で瓦列が確認されたS F 202Cに共通する構造をもつものとみられ、第Ⅳ期に位置付けられる。

b・c・d補修については、前項でみたようにS X 2670・2671・2676土壌が伊治公告麻呂事件後の築地塀補修に先立って配置された外郭南辺の大改修に関わる一連の遺構とみられることから、それ以前のb補修は政庁遺構期の第Ⅱ期以前に、それ以後のc・d補修は第Ⅲ期以後に位置付けられる。これまでの調査成果と比較すると、b補修はa築地塀跡の部分的な補修である点で第8次調査のS F 202Bに類似し、c補修は掘立式寄柱である点で、第24次のS F 202B'もしくは、第24次のS F 202

C、第34次のSF202Dに共通した構造を有すると言える。これらのことから、b補修は第Ⅱ期に、c補修は第Ⅲ期に位置付けられる可能性がある。

築地塀跡に関わる問題

【S X 2670・2671・2676 土壌について】

今回の調査で、南門西側の築地塀跡の軸線上に約5.8mの等間隔で並ぶS X 2670・2671・2676 土壌を確認した。時期は、S X 2670 土壌はc補修以前、S X 2671 土壌はb補修以後でd補修以前であるが、ほぼ等間隔で並ぶこと、規模・形状が類似すること、堆積土が類似することなどから同時期に構築された一連の遺構である可能性が高く、層位関係が明確なS X 2670・2671 土壌のありかたからみて、b補修以後でd補修以前と考えられる。

また、S X 2670・2671・2676 土壌は、築地塀上部を削り取る大規模な改修であることから、これらは伊治公咎麻呂事件後、第Ⅲ期の築地塀補修に先立って配置された外郭南辺の大改修に関わる一連の遺構とみておきたい。その具体的な性格として、柱痕跡は確認されていないものの、一辺1m前後の隅丸瓦方形でほぼ等間隔に並ぶことから、柱列の抜取穴である可能性を考えたい。これは、第7・48次調査で、第Ⅱ期の外郭南門が伊治公咎麻呂事件による焼失した後、第Ⅲ期の南門が建設されるまでの間の仮の遮蔽施設であった可能性が指摘されているS A 1538 柱列に対応するものと考えられる。

【外郭南門と西側築地塀の接続部分について】

外郭南門とその西側の築地塀の接続部分は削平により積み土が完全に失われ、その細部を検討することはできない。ただし、残存する基礎整地の範囲とその西側の積み土の方向から推測して、築地塀は南門の梁間中央に6度前後の傾きをもって接続していたと考えられる。

また、基礎整地の上面とその西側の積み土の版築の層理面が西方に下降していることから、南門西側の築地塀の屋根は水平に葺かれたのではなく10度前後の傾斜をもっていたと考えられる。

(註)

第48次調査では、南門東側の築地塀南側は火災以前に地山を削りだしていることが確認されている。

年代 (西暦)	政庁遺構期 事件等	第20次調査 (南門の西100m)	第8次調査 (南門の西80m)	第48次調査 (南門の西隣接)	第72次調査 (南門の西隣接)	南門跡	第7次調査 (南門の東隣接)	第48次調査 (南門の東隣接)	第34次調査 (南門の東230m)	第24次調査 (外郭南東隅)
750	724 創建	SX216 基礎整地 SF202A 築地塀跡 寄柱不明	SX216 基礎整地 SF202A 築地塀跡 掘立式寄柱 基底幅 2.7m	SX1562 基礎整地 SF1566A 築地塀跡 寄柱不明 基底幅不明 積み手の違い 5.7m 間隔	SX1562 基礎整地 a 築地塀 掘立式寄柱 基底幅 2.6m 積み手の違い 5.8m 間隔	SA1536 柱列	SF202A 築地塀跡 掘立式寄柱 基底幅 2.7m	SF202A 築地塀跡 掘立式寄柱 基底幅 2.7m	SF202A 築地塀跡 寄柱不明 基底幅不明	SX773 基礎整地
	762 修造									
		II 期		SF202B 築地塀跡 礎石式寄柱 基底幅不明 部分的補修	SD1558 溝跡	b 補修 寄柱不明 基底幅不明 部分的補修	SB201A 門跡 礎石式門跡	SF202B 築地塀跡 礎石式寄柱 基底幅 2.6m	SF202B 1 築地塀跡 礎石式寄柱 基底幅 2.7m A を削平し版築	SF202B 築地塀跡 礎石式寄柱 基底 3.1m 両側に溝跡 A 上部に版築
	780 皆麻呂攻撃					焼失				
850	800	焼土を含む整地			SX2670・2671・2676	SA1538 柱列	焼土堆積			
		III 期		SF1556B 築地塀跡 寄柱不明 A 上部に版築	c 補修 掘立式寄柱 a・b 上部に版築 d 補修	SB201B 門跡 礎石式門跡	SF202B2 築地塀跡 礎石式寄柱 基底幅 2.4m B1 を削平し版築	SF202C 築地塀跡 礎石式寄柱 基底幅 2.4m B 上部に版築	SF202C 築地塀跡 礎石式寄柱 基底幅 2.4m B 上部に版築	SF202B' 築地塀跡 掘立式寄柱(6 回立替) 基底幅 2.4m
	869 貞観の地震									
	900	IV 期 (補修?) 崩壊土								
	火山灰降下	SF202C 築地塀跡 寄柱不明			e 補修 寄柱不明 基底幅不明 瓦積	不明 SB201B 門継続?	SF202C 築地塀跡 寄柱不明 基底幅 2.1m 瓦敷	SF202C 築地塀跡 礎石式寄柱 基底幅 2.1m	SF202D 築地塀跡 掘立式寄柱 基底幅不明 B・C 上部に版築	SF202C 築地塀跡 掘立式寄柱 基底幅不明 B 上部に版築
					南第2層 (灰白色火山灰)				SF202E 築地塀跡 掘立式寄柱 基底幅 2.3m 直交する方向の瓦列	

表3 南辺築地塀跡の調査成果 対応表

(2) 政庁－南門間道路跡に関連する遺構について

南門北側で古代の溝4条と整地層を発見した。溝と整地層は位置関係から城内の主要道路である政庁－南門間道路跡の側溝と路面下の整地層とみられる。今回発見された堆積層、溝、整地層の特徴を概括し変遷を検討する。

堆積層、溝、整地層の新旧関係

南門北側では、基盤の凝灰岩が東第2層（近世以降の堆積層）で直接覆われ、古代の遺構の残りは悪いが、窪地などには部分的に灰白色火山灰を含む東第3層が残存し、その下層に東第4層や溝、整地層がある。これらの新旧関係を検討する。

【堆積層と整地層】

- ・ S X 2664 整地層は政庁中軸線の西側で検出し、政庁遺構期第Ⅳ期の瓦が含まれることから、第Ⅳ期以降の整地層と考えられる。
- ・ S X 2675 整地層は政庁中軸線の東側で検出し、東第4層に覆われる。
- ・ S X 2664 整地層と S X 2675 整地層との新旧関係は不明である。

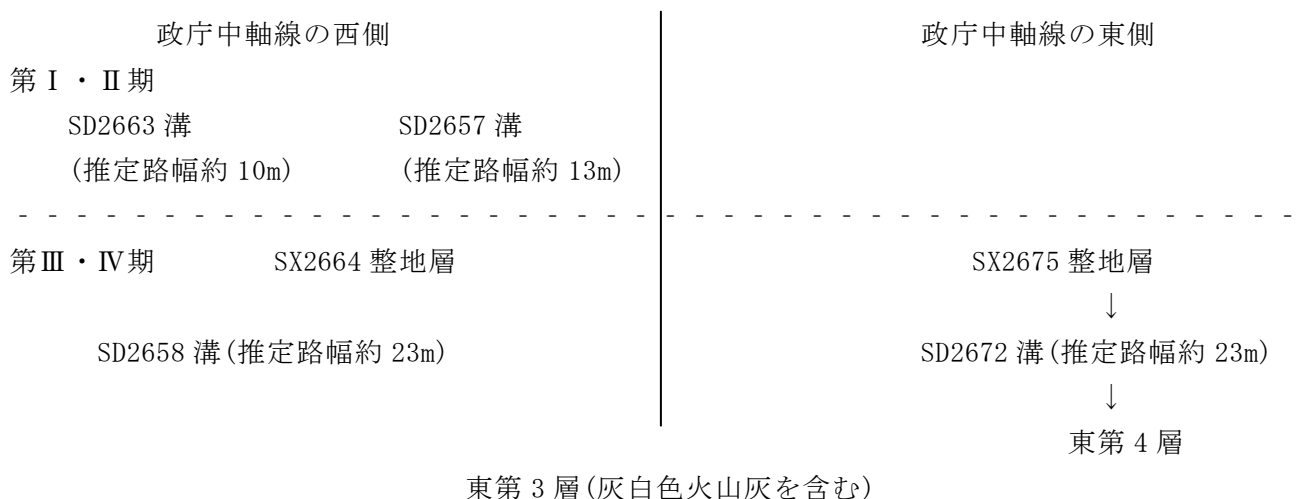
【政庁中軸線の東側の溝】

- ・ 政庁中軸線の東側にある S D 2672 溝は、東第4層に覆われ、S X 2675 整地層を掘り込んでいる。
- ・ S D 2672 溝は、S D 2658 溝と対をなす政庁－南門間道路東側溝と考えられ、路幅は23mである。

【政庁中軸線の西側の溝】

- ・ 政庁中軸線の西側にある S D 2663 溝、S D 2657 溝、S D 2658 溝の層位的新旧関係は不明である。
- ・ S X 2664 整地層は S D 2663・2657 溝を覆い、S D 2658 溝との関係は不明である。
- ・ これら3条の溝は、時期の異なる政庁－南門間道路西側溝と考えられ、政庁中軸線で折り返した推定路幅は S D 2663 溝が約10m、S D 2657 溝が約13m、S D 2658 溝が約23mである。
- ・ これまでの調査成果により、政庁－南門間道路が路幅約23mに拡幅されるのは政庁遺構期の第Ⅲ期とみられることから、S D 2672 溝、S D 2658 溝は第Ⅲ期以降の道路側溝と考えられる。

以上の政庁－南門間道路跡に関連する遺構および堆積層の新旧関係は、次のように整理される。



時期設定

今回の調査では、政庁－南門間道路跡に関わる遺構について、層位関係や出土遺物など年代や時期推定が可能な資料は得られなかった。しかし、これまでの政庁－南門間道路跡に関わる第 43・44・50 次調査の成果をまとめた第 50 次調査成果と比較することで、各遺構の時期推定と変遷を検討する。

【これまでの調査成果との対比】

政庁南門南側の第 50 次調査により、政庁－南門間道路跡である「S X 1604 道路跡」は、盛土や側溝、石列などの位置関係から、A、B、C の 3 時期の変遷があり、A、B 期はさらに各 2 つの小期に分かれると推定した。各時期の推定路幅は政庁中軸線で折り返した数値で次のようになる。

S X 1604 道路跡 A 1 期 : 推定路幅約 13m

S X 1604 道路跡 A 2 期 : 推定路幅約 11m

S X 1604 道路跡 B 1・2 期 : 推定路幅約 13m

S X 1604 道路跡 C 期 : 推定路幅約 23m

各期は、出土遺物などの検討から A 期が政庁遺構期の第 I 期、B 期が第 II 期、C 期が第 III・IV 期となる。

今回の第 72 次調査区と第 50 次調査区は距離にして 200m 以上離れていることから、第 50 次調査の推定路幅や時期変遷について詳細な対比はできないが、これまでの調査成果により、政庁－南門間道路が路幅約 23m に拡幅されるのは政庁遺構期の第 III 期とみられる点は、時期推定の大きな指標となる。そこで、今回発見された溝の位置関係を、第 50 次調査各期の路幅と比較すると、S D 2658・2672 溝は路幅が約 23m と推定され、S X 1604 道路跡 C 期に対応する政庁遺構期の第 III 期以降のものと考えられることができる。S D 2657 溝は推定路幅が約 13m と推定される S X 1604 道路跡 A 1 もしくは B のいずれかに対応することから、政庁遺構期の第 I・II 期のものとみられる。また、S D 2663 溝は中軸線で折り返した場合の推定路幅が約 10m であることから、第 50 次調査の A 2 期に対応し、政庁遺構期の第 I 期のものとみられる。整地層については S D 2658・2672 溝の間に分布する S X 2664 整地層が出土遺物から第 IV 期以降のものであり、S X 1604 道路跡 C 期における整地層と考えられる。

【路面について】

南門北側における政庁－南門間道路跡の本来の路面は、浸食により失われていて推定困難である。調査では、本来の道路敷に基盤の凝灰岩中に含まれるアルコース砂岩塊を 20 個以上検出した(第 10 図)。これらは上部が浸食により現れたものの基底部分は岩盤中に元位置を留めているとみられる(註)。これらが古代の路面に露出していたとは考え難く、したがって本来の路面の高さはこれらの岩塊の上端よりも高く、今回検出された S X 2664・2675 整地層よりも 30～50cm 高かったものと推定される。

この他、道路側溝と道路跡の変遷もしくは南門への取り付け方など、解明すべき点が多いが、来年度は第 73 次調査として本年度実施した第 72 次調査のすぐ東側を調査する予定であり、来年度の報告で総括することとしたい。

(註)

アルコース砂岩については『年報 1997』「付編 1. 多賀城碑の石材の供給源の検討」(永広昌之)を参照

(3) 横穴墓について

第 48 次調査で外郭南門地区西側に「田屋場横穴墓群」が分布することを確認した。今回、築地塀北側の基礎整地層下で新たに横穴墓 2 基を確認したことで、第 48 次調査で発見された築地塀南側の 3 基とあわせ、計 5 基の横穴墓を確認したことになる。地形からみると築地塀本体の基礎整地層下や第 72 次調査区の北西には、さらに複数の横穴墓が埋没していると推定される。ここでは、これらの横穴墓についてその造営年代を検討し、主に南辺築地塀との関係を考察する。

横穴墓出土遺物の年代

S P 2661 横穴墓からは、玄室床から鉄製品が、玄門床から須恵器が出土している。このうち、玄室床出土の直刀・刀子・鉄鏃は錆により細部の特徴が不明確で年代を検討することができない。玄門床出土の須恵器提瓶、壺のうち、提瓶は肩部に付された釣り手が突起状をなす特徴から、大阪府陶邑窯跡群の須恵器編年における T K 43~209 型式に比定され、6 世紀後葉から 7 世紀前葉の年代が想定される（田辺：1981）。壺も丸底で広口であるという器形的特徴から同様の年代が想定され、これらは出土状況から横穴墓に伴うもので、その年代観は横穴墓造営年代の一端を示すと考えられる。

S P 2660 横穴墓は出土遺物がないが、S P 2661 横穴墓の前庭部の壁面を掘り込んでいることから、これよりも新しい年代のものである。

第 48 次調査では、S P 1559・1560 横穴墓出土土器の検討から、横穴墓造営年代を 7 世紀後葉から 8 世紀前葉と想定している。今回発見された S P 2661 横穴墓出土遺物は、田屋場横穴墓群の造営年代の上限が 6 世紀後葉から 7 世紀前葉まで遡り得ることを示している。なお、田屋場横穴墓群の西側に広がる沖積平野には、古墳時代後期の集落跡である「山王・市川橋遺跡」が立地している。これらの集落跡は 6 世紀後半から 7 世紀代に存続しており（宮城県教育委員会：2001.3）、これらの集落の居住者が田屋場横穴墓群の造営に深く関わったものと考えられる。

横穴墓と築地塀基礎整地との関係

第 48 次調査の S P 1559・1560 横穴墓については、天井の残る玄室内部を空洞のまま残して入り口を S X 1562 基礎整地により塞いでいる。今回の S P 2661 横穴墓も、前庭部から羨道部の天井崩落土を覆うように基礎整地がなされていることから、天井の残る玄室内部を空洞のまま残して入り口を基礎整地により塞いでいることが判明した。ただし、玄室部の天井崩落土の上には灰白色火山灰を含む自然堆積層がみられることから、築地塀構築時に残っていた天井部がその後崩壊し、灰白色火山灰が降下した 10 世紀前半頃には玄室上部が窪みとなっていたと考えられる。これに対し、S P 2660 横穴墓は、基礎整地が玄室床上堆積層を直接覆い、他の堆積層や天井崩落土がみられないことから、築地塀基礎整地時に天井が削り取られ埋められたことがわかる。

引用文献

- 古代の土器研究会編 1992 『古代の土器 1 都城の土器集成 I』
古代の土器研究会編 1993 『古代の土器 2 都城の土器集成 II』
古代の土器研究会編 1994 『古代の土器 3 都城の土器集成 III』
白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」 『宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要』 VII
田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
中村浩編 1997 『須恵器集成図録 第6巻 補遺・索引編』
宮城県多賀城跡調査研究所 1971 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1970』
宮城県多賀城跡調査研究所 1975 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1974』
宮城県多賀城跡調査研究所 1980 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1979』
宮城県多賀城跡調査研究所 1980 『多賀城跡 政庁跡 図録編』
宮城県多賀城跡調査研究所 1982 『多賀城跡 政庁跡 本文編』
宮城県多賀城跡調査研究所 1986 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1985』
宮城県多賀城跡調査研究所 1998 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1997 一第 68 次調査・多賀城碑覆屋
解体修理一』
宮城県教育委員会 2001 『山王遺跡八幡地区の調査 2』 宮城県文化財調査報告書第 186 集

Ⅲ. 現状変更に伴う調査

特別史跡多賀城跡附寺跡内において、平成7年度から平成10年度までに行った現状変更に伴う発掘調査8件について、地区ごとに報告する。

1. 多賀城跡五万崎地区(第18図)

(1) 鈴木清住宅の発掘調査

位置：市川字五万崎 38-4・5 調査期間：平成10年9月8・9日

原因：住宅増改築 発掘調査面積：29㎡

1) 調査区

外郭西門跡の南約60mに位置し、外郭西辺築地堀跡の東側にあたる。標高は約13mでほぼ平坦であるが、南側が緩やかに傾斜し低くなる。調査区は南北約2.5m、東西約11.5mの方形で、発掘面積は約29㎡である。

2) 基本層序

基本層序は表土である第1層(黒褐色土)、10世紀前葉に降下した灰白色火山灰(註)である第2層、黒褐色土である第3層、地山である第4層(明黄褐色土)の4層に区分した。

3) 発見した遺構と遺物 (第19図、写真図版11-1)

発見した遺構に土壇1基と溝1条、ピット3個がある。S K 2568 土壇とS D 2569 溝は灰白色火山灰層との関係から10世紀前葉より新しいものと判断できる。

【S K 2568 土壇】 調査区西で第2層(灰白色火山灰層)上面から確認した。土壇として扱っているが、遺構の大部分が調査区外のため溝の可能性もある。規模は長軸で1m90cm以上、深さ55cmほどである。堆積層は黒褐色土と暗褐色土の2層で自然堆積層である。堆積層からの出土遺物に土師器甕の破片がある。

【S D 2569 溝】 調査区東で第2層(灰白色火山灰層)上面から確認した。幅60～70cm、深さ40cm、断面形が台形の溝で南北方向に延びる。堆積層は黒褐色土で自然堆積層である。堆積層からの出土遺物に土師器杯の破片と須恵器杯の破片、平瓦ⅡB類aタイプ(政庁第Ⅱ期)1点と丸瓦Ⅱ類2点がある。

【S X 2570～2572 ピット】 調査区西でS K 2569 土壇底面で検出した。いずれも一辺14～22cmの方形で、堆積層は褐灰色土である。S X 2570 ピットからの出土遺物に、土師器杯・甕の破片、須恵器杯・壺・甕の破片、平瓦ⅡB類5点(政庁第Ⅱ期が4点)と丸瓦Ⅱ類6点(政庁第Ⅱ期が4点)がある。

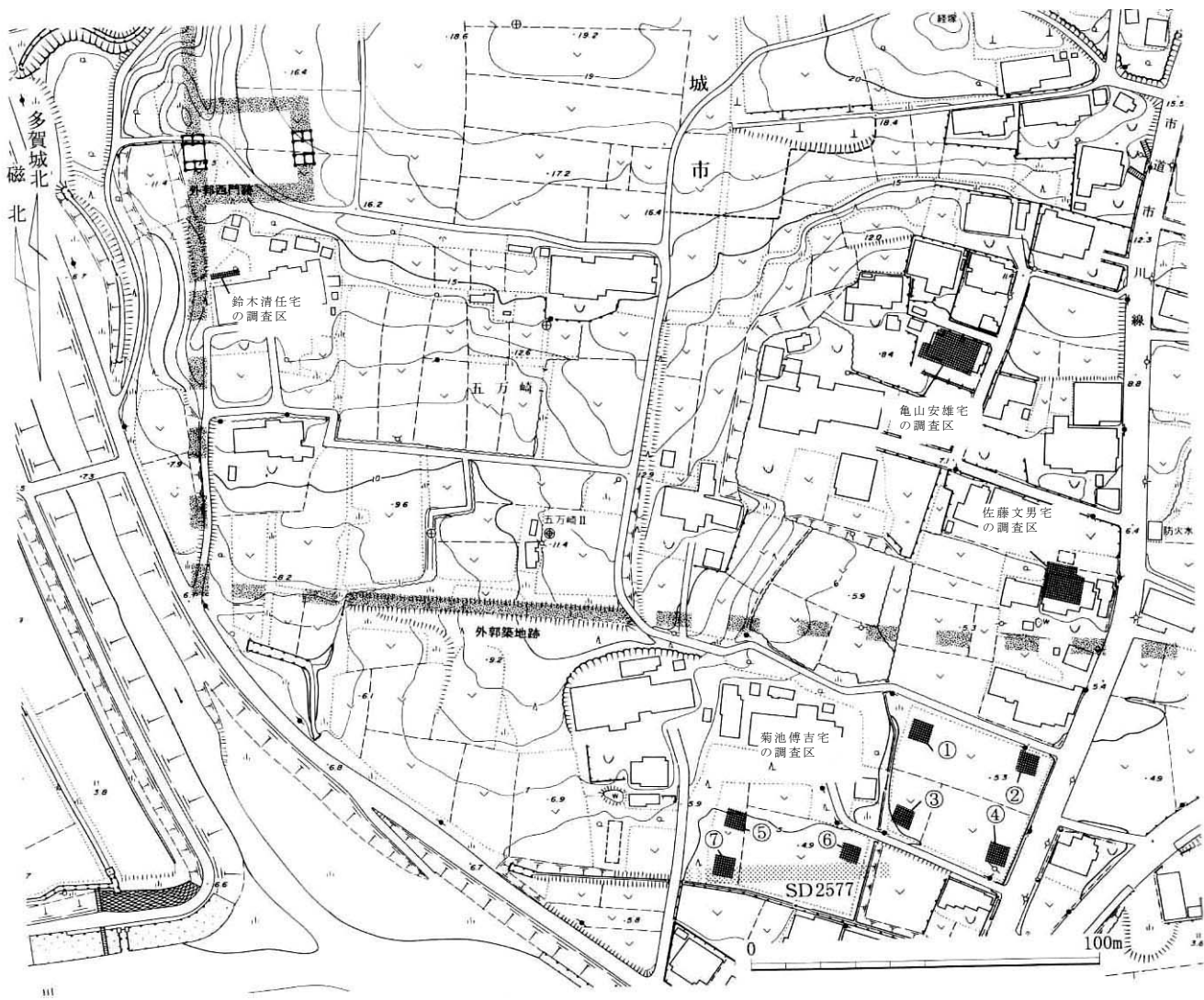
【遺構外出土の遺物】

基本層序第1～3層および調査区中央の攪乱から、遺物収納平箱7箱分の土師器、須恵器、瓦などが出土した。出土した遺物の多くは破片である。内容がわかるものに次のものがある。

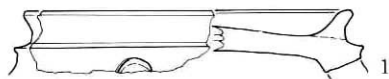
第3層：土師器杯・甕、須恵器杯・壺・甕、鉄滓1点、平瓦ⅡB類(刻印「物」Aが2点、「田」Aが1点、刻印があるものは政庁第Ⅱ期)。なお土師器甕には製作にロクロを使用しているものを含む。

第2層：須恵器杯・甕。

第1層：土師器杯・高台杯・甕、須恵器杯・壺・甕・蓋、円面硯(第19図1)。

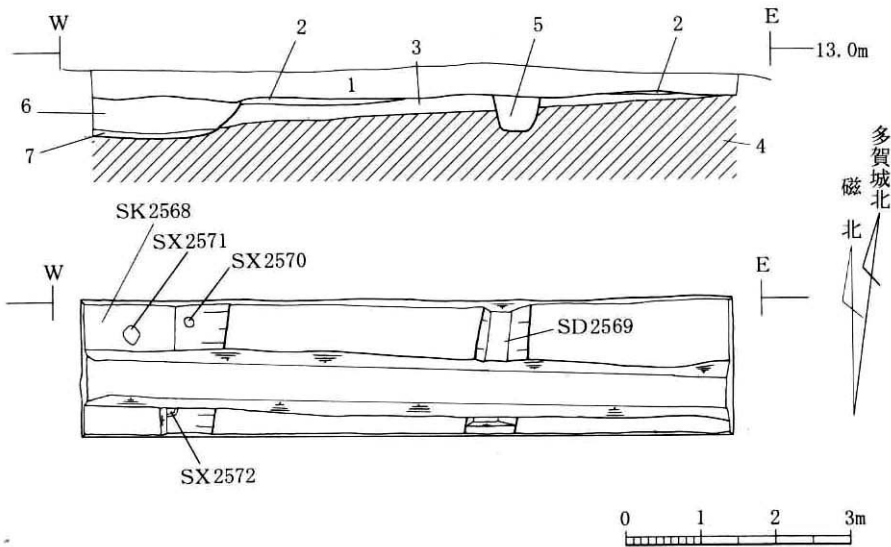


第18図 五万崎地区発掘調査区



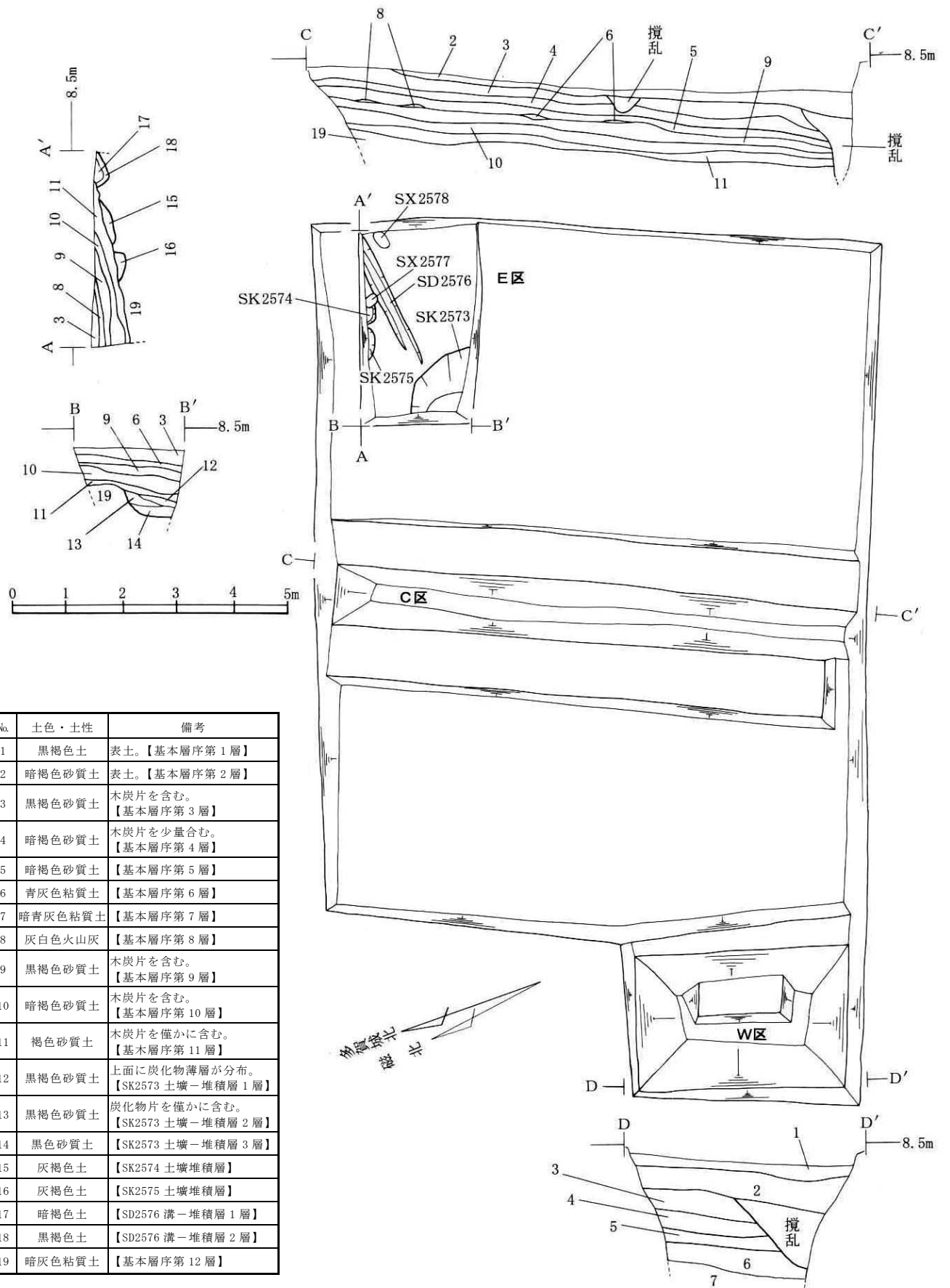
(縮尺1/3)

No.	種類	層位	特徴	登録	箱番号
1	円面硯	1層	円窓1箇所確認	R5	13001



No.	土色・土性	備考
1	黒褐色土	しまりなし。表土。 【基本層序第1層】
2	灰白色火山灰	【基本層序第2層】
3	黒褐色土	しまっている。 【基本層序第3層】
4	明褐色土	地山。 【基本層序第4層】
5	黒褐色土	基本層序第2層 上面より検出 【SD2569 溝堆積土】
6	黒褐色土	全体に炭粒を含む。 基本層序第2層上 面より検出。 【SK2568 土壌-堆積層1層】
7	暗褐色土	地山粒を若干含む。 【SK2568 土壌-堆積層2層】

第19図 鈴木清任宅の発掘調査平面図 (1/100)・断面図 (1/100)・出土遺物



第20図 亀山安雄宅の発掘調査平面図(1/100)・断面図(1/100)

攪乱：宝相花文軒丸瓦(423番：政庁第Ⅳ期)、平瓦ⅡB類(刻印「物」Aが1点、「矢」Bが1点：政庁第Ⅱ期)、中世陶器頸部破片1点。

(2) 亀山安雄宅の発掘調査

位置：市川字五万崎 28

調査期間：平成9年6月25日～7月3日

原因：住宅改築・浄化槽の設置

発掘調査面積：143 m²

1) 調査区

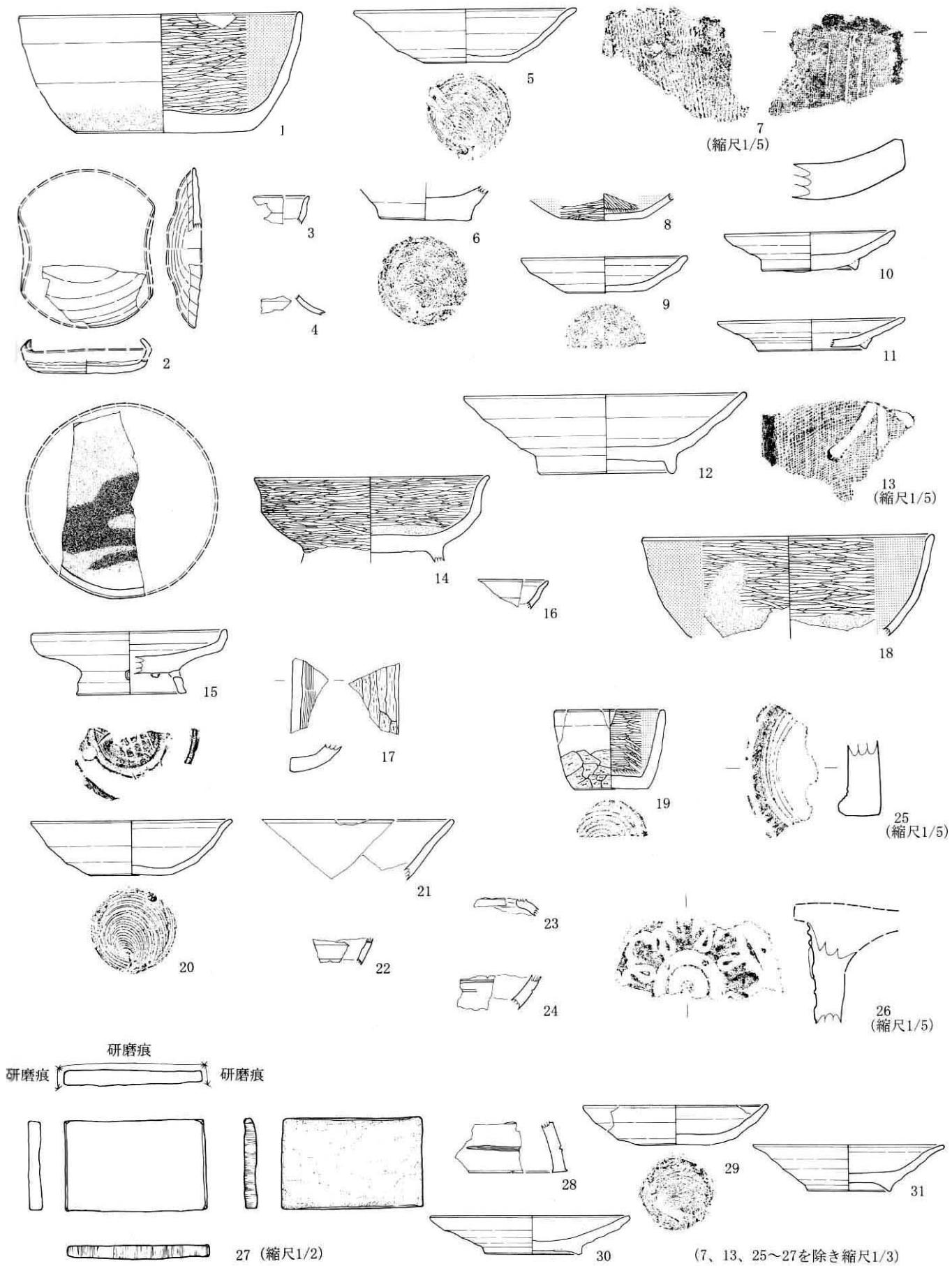
外郭西門跡の東約200mにあたる。坂下地区の位置する丘陵と五万崎地区の位置する丘陵の間で、幅の広い沢地である。標高は約8.5mでほぼ平坦であるが、南側が緩やかに傾斜し低くなる。調査区は南北約10m、東西約16mの不整形で、発掘面積は約143 m²である。

2) 基本層序

基本層序は表土である第1・2層(黒褐色土・暗褐色砂質土)・砂質土である第3～5層(黒褐色砂質土・暗褐色砂質土)、粘質土である第6・7層(青灰色粘質土・暗青灰色粘質土)・灰白色火山灰層である第8層、砂質土である第9～11層(黒褐色砂質土・暗褐色砂質土・褐色砂質土)・粘質土である第12層(

No.	種類	層位	特徴	登録	箱番号
1	土師器杯	11層	E区出土。内面、ヘラミガキ(横位)→黒色処理。口径(15.8)cm。底径9.8cm。器高7.7cm。残存1/2。	R21	13010
2	灰釉陶器耳皿	9層	E区出土。猿投窯製品。内面に灰釉(刷毛塗り)。残存1/4。黒笹14号窯式 or 90号窯式。	R26	13010
3	灰釉陶器壺	8層	E区出土。口縁部破片。内外面に灰釉。	R28	13010
4	灰釉陶器壺	8層	E区出土。頸部破片。内外面に灰釉。	R29	13010
5	須恵系土器杯	6層	W区出土。[底部]回転糸切り無調整。色調黄灰。口径(12.5)cm。底径4.8cm。器高3.0cm。残存2/3。	R1	13010
6	須恵系土器杯	6層	W区出土。[底部]回転糸切り無調整。色調橙灰。底径5.0cm。残存3/4。	R3	13010
7	平瓦	6層	W区出土。平瓦ⅡB類aタイプ2。凸面、縄叩き目(縦位)。凹面、布目→ナデ。色調灰褐。	R49	13010
8	土師器杯	4層	W区出土。丸底。内外面ヘラミガキ→黒色処理。残存1/2。	R8	13010
9	須恵系土器杯	4層	W区出土。[底部]回転糸切り無調整。色調橙褐。口径(9.4)cm。底径(4.6)cm。器高2.0cm。残存1/3。	R4	13010
10	須恵系土器高台杯	4層	W区出土。[底部]回転糸切り無調整。色調橙褐。口径(9.6)cm。高台径5.4cm。器高2.2cm。残存3/4。	R5	13010
11	須恵系土器高台杯	4層	W区出土。[底部]回転糸切り無調整。色調橙褐。口径(10.6)cm。高台径(6.0)cm。器高1.7cm。残存1/4。	R6	13010
12	須恵系土器高台杯	4層	W区出土。[底部]回転糸切り→ナデ。口径(15.8)cm。高台径7.4cm。器高4.5cm。残存1/3。	R7	13010
13	平瓦	4層	W区出土。ⅡB類aタイプ2。凸面、縄叩き(縦位)。凹面、布目→ナデ。ヘラ書き「木」?。色調灰。	R50	13010
14	須恵系高台杯	3層	E区出土。内外面、ヘラミガキ(横位)。底部糸切り→回転ヘラケズリ。口径13.2cm。残存3/4。胎土微細。	R30	13010
15	須恵系高台杯	3層	W区出土。内面に擦痕・墨痕。底部に不明ヘラ書き。口径(11.0)cm。高台径(6.2)cm。器高3.5cm。残存1/3。	R9	13010
16	灰釉陶器壺	3層	E区出土。口縁部破片。内面、灰釉(刷毛塗り)。胎土微細。猿投窯製品。黒笹14号窯式 or 90号窯式。	R32	13010
17	風字硯	3層	E区出土。内面ナデ。外面ヘラケズリ。色調、内外面灰。胎土微細。	R31	13010
18	土師器杯	2層	内外面、ヘラミガキ(横位)→黒色処理。口径(16.4)cm。残存1/3。	R44	13010
19	土師器杯	2層	C区出土。内面、ヘラミガキ(横位)→黒色処理。外面、体下部ヘラケズリ。底部回転糸切り無調整。口径(6.2)cm。底径(4.0)cm。器高4.5cm。残存1/2。	R35	13010
20	須恵系土器杯	2層	C区出土。[底部]回転糸切り無調整。色調、内外面赤褐。口径(11.4)cm。底径4.6cm。器高3.0cm。残存2/3。	R36	13010
21	緑釉陶器壺 or 皿	2層	C区出土。口縁部破片。内外面緑釉。胎土微細。猿投窯製品。	R37	13010
22	灰釉陶器壺	2層	C区出土。体部破片。内面、灰釉(刷毛塗り)。胎土微細。猿投窯製品。	R34	13010
23	灰釉陶器壺	2層	頸部破片。外面に灰釉。胎土微細。猿投窯製品?	R42	13010
24	緑釉陶器壺	2層	W区出土。外面に2条の沈線。内外面緑釉。胎土微細。	R14	13010
25	軒丸瓦	2層	C区出土。重圏文軒丸瓦(型番不明)。色調灰褐。厚さ3.1cm。政庁第Ⅱ期。	R53	13010
26	軒丸瓦	2層	C区出土。宝相花文軒丸瓦422。色調灰。厚さ3.5～3.0cm。政庁第Ⅳ期。	R52	13010
27	石帯の巡方	2層	C区出土。石材粘板岩。色調黒。長さ5.2cm。幅4.4cm。厚さ0.5cm。3面研磨痕。	R40	13010
28	円面硯	排土	脚部破片。外面に沈線。	R46	13010
29	須恵系土器杯	排土	[底部]回転糸切り無調整。口縁部に油煙付着、色調橙灰。口径(10.4)cm。底径4.0cm。器高2.2cm。残存1/2。	R17	13010
30	須恵系土器高台杯	排土	[底部]回転糸切り無調整。色調橙褐。口径11.2cm。高台径5.4cm。器高2.2cm。残存1/2。	R19	13010
31	須恵系土器高台杯	排土	[底部]回転糸切り→ナデ。色調橙褐。口径(10.7)cm。高台径4.8cm。器高2.6cm。残存2/3。	R18	13010

第21図 亀山安雄宅の発掘調査出土遺物 ()内の数値は復元値である。



第 21 図 亀山安雄宅の発掘調査出土遺物

～暗灰色粘質土)の12層に区分した。

3) 発見した遺構と遺物(第20・21図、写真図版11-2・13-9～17)

発見した遺構に、土壌4基と溝1条がある。確認面はいずれも基本層序第11層下面である。遺構は全て、第8層(灰白色火山灰)より古いことから10世紀前葉以前の古代のものと判断できる。これらの遺構のうち、遺物を出土したのはSK2573土壌のみである。

【SK2573土壌】 調査区西で確認した。遺構の大きさは、長軸で1m20cm以上、深さ60cmほどである。堆積層は、褐色と黒褐色の砂質土で3層に分かれ、いずれも自然堆積層である。出土遺物に土師器杯・甕の破片、須恵器杯・甕の破片がある。

【遺構外出土の遺物】

基本層序第1～6・8～11層から、遺物収納平箱5箱分の土師器、須恵器、須恵系土器、瓦などが出土した。多くは破片資料であるが内容がわかるものに以下のものがある。出土地点は調査区中央のC区、東にあたるE区、西にあたるW区の3地点に区別し、各層ごとに取り上げている。なお、現代の陶器を含む第2層以下は図示したもののみ記載した。

第11層:土師器杯(第21図1)、須恵器甕、丸瓦Ⅱ類。

第10層:土師器杯・高台杯・甕、平瓦ⅠA類(政庁第Ⅰ期)、丸瓦Ⅱ類。

第9層:土師器杯・高台杯・甕、須恵器杯・蓋・壺・甕の破片、須恵系土器杯、灰釉陶器耳皿(2)、平瓦ⅡB類・ⅡC類(政庁第Ⅳ期)、丸瓦Ⅱ類、砥石。

第8層:土師器杯・高台杯、須恵器杯・壺・甕の破片、須恵系土器杯・高台杯の破片、灰釉陶器碗(壺(4)、平瓦ⅡB類、丸瓦Ⅱ類。

第6層:土師器杯・高台杯・甕、須恵器杯・甕・羽釜、須恵系土器杯(5・6)、高台杯・高台鉢、平瓦ⅡB類(7)・ⅡC類(政庁第Ⅳ期)、丸瓦Ⅱ類。

第5層:土師器杯、須恵器杯・壺・甕、須恵系土器杯・高台杯。

第4層:土師器杯(8)・高台杯・甕、須恵器杯・蓋・壺・甕、須恵系土器杯(9)、高台杯(10・11)・高台杯(12)、平瓦ⅡB類(13)・ⅡC類(政庁第Ⅳ期)、丸瓦Ⅱ類。

第3層:土師器杯(8)・甕、須恵器高台杯(14)・盤(15)・杯・壺、須恵系土器杯・高台杯、灰釉陶器(16)、風字硯(17)、平瓦ⅡB類・ⅡC類(政庁第Ⅳ期)。

第2層:土師器杯(19)・須恵系土器杯(20)、緑釉陶器碗または皿(21)・壺(24)、灰釉陶器壺(22)・壺(23)、重圈文軒丸瓦(25)、宝相花文軒丸瓦(26)、石帯の巡方(27)。

排土:須恵系土器杯(29)・高台杯(30・31)。

(3) 佐藤文男宅の発掘調査

位置:市川字五万崎22

調査期間:平成7年6月15日・16日

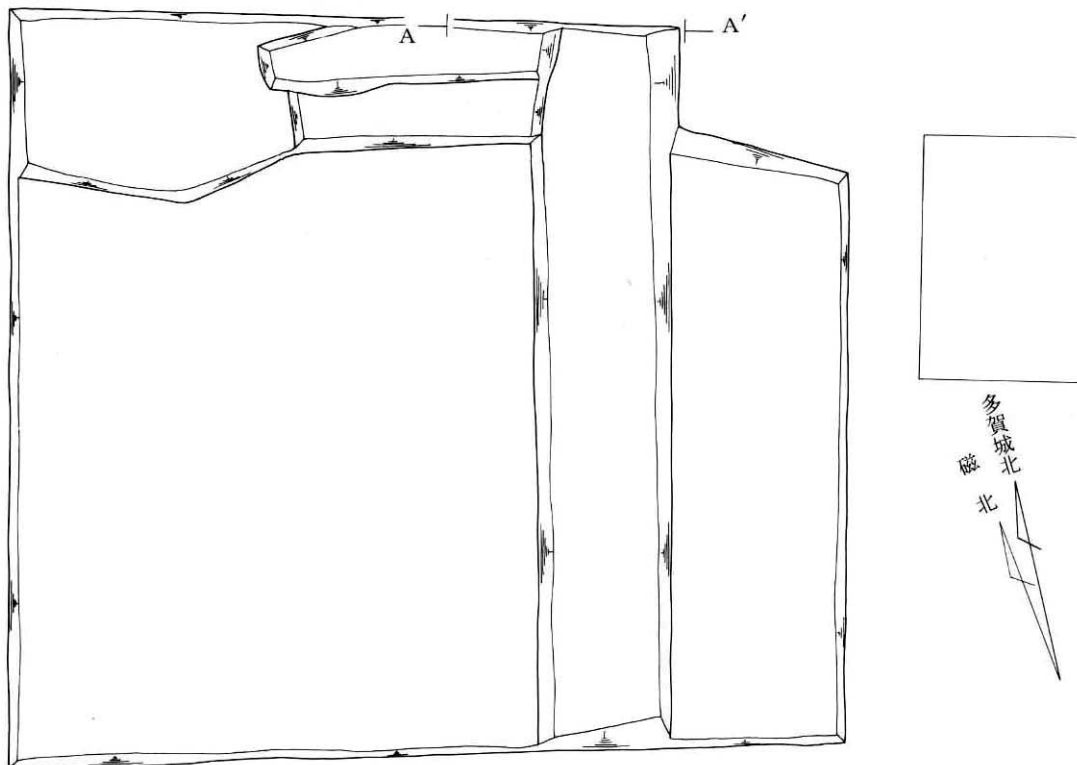
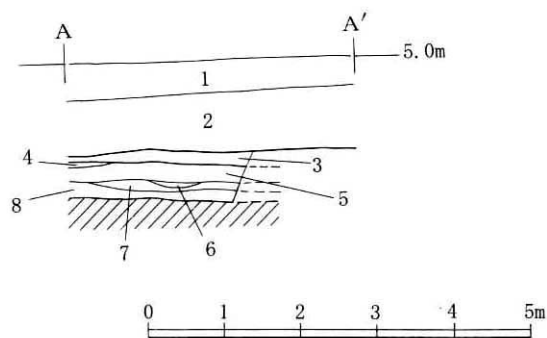
原因:住宅増改築

発掘調査面積:105㎡

1) 調査区

外郭西門跡の東約300mにあたる。坂下地区のある丘陵と五万崎地区の位置する丘陵の間で、幅

No.	土色・土性	備考
1	黄褐色砂	山砂盛土。【基本層序第1層】
2	暗緑灰色砂質土	表土。【基本層序第1層】
3	青黒色砂質土	遺物が多い。【基本層序第2a層】
4	オリーブ黒色砂質土	凝灰岩小ブロックを含む。 【基本層序第2b層】
5	暗色砂質土	【基本層序第2c層】
6	黒褐色土	焼土・木炭片を多く含む。 【基本層序第2d層】
7	黒褐色砂質粘土	【基本層序第2e層】
8	黒褐色粘質土	泥土。【基本層序第2f層】
9	暗オリーブ褐色土	【基本層序第3層】



第22図 佐藤文男宅の発掘調査平面図(1/100)・断面図(1/100)

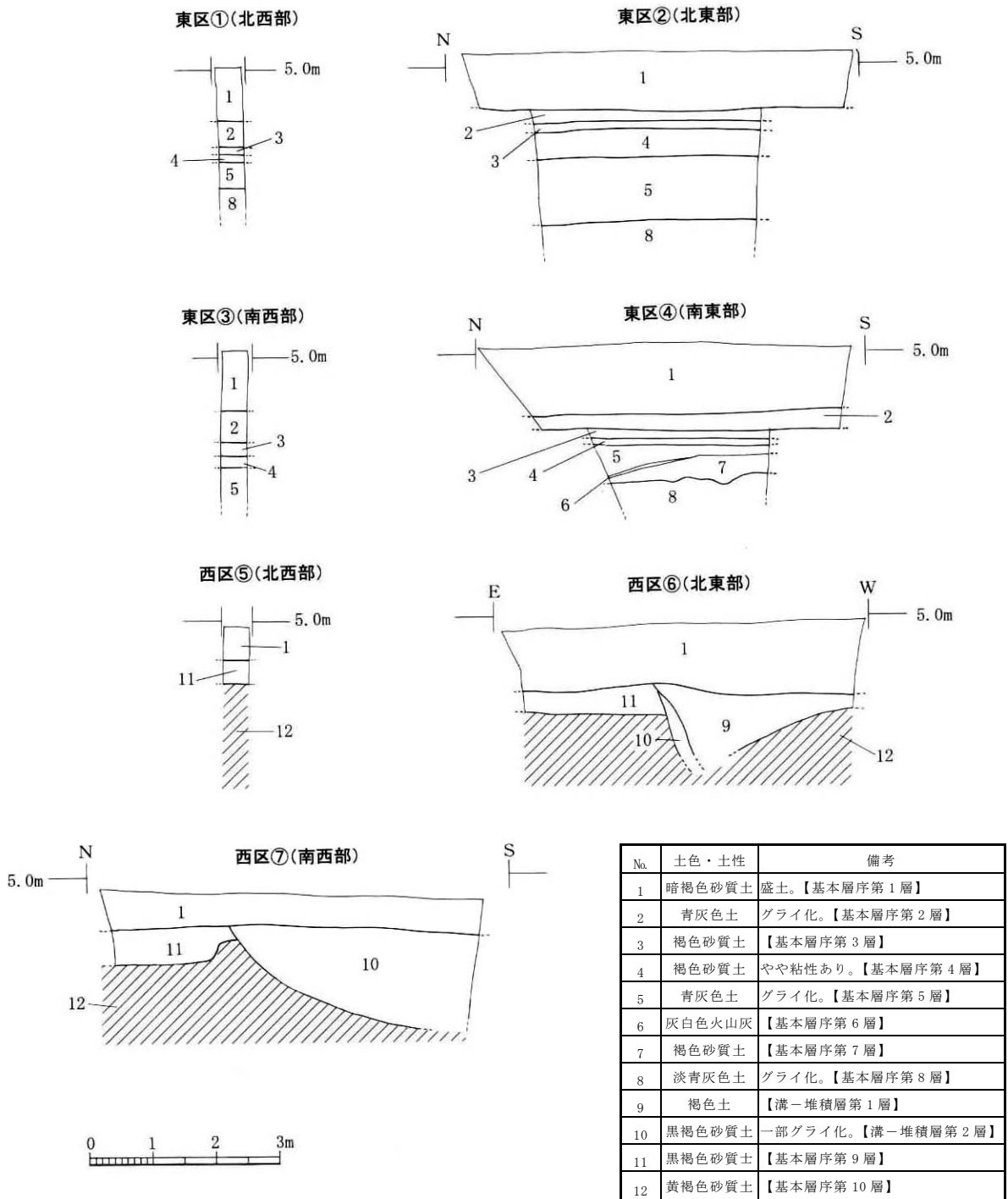
の広い沢地に位置する。外郭南辺築地塀跡から北約20mの地点である。「(2)亀山安雄宅の発掘調査」をおこなった調査区の約50m南にあたる。標高は約5mでほぼ平坦であるが、南側が緩やかに傾斜し低くなる。調査区は南北約10m、東西約11mの不整形で、発掘面積は約105㎡である。

2) 基本層序

基本層序は住宅建設に伴う盛土と表土である第1層(黄褐色砂・暗緑灰色砂質土)、古代の遺物を含む第2層(灰黒色または灰褐色土)、地山である第3層(黄褐色土)に分け、第2層はa~fの6層に細分した。

3) 発見した遺構と遺物(第22図)

遺構は確認されなかった。遺物は基本層序第2層からのみ出土し、遺物収納平箱で2箱分である。出土遺物に、土師器坏・高台坏・甕の破片、須恵器坏の破片、須恵系土器坏・高台坏の破片、円面硯の破片、転用硯(須恵器蓋)、重弁蓮花文軒丸瓦(型番不明)、平瓦ⅠA類(政庁第Ⅰ期)・ⅡB類・ⅡB類bタイプ(政庁第Ⅲ期)、丸瓦Ⅱ類がある。



第 23 図 菊池傳吉宅の発掘調査区断面図 (1/100)

(4) 菊池傳吉宅の発掘調査

位置：市川字五万崎 17

調査期間：平成 10 年 9 月 8 日・9 日

原因：ビニールハウス設置工事

発掘調査面積：252 m²

1) 調査区

調査区は外郭西門跡の東南約 300mにあたり、坂下地区のある丘陵と五万崎地区の位置する丘陵の

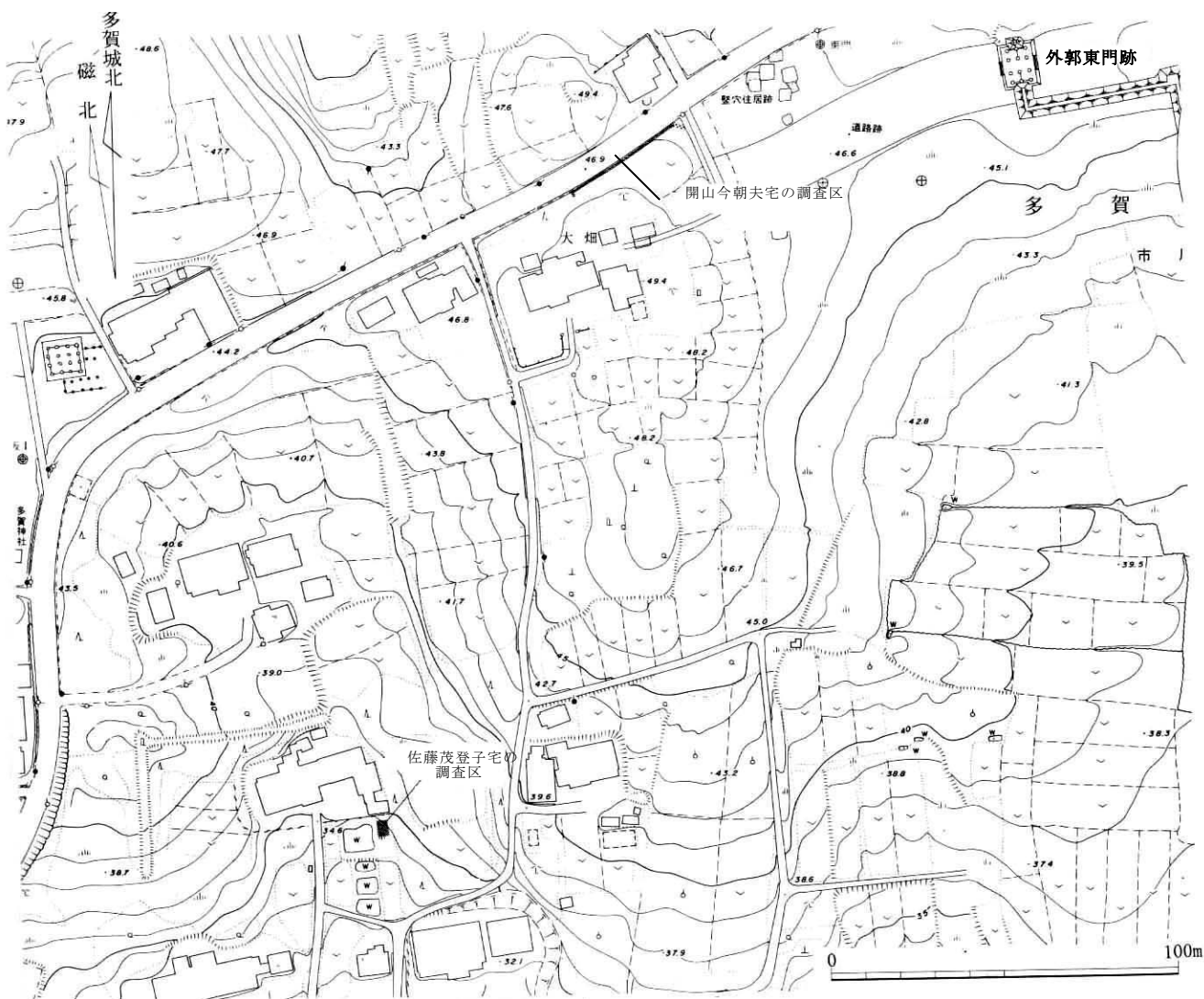
中間で、幅の広い沢地に位置する。外郭南辺築地塀跡推定地から南約 20m の地点にあたる。「(3)佐藤文男宅の発掘調査」を行った調査区の約 40m 南である。標高は約 5m でほぼ平坦であるが、南側が僅かに傾斜し低くなる。東西約 6m、南北約 6m の調査区を敷地内東の畑で 4 箇所 (①~④)、南の畑で 3 箇所 (⑤~⑦)、合計 7 箇所設けた。調査面積は約 252 m² である。

2) 基本層序

基本層序は盛土である第 1 層 (暗褐色砂質土)、青灰色土または褐色砂質土の第 2~5 層・灰白色火山灰である第 6 層、褐色砂質土とそのグライ化した土 (淡青灰色土) である第 7・8 層、黒褐色砂質土である第 9 層、地山である第 10 層 (黄褐色砂質土) に区分した。

3) 発見した遺構と遺物 (第 23 図、写真図版 11-4)

発見した遺構に S D2577 溝がある。遺物は基本層序第 1 層からのみ出土している。S D2577 溝の年代は、基本層序の第 6 層 (灰白色火山灰層) より下層とみられる層で確認していることから、10 世紀前葉より前のものと推測している。

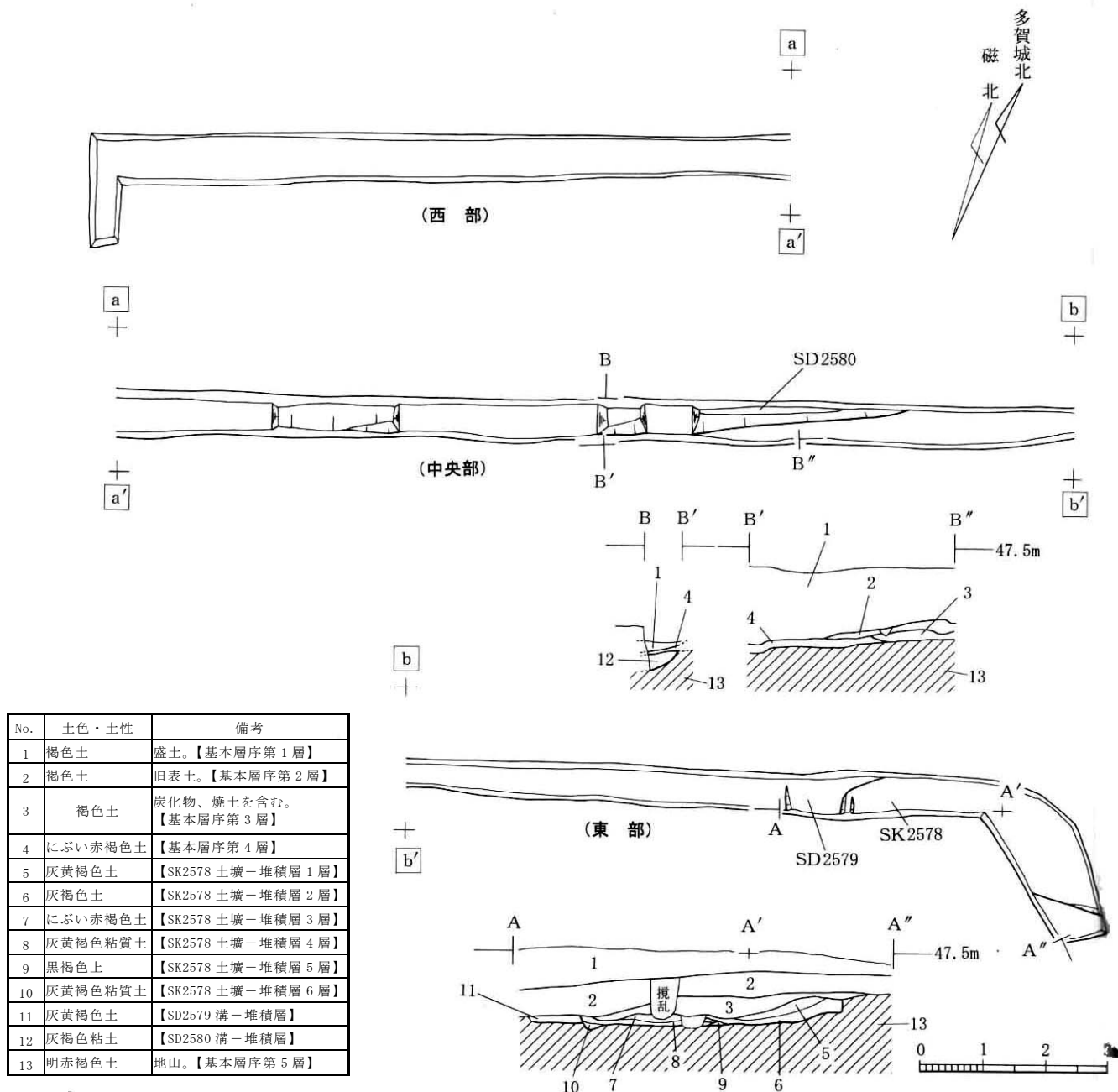


第 24 図 大畑地区発掘調査区

【SD2577 溝】 調査区⑥と⑦で確認した。検出した 2 箇所を結ぶと約 44m となる。遺構確認面は、第 9 層上面である。溝方向は溝幅の中心線が東から約 4° 北へ偏る。大きさは、幅 3m 以上、深さ 1m 50 cm 以上である。堆積層は 2 層に区分でき、上層は黒褐色砂質土、下層はグライ化した淡青灰色土である。遺物は出土していない。

【遺構外出土の遺物】 基本層序第 1 層から土師器坏・甕の破片 11 点、須恵系土器坏の破片 4 点、平瓦 II B 類 2 点が出土した。

2. 多賀城跡大畑地区(第 24 図)



第 25 図 開山今朝夫宅の発掘調査平面図 (1/100)・断面図 (1/100)

(1) 開山今朝夫宅の発掘調査

位置：市川字大畑 36

調査期間：平成 11 年 3 月 25 日・26 日

原因：土留擁護壁設置工事

発掘調査面積：70 m²

1) 調査区

平安時代の外郭東門跡の西約 100m に位置する。標高は約 47m でほぼ平坦である。調査区は、市道市川線の南側道路側溝に沿う形で、東西方向に約 37m、幅約 0.8m の大きさに設けた。調査面積は約 70 m² である。

2) 基本層序

基本層序は盛土である第 1 層(褐色土)、旧表土である第 2・3 層(褐色土)、調査区西のみに分布する第 4 層(にぶい赤褐色土)、地山である第 5 層(黄褐色砂質土)に区分した。

3) 発見した遺構と遺物(第 25 図、写真図版 12-5)

発見した遺構に土壇 1 基と溝 2 条がある。遺構確認は全て地山面である。遺構は堆積層の状況から古代のものと推測している。

【SK2578 土壇】 調査区東で確認した。SD2579 溝と重複しこれよりも新しい。大きさは長軸 4m 以上、短軸 1.5m 以上、深さ 40 cm ほどである。形状は方形と考えられる。堆積層は灰黄褐色と灰褐色を基調とした土が主体で 6 層に区分でき、下層のみ粘質土である。遺物は出土していない。

【SD2579 溝】 調査区東で確認した。SK2578 土壇と重複しこれよりも古い。溝方向は溝幅の中心が西から約 23° 北へ偏る。堆積層は灰黄褐色土である。遺物は出土していない。

【SD2580 溝】 調査区中央で確認した。東西方向に延びる溝である。溝方向は溝幅の中心が西から約 30° 南へ偏る。堆積層は灰褐色粘土である。遺物は出土していない。SD2580 溝は位置とその方向から、平安時代に外郭東門から城内へ延びる道路の北側溝にあたる可能性がある。

【遺構外出土の遺物】 基本層序第 1 層から平瓦 I A 類(政庁第 I 期)2 点が出土している。

(2) 佐藤茂登子宅の発掘調査

位置：市川字大畑 12-1

調査期間：平成 8 年 6 月 6 日～21 日

原因：合併処理浄化槽の設置

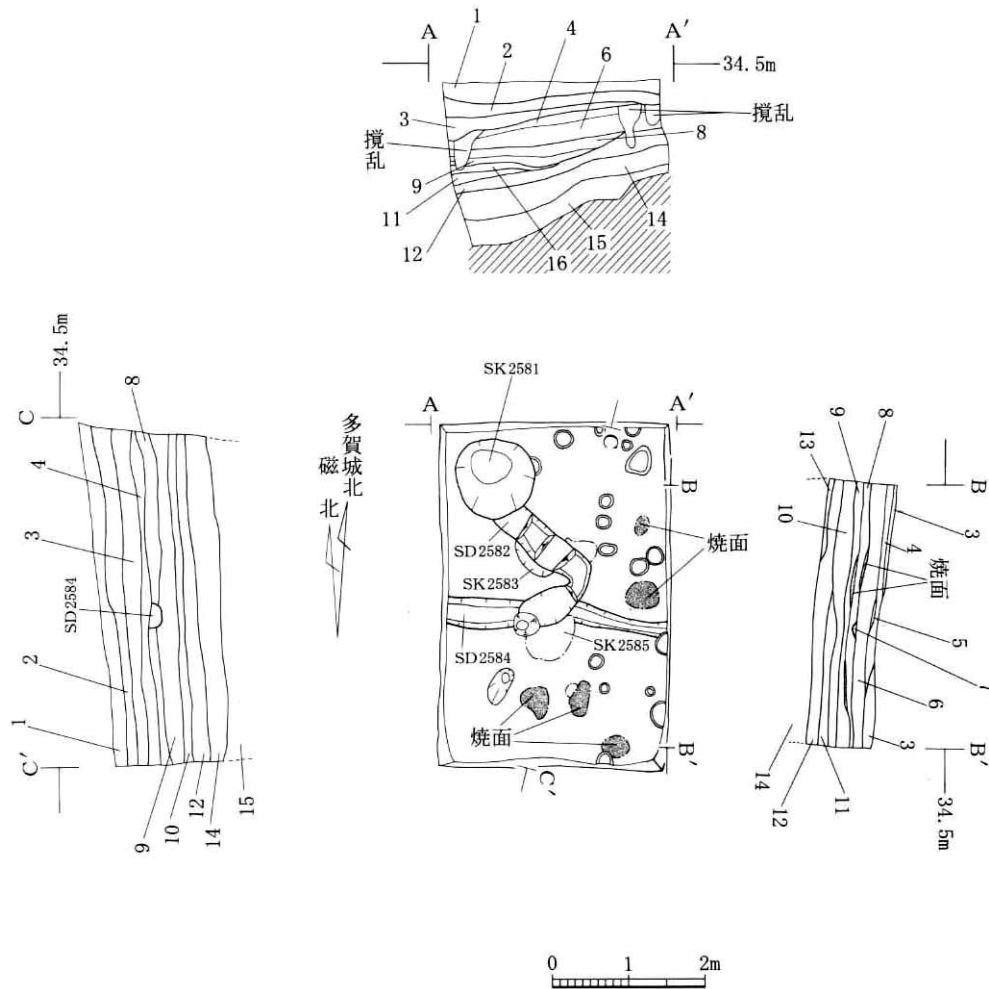
発掘調査面積：15 m²

1) 調査区

平安時代の外郭東門跡の南西約 180m に位置する。「(1)開山今朝夫宅の発掘調査」を行った調査区の約 200m 南である。標高は約 35m で緩やかに南に傾斜する。調査区は南北約 5m、東西約 3m で、調査面積は約 15 m² である。

2) 基本層序

基本層序は表土である第 1 層(黒褐色土)、砂質土である第 2 層、暗褐色土である第 3・4 層、灰白色火



No.	土色・土性	備 考	No.	土色・土性	備 考
1	黒褐色土	表土。【基本層序第1層】	9	褐色土	整地層。上面に焼面あり。【基本層序第8層】
2	にぶい黄褐色砂質土	【基本層序第2層】	10	褐色土	炭化物を多く含む。【基本層序第9層】
3	暗褐色土	炭化物を少量含む。【基本層序第3層】	11	にぶい黄褐色土	炭化物を僅かに含む。【基本層序第10層】
4	暗褐色土	炭化物を少量含む。【基本層序第4層】	12	にぶい黄褐色土	【基本層序第11層】
5	灰白色火山灰	【基本層序第5層】	13	黒褐色土	木炭層。【基本層序第12層】
6	褐色土	炭化物、焼土を含む。【基本層序第6層】	14	褐色粘土	【基本層序第13層】
7	褐色土	【SD2584 溝-堆積層】	15	にぶい黄褐色砂質土	【基本層序第14層】
8	黄褐色土	整地層。上面に焼面あり。【基本層序第7層】	16	にぶい黄褐色土	地山。【基本層序第15層】

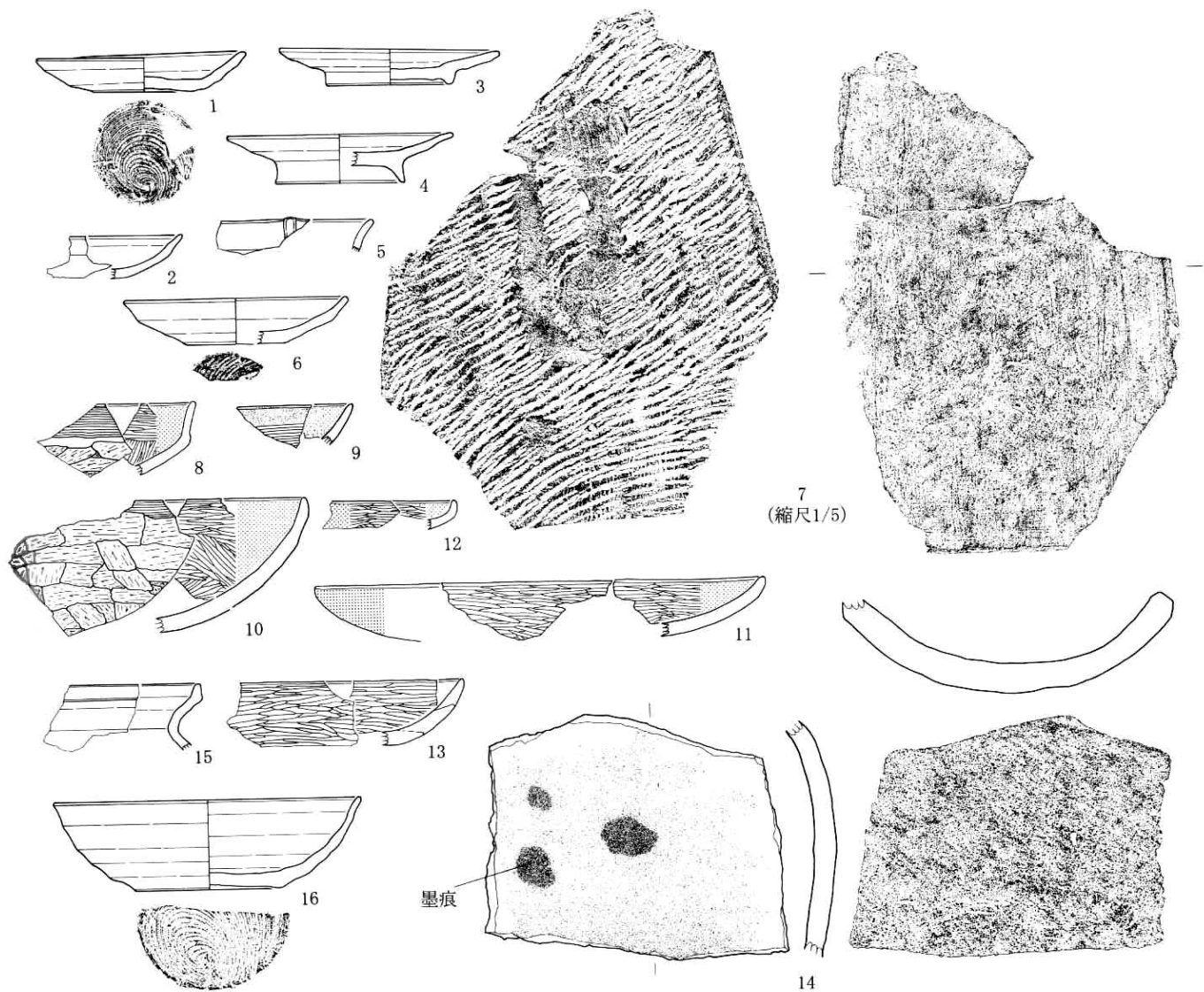
第 26 図 佐藤茂登子宅の発掘調査平面図 (1/100)・断面図 (1/100)

山灰である第 5 層、褐色または黄褐色土である第 6～12 層、木炭を主体とする第 13 層、砂質土である第 14 層、地山である第 15 層（黄褐色土）に区分した。

3) 発見した遺構と遺物(第 26～29 図、写真図版 12-7、13-18～26、14-27～36)

発見した遺構に土壇 3 基、溝 2 条、焼面がある。これらの遺構確認面は、S K 2581 土壇と S D 2582 溝が第 4 層上面、S K 2583 土壇と S D 2584 溝が第 7 層上面、S K 2585 土壇が第 8 層上面で、焼け面は第 7 層上面と第 8 層上面の 2 面にある。遺構の年代は、第 5 層(灰白色火山灰層)との関係と出土遺物から S K 2581 土壇と S D 2582 溝が 10 世紀前葉より新しく、S K 2583 土壇、S D 2584 溝、S K 2585 土壇焼面が 10 世紀前葉より古い古代の遺構と判断できる。

【S K 2581 土壇】 調査区北西に位置する。平面形は円形で、大きさは径約 80 cm、深さ約 40cm であ

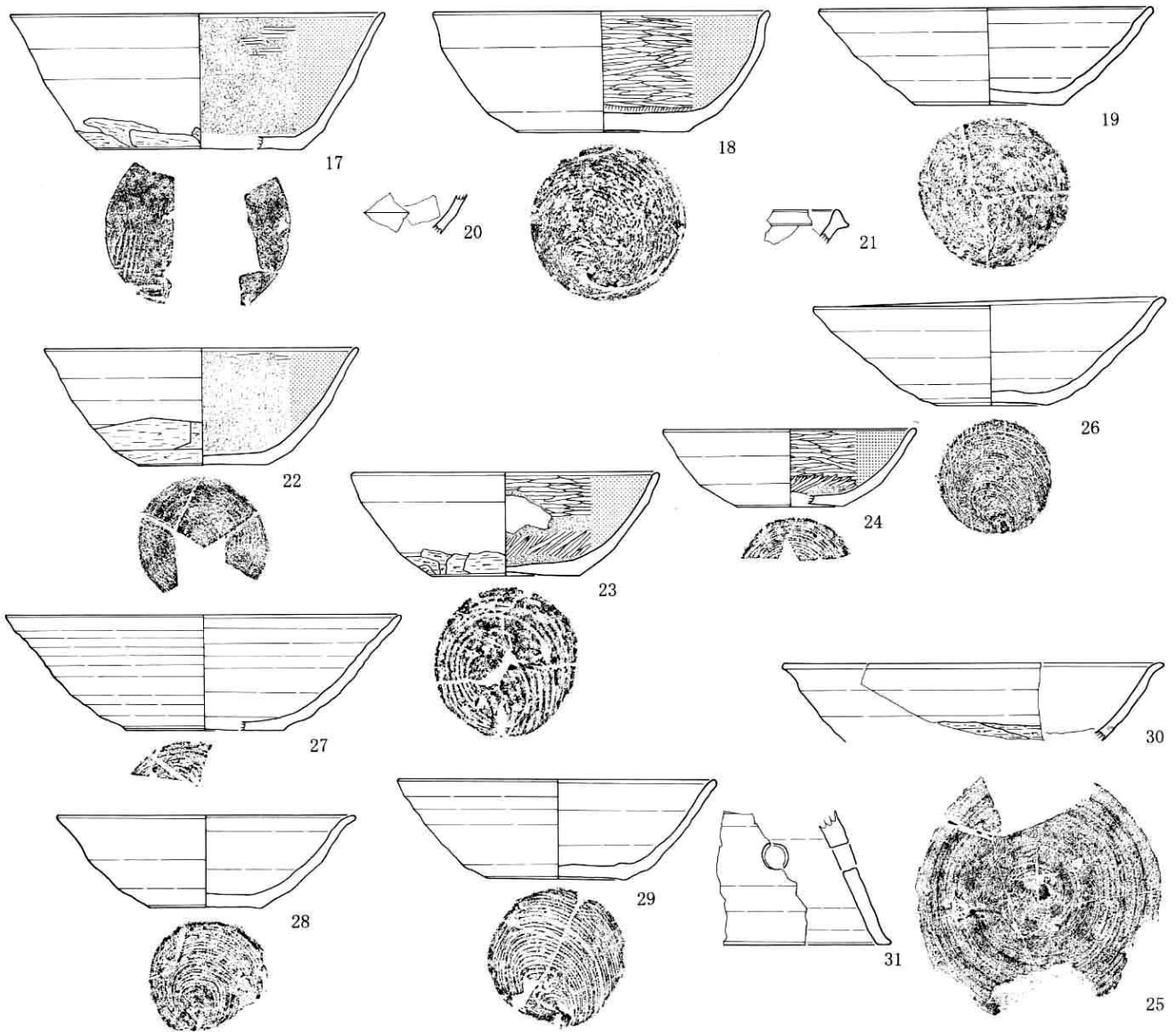


(1~6、8~14は縮尺1/3)

No.	種類	遺構-層位	特徴	登録	箱番号
1	須恵系土器杯	SK2581-堆積層	[底部]回転糸切り無調整。口径9.4cm。底径4.4cm。器高1.8cm。色調赤褐。残存7/8。	R116	12790
2	須恵系土器杯	SK2581-堆積層	色調黒褐。	R117	12790
3	須恵系土器高台杯	SK2581-堆積層	[底部]回転糸切り無調整。口径9.8cm。高台径5.6cm。器高1.7cm。色調橙灰。ほぼ完形。	R121	12790
4	須恵系土器高台杯	SK2581-堆積層	口径(10.2)cm。高台径5.8cm。器高2.2cm。色調褐。残存1/4。	R122	12790
5	灰釉陶器輪花埴	SK2581-堆積層	内外面、灰釉。	R133	12790
6	須恵系土器杯	SK2582-堆積層	[底部]回転糸切り無調整。口径(10.0)cm。底径4.4cm。器高2.1cm。	R134	12790
7	平瓦	13層	平瓦ⅡB類aタイプ1。凸面、縄叩き目(斜位)。凹面、布目→ナデ。色調橙灰。政庁第Ⅱ期。	R183	12791
8	土師器杯	11層	製作にロクロ不使用。外面、口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面、ヘラミガキ→黒色処理。	R4	12788
9	土師器杯	11層	製作にロクロ不使用。外面、口縁部ヨコナデ。内面、黒色処理。口縁部に炭化物付着。	R10	12788
10	土師器杯	11層	製作にロクロ不使用。外面、口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面、ヘラミガキ→黒色処理。	R5	12788
11	土師器杯	11層	製作にロクロ不使用。内外面、ヘラミガキ→黒色処理。口径(20.2)cm。	R1	12788
12	土師器杯	11層	製作にロクロ不使用。内外面、ヘラミガキ→黒色処理。	R2	12788
13	土師器杯	11層	製作にロクロ不使用。内外面、ヘラミガキ。	R3	12788
14	転用硯	10層	須恵器甕を転用。内面に擦痕と墨痕。	R16	12788
15	土師器甕	9層	製作にロクロ使用。	R29	12788
16	須恵器杯	8層	[底部]回転糸切り無調整。口径(13.8)cm。底径(6.6)cm。器高4.0cm。残存1/3。	R43	12788

()内の数値は復元値である。

第27図 佐藤茂登子宅の発掘調査出土遺物(1)

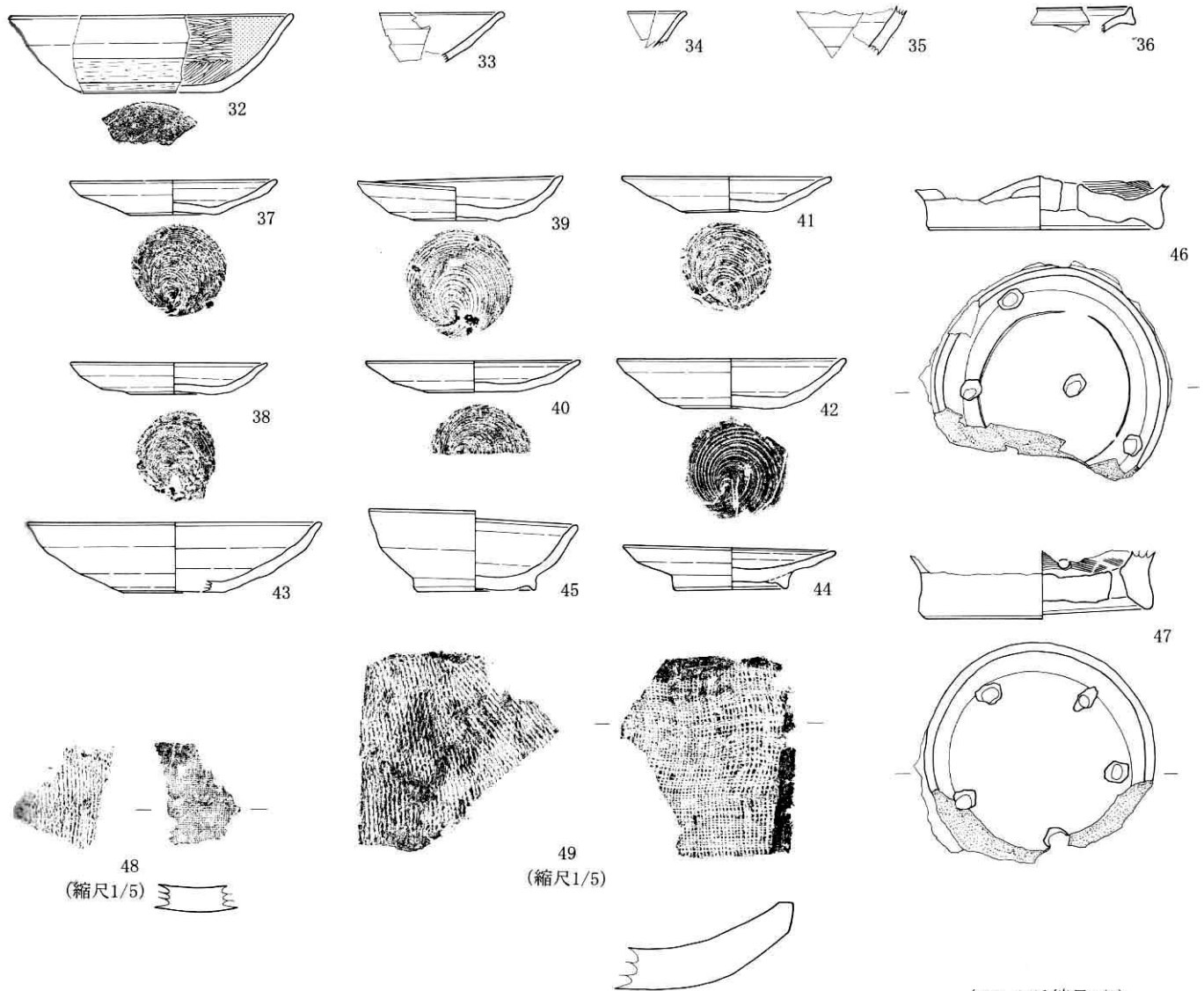


(縮尺1/3)

№	種類	層位	特徴	登録	箱番号
17	土師器坏	7層	[底部～体下部]静止糸切り→手持ちヘラケズリ。口径(16.6)cm。底径(9.0)cm。器高6.0cm。残存1/3。	R47	12788
18	土師器坏	7層	[底部]手持ちヘラケズリ。口径15.8cm。底径(7.4)cm。器高5.5cm。残存1/3。	R56	12788
19	須恵器坏	7層	[底部]回転糸切り無調整。口径(14.8)cm。底径6.4cm。器高4.3cm。残存2/3。	R50	12788
20	灰釉陶器塊	7層	内外面に灰釉。猿投窯製品。	R62	12788
21	灰釉陶器壺	7層	内外面に灰釉。猿投窯製品。	R65	12788
22	土師器坏	6層	[底部]回転ヘラケズリ。口径(14.0)cm。底径(5.6)cm。器高5.2cm。残存1/3。	R82	12789
23	土師器坏	6層	[底部]回転糸切り無調整。口径(13.6)cm。底径6.4cm。器高4.6cm。残存1/2。	R80	12789
24	土師器坏	6層	[底部]回転糸切り無調整。口径(11.2)cm。底径4.6cm。器高3.5cm。残存1/3。	R77	12789
25	須恵器甕	6層	回転ヘラケズリ。底部外面に焼成後刻書「十」。	R90	12789
26	須恵系土器坏	6層	[底部]回転糸切り無調整。口径15.6cm。底径5.0cm。器高4.6cm。ほぼ完形。	R69	12789
27	須恵系土器坏	6層	[底部]回転糸切り無調整。口径(17.6)cm。底径7.0cm。器高5.2cm。残存1/4。	R71	12789
28	須恵系土器坏	6層	[底部]回転糸切り無調整。口径(13.2)cm。底径5.0cm。器高4.1cm。残存1/2。	R70	12789
29	須恵系土器坏	6層	[底部]回転糸切り無調整。口径(14.2)cm。底径6.0cm。器高4.4cm。残存2/3。	R72	12789
30	灰釉陶器塊	6層	口径(17.0)cm。外面、ヘラケズリ。内面に灰釉(刷毛塗り)。猿投窯製品。	R87	12789
31	円面硯	6層	脚部に円窓1個を確認。	R91	12789

() 内の数値は復元値である。

第28図 佐藤茂登子宅の発掘調査出土遺物(2)



(32~47は縮尺1/3)

No.	種類	層位	特徴	登録	箱番号
32	土師器坏	4層	[底部]回転ヘラケズリ。口径(12.8)cm。底径(6.2)cm。器高3.4cm。残存1/6。	R101	12789
33	灰釉陶器碗 or 皿	4層	内外面に灰釉(刷毛塗り)。猿投窯製品。黒笹14号窯式 or 90号窯式。	R99	12789
34	灰釉陶器碗 or 皿	4層	内外面に灰釉(刷毛塗り)。猿投窯製品。黒笹14号窯式 or 90号窯式。	R100	12789
35	灰釉陶器碗	4層	内面に灰釉。猿投窯製品。	R93	12789
36	灰釉陶器壺	4層	内外面に灰釉。猿投窯製品。	R105	12789
37	須恵系土器坏	3層	[底部]回転糸切り無調整。口径9.2cm。底径4.0cm。器高1.5cm。色調橙灰。残存3/4。	R146	12790
38	須恵系土器坏	3層	[底部]回転糸切り無調整。口径8.8cm。底径3.8cm。器高1.4cm。色調橙。残存3/4。	R147	12790
39	須恵系土器坏	3層	[底部]回転糸切り無調整。口径9.3cm。底径3.8cm。器高1.9cm。色調褐。完形。	R142	12790
40	須恵系土器坏	3層	[底部]回転糸切り無調整。口径(9.6)cm。底径4.0cm。器高1.5cm。色調橙灰。残存1/2。	R148	12790
41	須恵系土器坏	3層	[底部]回転糸切り無調整。口径9.2cm。底径4.0cm。器高1.7cm。色調橙灰。残存4/5。	R145	12790
42	須恵系土器坏	3層	[底部]回転糸切り無調整。口径(10.2)cm。底径4.4cm。器高2.2cm。色調橙灰。残存3/4。	R143	12790
43	須恵系土器坏	3層	[底部]回転糸切り無調整。口径(13.2)cm。底径(4.6)cm。器高3.1cm。色調橙。残存1/4。	R152	12790
44	須恵系土器高台坏	3層	[底部]回転糸切り無調整。口径9.6cm。高台径5.2cm。器高2.1cm。色調褐。ほぼ完形。	R151	12790
45	須恵系土器高台坏	3層	口径9.4cm。高台径5.2cm。器高3.7cm。色調橙。ほぼ完形。	R144	12790
46	土師器甌	3層	底部に4孔確認。	R179	12790
47	土師器甌	3層	底部に5孔確認。	R180	12790
48	平瓦	3層	平瓦ⅡC類。凸面、縄叩き目(縦位)。凹面、布目。色調灰褐。政庁第Ⅳ期。	R186	12791
49	平瓦	3層	平瓦ⅡC類。凸面、縄叩き目(縦位→斜位)。凹面、布目。色調黒褐。政庁第Ⅳ期。	R187	12791

() 内の数値は復元値である。

第29図 佐藤茂登子宅の発掘調査出土遺物(3)

る。堆積土は灰黄褐色土である。出土遺物に、土師器坏・甕の破片・須恵器坏・壺・甕の破片・須恵系土器坏(第 27 図 1・2)・高台坏(3・4)、灰釉陶器輪花碗(5)がある。

【S D 2582 溝】調査区中央で確認した。断面台形、幅 40 cm、深さ 15 cm ほどの溝で「L」形に屈曲する。堆積層は黒褐色土である。出土遺物に、土師器坏・甕の破片・須恵器坏・甕の破片・須恵系土器坏(6・他)・高台坏の破片がある。

【S K 2583 土壇】調査区中央で確認した。平面形は円形で、大きさは径 40 cm、深さ 20 cm ほどである。堆積層は褐色土である。遺物は出土していない。

【S D 2584 溝】調査区中央で確認した。溝は溝幅の中心線がほぼ東西方向で、東西の端は調査区外に延びる。断面形台形、幅約 40 cm、深さ約 15cm の溝である。堆積層は黒褐色土である。遺物は出土していない。

【S K 2585 土壇】調査区中央で確認した。平面形は円形で、大きさは径 80 cm、深さ 2 cm ほどである。遺物は出土していない。

【遺構外出土の遺物】基本層序第 1～11・13 層から、遺物収納平箱で 9 箱分の土師器、須恵器、須恵系土器、瓦などの遺物が出土した。遺物の多くは破片資料である。器の内容・瓦の種類がわかるものに以下のものがある。なお、第 1・2 層からは近世以降の陶器が出土している。

第 13 層：平瓦 II B 類 a タイプ(7)、丸瓦 II 類。

第 11 層：土師器坏(8～13)・甕、須恵器坏・壺・甕。

第 10 層：土師器坏・甕、転用硯(14)、漆製品(用途不明)。

第 9 層：土師器坏・甕(15)、須恵器坏・高台坏・壺・甕、平瓦 I C 類(政庁第 I 期)、II B 類 a タイプ、丸瓦 II 類。骨片(馬)。

第 8 層：土師器坏・甕、須恵器坏(16)・高台坏・壺・甕、平瓦 I B 類 b タイプ(政庁第 I 期)・II B 類、丸瓦 II 類。

第 7 層：土師器坏(第 28 図 17・18)・甕、須恵器坏(19)・壺・甕、須恵系土器高台坏、灰釉陶器碗(20)・壺(21)、平瓦 II A 類(政庁第 I 期)・II B 類・丸瓦 II 類・砥石。なお土師器坏には漆紙断片付着のものが 1 点ある。

第 6 層：土師器坏(22～24)・高台坏・鉢・甕、須恵器坏・壺・甕(25)、須恵系土器坏(26～29)、灰釉陶器碗(30)、円面硯(31)、須恵器甕(25)の底部外面には、焼成後「十」の刻書がみられる。平瓦 II B 類、丸瓦 II 類、焼骨片(種類部位は不明)。

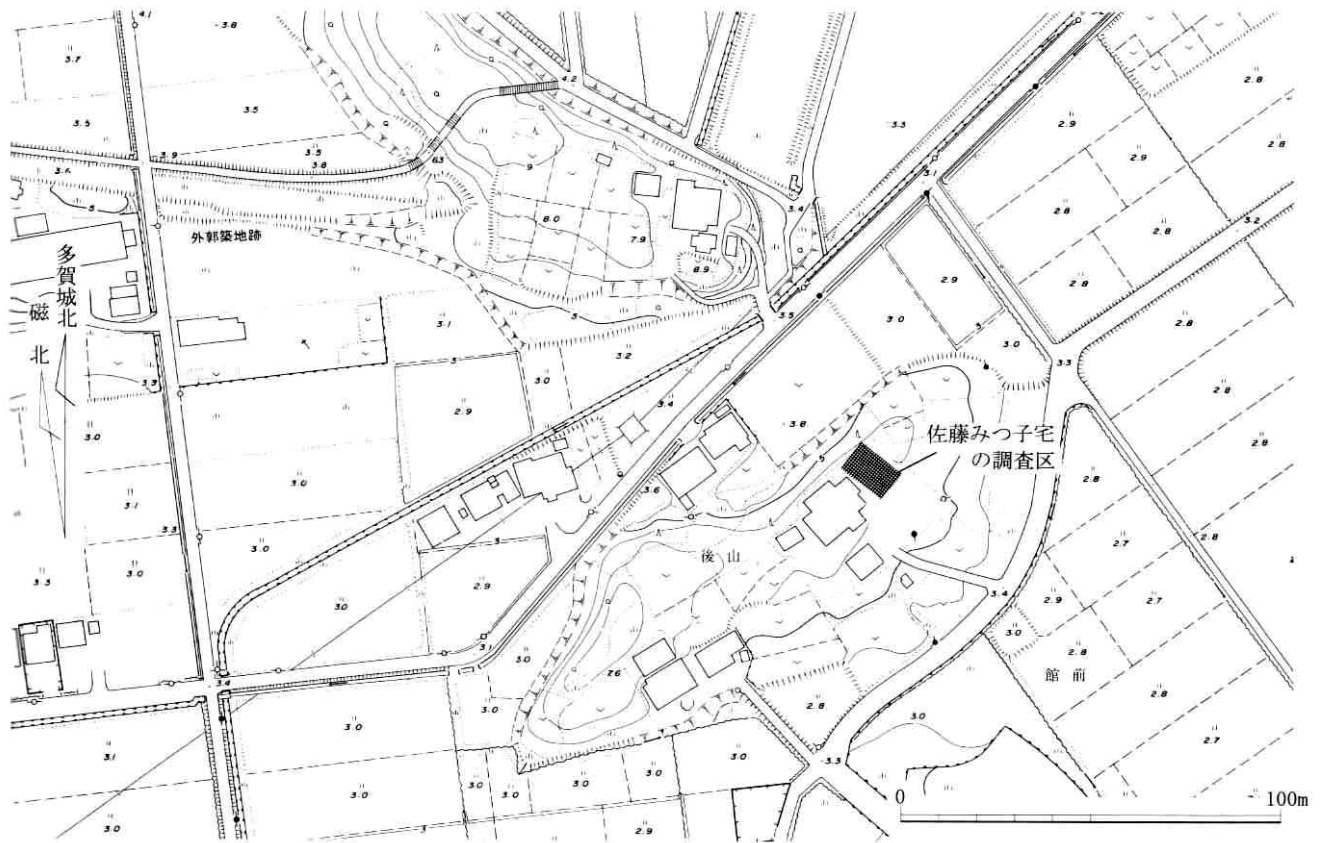
第 5 層：土師器坏・甕、高台坏。

第 4 層：土師器坏(第 29 図 32)・甕、須恵器坏・壺・甕、須恵系土器坏・高台坏・高台坏の破片・灰釉陶器碗または皿(33・34)・碗(35)・壺(36)、丸瓦 II 類。

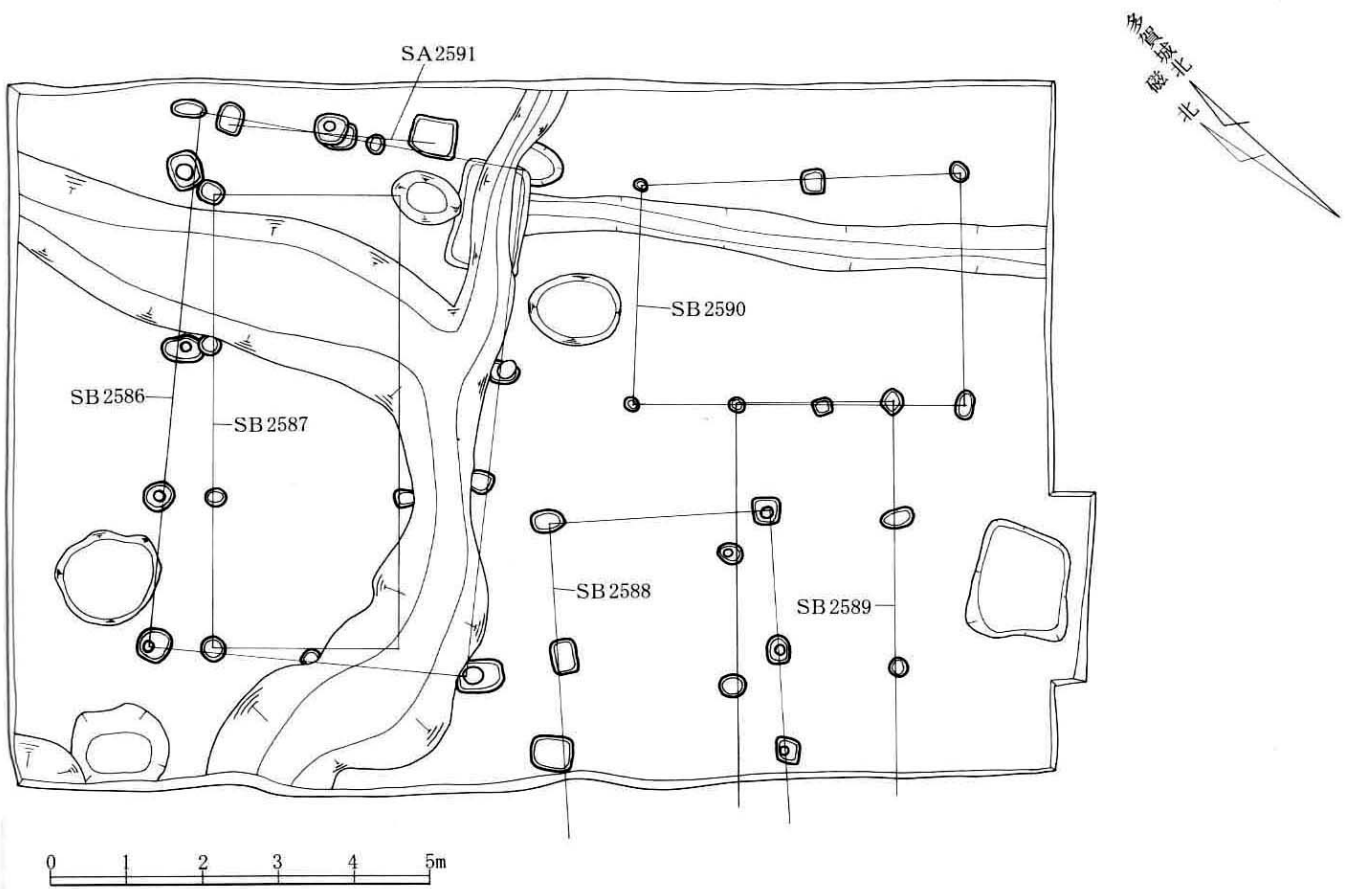
第 3 層：土師器坏・高台坏・甗(46・47)、須恵器坏・壺・甕、須恵系土器坏(37～43)・高台坏(44・45)、平瓦 I A 類(政庁第 I 期)・II B 類・II C 類(48・49：政庁第 IV 期)、丸瓦 II 類。

第 2 層：土師器坏・甕、須恵器坏・壺・甕、須恵系土器坏・高台坏、近世以降の陶器。

第 1 層：土師器坏・甕、須恵器甕、須恵系土器・坏・高台坏、丸瓦 II 類、近世以降の陶器。



第 30 図 佐藤みつ子宅の発掘調査区



第 31 図 佐藤みつ子宅の発掘調査平面図 (1/100)

3. 多賀城跡後山地区(第30図)

佐藤みつ子宅の発掘調査

位置：浮島字後山

調査期間：平成10年9月2日～8日

原因：合併処理浄化槽の設置

発掘調査面積：126㎡

1) 調査区

外郭線南東端の南西約60mに位置する。標高は約6mで、周辺に比べ3mほど高く、150m×40mほどの小さな台地状の高まりの北端に位置する。調査区は1辺約14mと約9mの方形で、調査面積は約126㎡である。

2) 基本層序

基本層序は表土である第1層(褐色土)とその直下に地山である第2層(黄褐色土)に分かれる。

3) 発見した遺構と遺物(第31図、写真図版12-8)

発見した遺構に建物跡5棟と柱列2条がある。建物と柱列はいずれも掘立式である。遺構確認はすべて地山面である。遺構の年代は、層位や遺物から検討する材料はないが、これまで多賀城城内及び周辺から発見されている古代の建物とは建物方向と規模や柱穴の大きさに違いがあり、古代よりも新しい遺構の可能性が高い。

【S B 2586 建物跡】 調査区北に位置する。桁行3間、梁行2間の建物である。S B 2587 建物跡、S A 2591 柱列跡と重複し、S B 2587 建物跡よりも古く、S A 2591 柱列跡との新旧関係は不明である。建物方向は北側柱列が北から約55°東へ偏る。柱穴は10個検出し、柱痕跡は3箇所、柱抜取穴は2箇所を確認した。柱穴掘方の堆積層は灰黄褐色土、柱痕跡は灰褐色土である。建物の規模は、桁行総長が北西側柱列で約7.1m(柱間寸法は東から3.1・2.0・2.0m)。梁行総長は南西側柱列で約4.4m(柱間寸法は2.1m)。柱穴をもとにした建物面積は約31.2㎡である遺物は出土していない。

【S B 2587 建物跡】 調査区北に位置する、桁行3間、梁行1間の建物である。S B 2586 建物跡と重複し、これよりも新しい。建物方向は北側柱列が北から約47°東へ偏る。柱穴は5個検出した。柱穴掘方の堆積層は黒褐色土である。建物の規模は、桁行総長は北西側柱列で6.0m(柱間寸法は2.0m)、梁行総長は南西側柱列で2.5mほどである。遺物は出土していない。

【S B 2588 建物跡】 調査区南に位置する。桁行2間以上、梁行1間の建物である。S B 2589 建物跡と重複するが新旧関係は不明である。建物方向は南側柱列が北から約45°東へ偏る。柱穴は6個検出し、3箇所で柱痕跡を確認した。柱穴掘り方の堆積層は灰黄褐色、柱痕跡は黒褐色土である。建物の規模は、桁行総長は北西側柱列で約6.0m(柱間寸法は東から3.6・2.4m)、梁行総長は南西側柱列で約3.0mである。遺物は出土していない。

【S B 2589 建物跡】 調査区南に位置する。桁行2間以上、梁行1間の建物である。S B 2588 建物跡、S B 2590 建物跡と重複するが新旧関係は不明である。建物方向は北側柱列が北から約48°東へ偏る。柱穴は6個検出し、2箇所で柱痕跡を確認した。柱穴掘り方の堆積層は灰黄褐色土、柱痕跡は黒褐色

である。建物の規模は、桁行総長は北西側柱列で約 3.7m (柱間寸法は東から 1.9・1.8m)、梁行総長は南西側柱列で約 2.1m である。遺物は出土していない。

【S B 2590 建物跡】調査区南に位置する。桁行 2 間、梁行 1 間の建物である。S B 2589 建物跡と重複するが新旧関係は不明である。建物方向は西側柱列が北から約 4° 西へ偏る。柱穴は 6 個検出した。柱痕跡は灰黄褐色土である。建物の規模は、桁行総長は南西側柱列で約 4.5m (柱間の間隔は 2.6・1.9 m)、梁行総長は南東側柱列で約 3.0m で、柱穴をもとにした建物面積は約 13.5 m² である。遺物は出土していない。

【S A 2591 柱列跡】調査区北に位置する。柱間は 2 間、長さ 2.8m (柱間寸法は 1.4m) の柱列である。柱痕跡は灰褐色土である。遺物は出土していない。

【遺構外出土の遺物】基本層序第 1 層から平瓦Ⅱ B 類 2 点と砥石が出土した。

4. 多賀城廃寺跡地区 (第 32 図)

道路側溝改良工事の発掘調査

位置：高崎 1 丁目地内

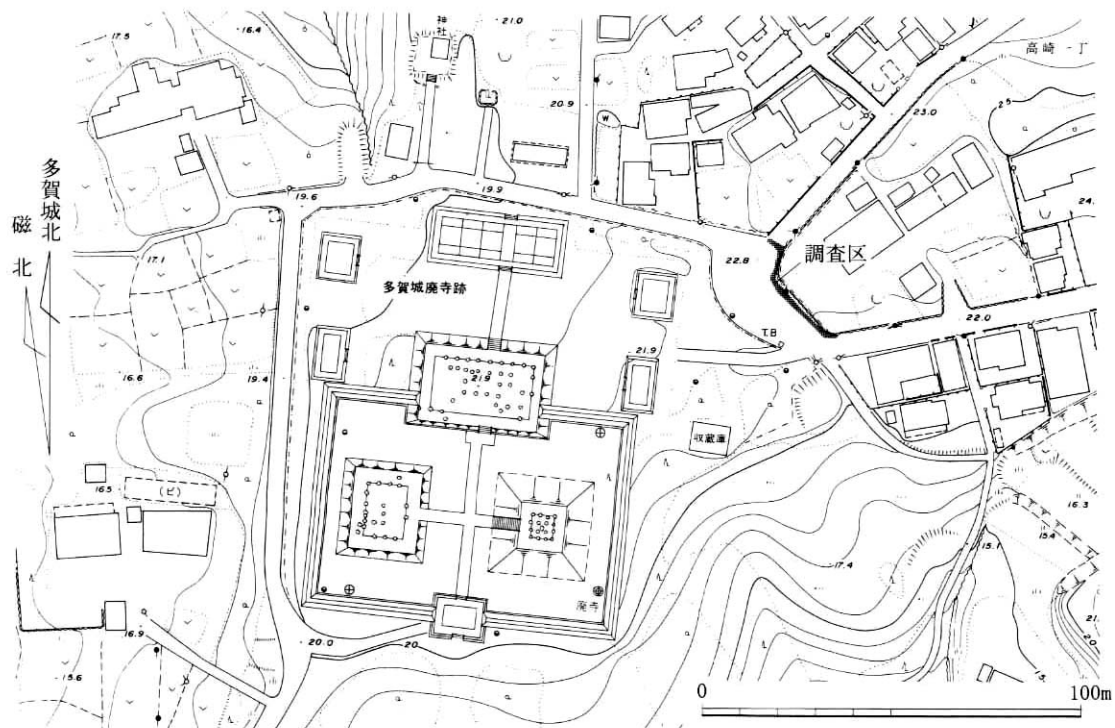
調査期間：平成 10 年 12 月 24 日・25 日

原因：側溝改良工事

発掘調査面積：48 m²

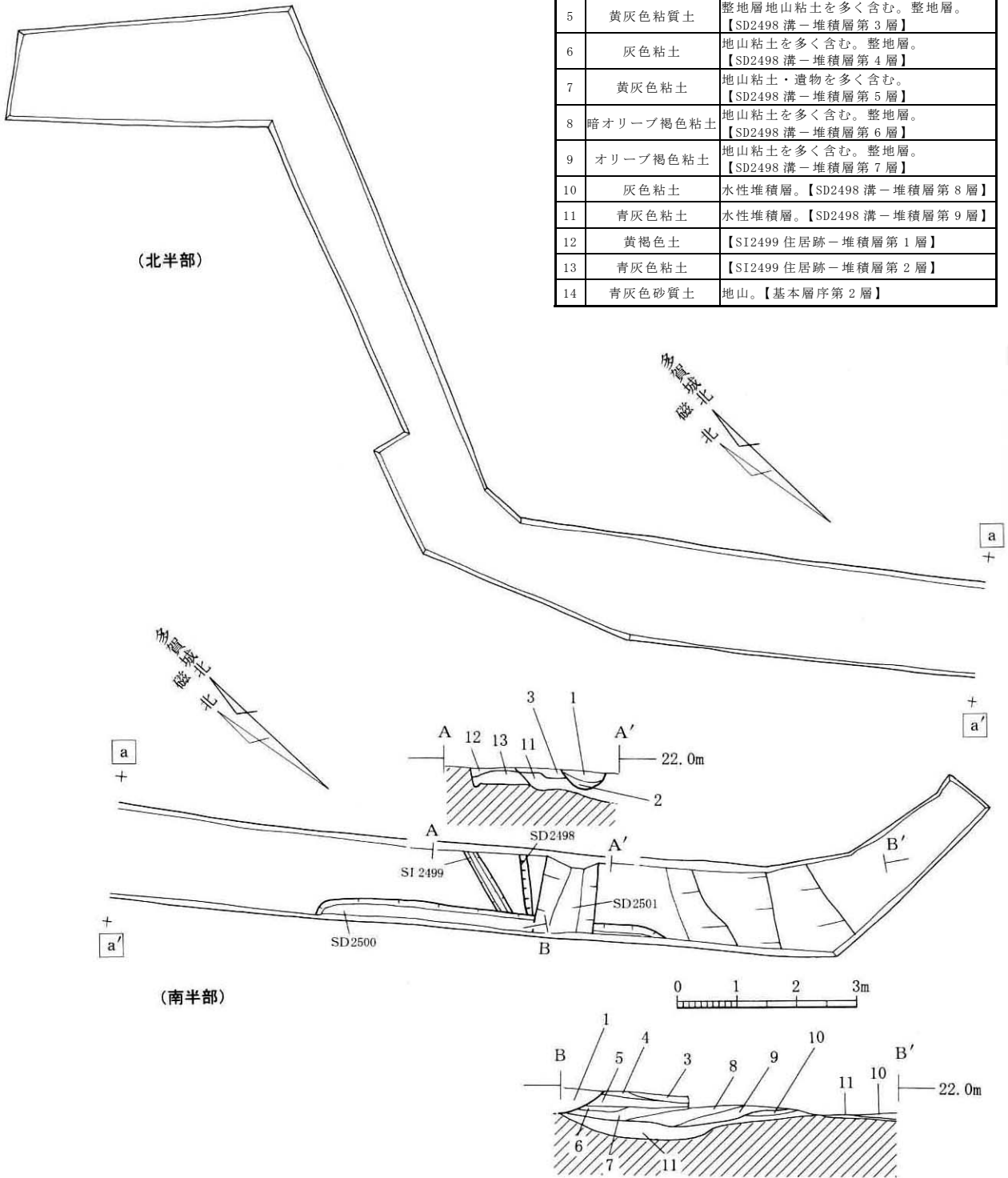
1) 調査区

多賀城廃寺跡東倉の東約 30m に位置する。標高は約 22m でほぼ平坦である。調査区は市道高崎 2 号線の北側道路側溝に沿う形で、東西方向に約 32m、幅約 1.5m 設けた。調査面積は約 48 m² である。

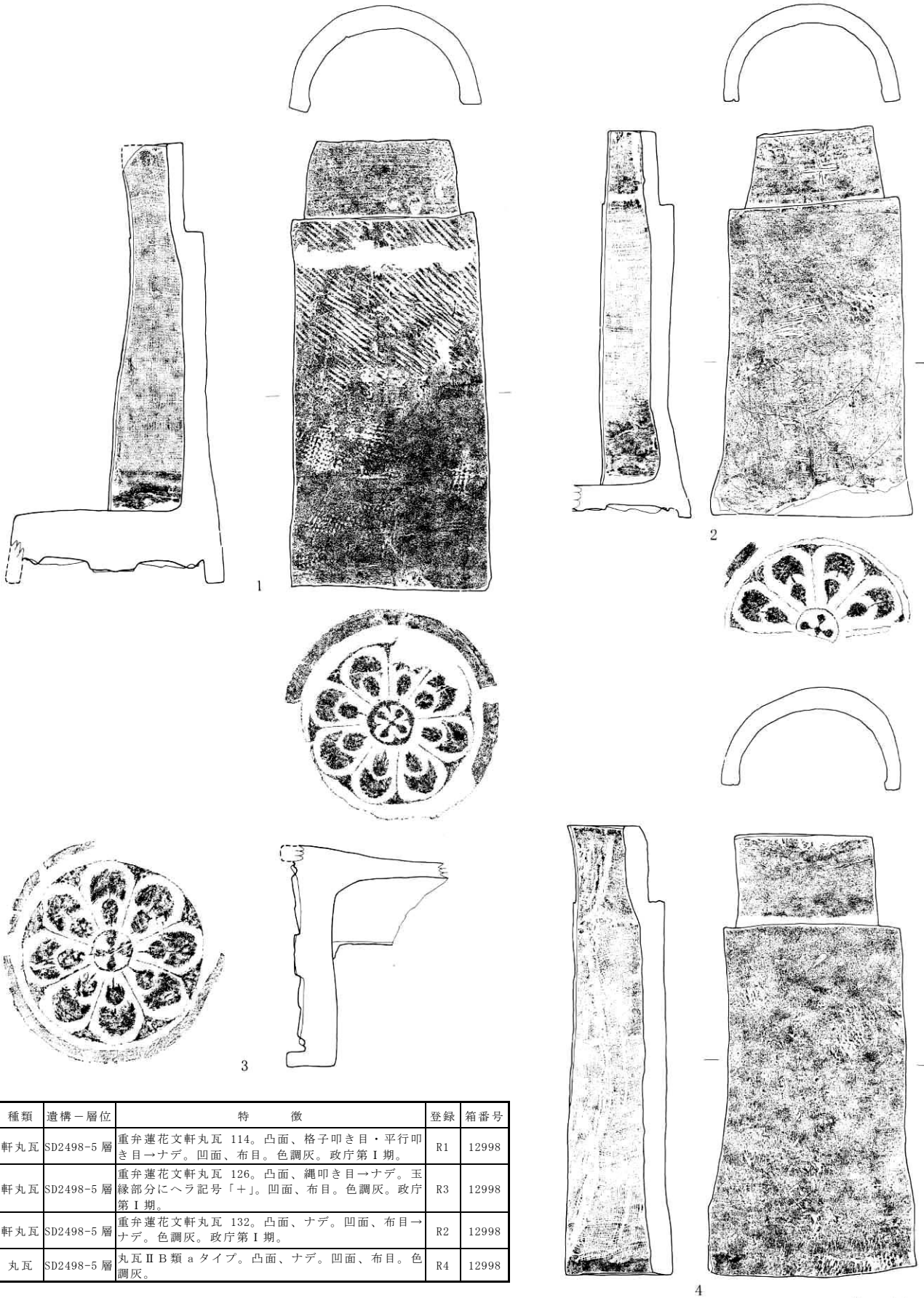


第 32 図 多賀城廃寺跡地区発掘調査区

No.	土色・土性	備考
1	黒褐色	【SD2501 溝-堆積層第1層】
2	灰色土	地山ブロックを含む。 【SD2501 溝-堆積層第2層】
3	黄褐色粘質土	地山粘土を多く含む。整地層。 【SD2498 溝-堆積層第1層】
4	暗灰黄色粘質土	焼土ブロックを全体に含む。整地層。 【SD2498 溝-堆積層第2層】
5	黄灰色粘質土	整地層地山粘土を多く含む。整地層。 【SD2498 溝-堆積層第3層】
6	灰色粘土	地山粘土を多く含む。整地層。 【SD2498 溝-堆積層第4層】
7	黄灰色粘土	地山粘土・遺物を多く含む。 【SD2498 溝-堆積層第5層】
8	暗オリーブ褐色粘土	地山粘土を多く含む。整地層。 【SD2498 溝-堆積層第6層】
9	オリーブ褐色粘土	地山粘土を多く含む。整地層。 【SD2498 溝-堆積層第7層】
10	灰色粘土	水性堆積層。【SD2498 溝-堆積層第8層】
11	青灰色粘土	水性堆積層。【SD2498 溝-堆積層第9層】
12	黄褐色土	【SI2499 住居跡-堆積層第1層】
13	青灰色粘土	【SI2499 住居跡-堆積層第2層】
14	青灰色砂質土	地山。【基本層序第2層】



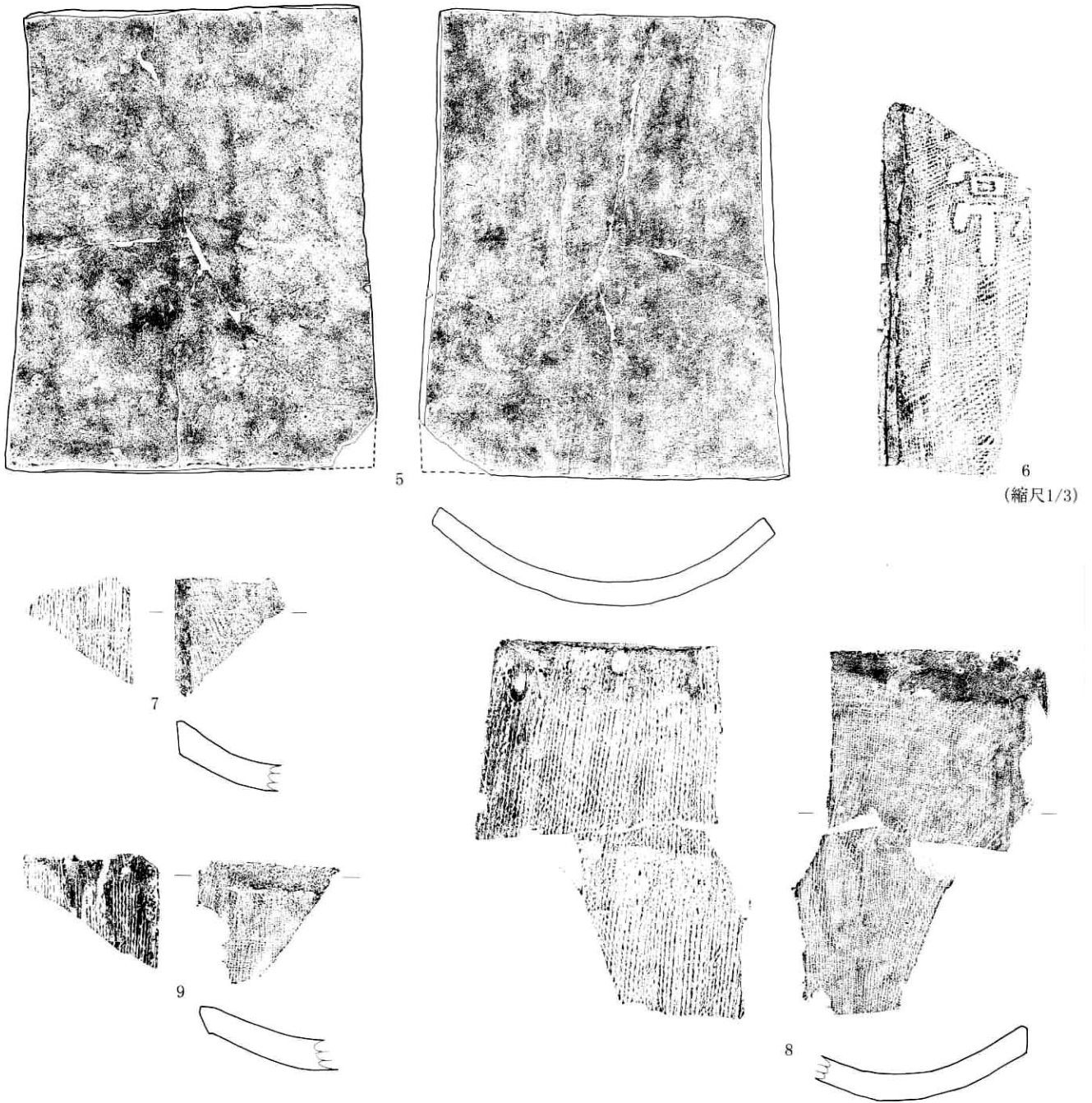
第 33 図 多賀城廃寺跡北東の道路側溝改良工事発掘調査平面図 (1/100)・断面図 (1/100)



No.	種類	遺構-層位	特 徴	登録	箱番号
1	軒丸瓦	SD2498-5層	重弁蓮花文軒丸瓦 114。凸面、格子叩き目・平行叩き目→ナデ。凹面、布目。色調灰。政庁第1期。	R1	12998
2	軒丸瓦	SD2498-5層	重弁蓮花文軒丸瓦 126。凸面、縄叩き目→ナデ。玉縁部分にヘラ記号「+」。凹面、布目。色調灰。政庁第1期。	R3	12998
3	軒丸瓦	SD2498-5層	重弁蓮花文軒丸瓦 132。凸面、ナデ。凹面、布目→ナデ。色調灰。政庁第1期。	R2	12998
4	丸瓦	SD2498-5層	丸瓦ⅡB類 aタイプ。凸面、ナデ。凹面、布目。色調灰。	R4	12998

(1~4)は縮尺1/5)

第 34 図 多賀城廃寺跡北東の道路側溝改良工事出土遺物 (1)



(5、7~9は縮尺1/5)

No.	種類	遺構-層位	特徴	登録	箱番号
5	平瓦	SD2498-堆積層	平瓦 IA 類。凸面、ナデ。凹面、布目→ナデ。色調灰。政庁第 I 期。	R5	12998
6	平瓦	SD2498-5 層	平瓦 IC 類 a タイプ。凸面、ナデ→平行叩き目。凹面、布目。海綿骨針を含む。色調灰。政庁第 I 期。	R6	12998
7	平瓦	SD2498-堆積層	平瓦 II B 類 a タイプ。凸面、縄叩き目(縦位)。凹面、布目→ナデ。色調黒灰。	R7	12998
8	平瓦	SD2498-堆積層	平瓦 II B 類 a タイプ 2。凸面、縄叩き目(縦位)。凹面、布目→ナデ。色調灰。	R9	12998
9	平瓦	SD2498-堆積層	平瓦 II B 類 b タイプ 2。凸面、縄叩き目(縦位)。凹面、布目→ナデ。色調灰。政庁第 III 期。	R8	12998

第 35 図 多賀城廃寺跡北東の道路側溝改良工事出土遺物 (2)

2) 基本層序

基本層序は表土である第1層(褐色土)で、その直下が地山である第2層(黄褐色土)である。

3) 発見した遺構と遺物(第33～35図、写真図版12-6、14-37～42)

発見した遺構に竪穴住居跡1棟と溝3条がある。遺構の確認は調査区東において、地山面で行っている。調査区西では、道路建設に際し大きく削平され、遺構は検出されない。遺構の年代は、出土遺物からS I 2498住居跡とS D 2499溝の廃絶は多賀城跡政庁第Ⅲ期以後で10世紀前葉より古い古代、S D 2500溝とS D 2501溝については10世紀前葉より新しい遺構である。

【S I 2499 住居跡】 S D 2498 溝、S D 2500 溝、S D 2501 溝と重複し、これらのいずれよりも古い。遺構検出は住居跡の西辺の一部のみである。西辺が北から約16°東へ偏る。壁の残存は深さ35cmで、壁際に幅約15cm、深さ約10cmの周溝が巡る。堆積層は、黄褐色土と青灰色粘土の2層に区分した。遺物は、堆積層第1層と第2層から平瓦I A類・I C類・II A類・II B類aタイプ・II B類bタイプ(政庁第Ⅲ期)、丸瓦II B類が出土した。

【S D 2498 溝】 S I 2499 住居跡、S D 2500 溝、S D 2501 溝と重複し、S I 2498 住居跡より新しく、S D 2500 溝、S D 2501 溝よりも古い。南北に延びる溝で、溝幅の中心線が北から約27°東へ偏る。規模は幅約4.5m、深さ約1mほどで断面形は「U」形である。堆積層は黄褐色と灰色を基調とし9層に区分でき、下層の第8・9層が自然堆積層であるのに対し、第1層から第7層までは人為に埋め戻され整地している。遺物は人為堆積層である第5層から集中して出土している。重弁蓮花文軒丸瓦(型番114・126・132、政庁第Ⅰ期、第34図1～3)、平瓦I A類(政庁第Ⅰ期第35図5)・I C類(政庁第Ⅰ期6)・II B類aタイプ(7・8)・II B類bタイプ(政庁第Ⅲ期、9)、丸瓦II B類aタイプ(第34図4)がある。

【S D 2500 溝】 S I 2499 住居跡、S D 2498 溝、S D 2501 溝と重複し、S I 2499 住居跡とS D 2498 溝より新しく、S D 2501 溝よりも古い。北西から南東へ延びる溝で、約5.5mの長さを検出した。大きさは幅40cm以下、深さ約15cmで、断面は「U」形である。堆積層は灰色土で、自然堆積層である。遺物は堆積層から平瓦II B類が出土した。

【S D 2501 溝】 S I 2499 住居跡、S D 2498 溝、S D 2500 溝と重複し、そのいずれよりも新しい。北東から南西へ延びる溝で、約1.3mの長さを検出している。大きさは幅約80cm、深さ約40cmで、断面形は台形である。堆積層は、黒褐色土と灰色土の2層に分かれ、自然堆積層である。遺物は堆積層から土師器坏・甕の破片、須恵器甕の破片、平瓦I A(政庁第Ⅰ期)・II B類bタイプ(政庁第Ⅲ期)が出土した。

(註)

灰白色火山灰の降下年代は、白鳥良一によって承平4年(934)を下限とする10世紀前半、当研究所年報では907～934の間の10世紀前葉頃と年代が与えられており、これらに従い10世紀前葉とする(白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所、1980年、31-32頁。宮城県多賀城跡調査研究所「Ⅱ. 第68次調査」『年報1997』1998年、76頁。)

IV. 付章

1. 関連研究・普及活動

平成13年度は多賀城跡発掘調査の他に、次の調査研究事業や普及活動を行った。

(1) 多賀城跡環境整備事業

平成13年度は、第7次5カ年計画の2年目にあたり、総事業費19,700千円(国庫補助50%)で柏木遺跡の環境整備として以下の工事を実施した。

① 法面保護工

北西部の法面の保護を目的として、高さ約1.0mのコンクリート擁壁を設置し、法面に張芝を施した。擁壁のデザインは昨年度実施したものと同様に、着色化粧型枠を使用して周辺の住宅地の景観と調和したものを採用した。

② 園路工・階段工

1) 園路工

丘陵の裾部から頂部までの動線として、車椅子の通行も可能な緩勾配の主園路(幅員1.8m、最大勾配8%)を設置した。この園路には、高齢者や障害者、幼児等の利用に配慮して、高さ65cmおよび85cmの2段式の手すりを設置した。そのほか丘陵尾根上に、遺構表示広場を右側に見ながら歩けるような副園路(幅員1.2m、最大勾配12.3%)を設置した。路面はこれまで多賀城跡の環境整備で採用してきたカラー樹脂舗装とした。

2) 階段工

副園路のうち、勾配が急で、斜路では対応できない部分3箇所に階段を設置した。蹴上は15cmとし、踏面は勾配にあわせて30cmもしくは60cmとした。階段面は粗面仕上げの陶板タイルを採用し、階段両側に園路の手すりと同仕様の2段式手すりを設置した。

③ 植栽工

西側丘陵頂部に高木(クヌギ・コブシ・イロハモミジ)を植栽した。

④ 雨水排水工

対象地北側に隣接する住宅地との境界に排水溝(コンクリート製U形溝)を設置した。

(2) 特別史跡多賀城跡附寺跡の現状変更

当研究所では、特別史跡内の遺構と歴史的景観の保護に努めている。しかし、やむなく特別史跡内の現状を変更するにあたっては、申請者及び関係機関と遺跡保護のために慎重な協議を行い、遺跡への影響がない範囲で最小限の現状変更に伴う調査を行っている。

平成13年度における現状変更申請は10件あった(表3)。その内容は次のとおりである。

番号	申請者/申請地	変更事業	対応
1	菊池つめ / 多賀城市市川字城前 79	擁壁設置 平成 13 年 2 月 14 日 県教委許可	発掘調査
2	宗教法人 玉川寺代表役員 村上孝邦 / 多賀城市市川字城前 27	仮本堂等 平成 13 年 2 月 14 日 県教委許可	立会
3	(株)千葉重機千葉昌一 / 多賀城市市川字城前 76-1	駐車場整備 平成 13 年 3 月 30 日 県教委許可	立会
4	多賀城市長 鈴木和夫 / 多賀城市市川字立石地内	あやめ案内板設置 平成 13 年 2 月 14 日 県教委許可	立会
5	多賀城市長 鈴木和夫 / 多賀城市市川字田屋場内	あやめまつり 平成 13 年 3 月 30 日 県教委許可	立会
6	多賀城市長 鈴木和夫 / 多賀城市市川字六月坂 19-2	岩場改修 平成 13 年 2 月 14 日 県教委許可	立会
7	多賀城市長 鈴木和夫 / 多賀城市市川字城前 65 他 1 筆	姫神コンサート 平成 13 年 5 月 30 日 県教委許可	立会
8	多賀城市長 鈴木和夫 / 多賀城市市川字城前	国体・万葉まつり 平成 13 年 5 月 30 日 県教委許可	立会
9	菊池良子 / 多賀城市市川字五万崎 17	擁壁設置 平成 13 年 8 月 22 日 県教委許可	発掘調査
10	(株)千葉重機 千葉晶一 / 多賀城市市川字城前 77-1	擁壁設置 平成 13 年 11 月 9 日 県教委許可	立会

表 3 平成 13 年度実施の現状変更一覧

①民間工事 5 件－擁壁設置工事（1・9・10）、寺院本堂増改築（2）・駐車場造成工事（3）。

②公共事業 1 件－岩場改修工事（6）。

③史跡の活用に関わるもの 4 件－あやめまつり（4・5）・国体炬火採火式（8）、コンサート（7）。

掘削を伴う擁壁設置工事の 2 件（1・9）については発掘調査を、その他現状変更が軽微なもの 8 件については工事の際に立ち会いを行った。発掘調査を行った 2 件（1・9）についての報告は、次年度以降の年報で報告する。

（3）多賀城関連遺跡発掘調査事業

当研究所では古代多賀城に関連する宮城県内の城柵及び官衙遺跡や生産遺跡について、計画的な調査と研究を継続的に行っている。この調査と研究事業は、中央政府が陸奥と出羽両国を支配する上で中枢的な役割を果たした古代の多賀城を、多角的な視野から解明することを目的としている。

平成 13 年度は第 6 次 5 カ年計画の 3 年度にあたり、桃生柵河北町から桃生町に位置する桃生城跡の第 10 次調査を実施した。発掘調査面積は約 600 m²である。調査にあたっては桃生町教育委員会と河北地区教育委員会の協力を得た。総事業費は 11,400 千円（50%国庫補助）である。調査の成果は次のとおりである。

桃生城内に位置する西側丘陵南半部の丘陵頂部を発掘調査した。発見した遺構は、竪穴住居跡 5 棟、土壇 1 基である。住居跡 4 棟は、東北地方南部の土師器編年上、栗圀式期に位置づけられ、残る 1 棟も同時代のものとみられる。土壇は弥生時代の遺構とみられる。今年度の調査区では、桃生城が機能していた時期の遺構が造られていない。桃生城内の西側丘陵頂部は、本年度と昨年度（第 9 次調査）の調査成果から、桃生城の官衙施設及び同時代の住居などの施設を置かない空間といえる。この西側頂部丘陵頂部の利用については、城内でありながら意図的に施設を造らない在り方を積極的に評価すれば、眺望を目的とした場または兵士の訓練を行う場の可能性が考えられる。

(4) 遺構調査研究事業

本事業は多賀城跡及び関連遺跡の発掘調査によって検出した諸遺構の保存と活用を目的として、他遺跡の類例と比較検討しながら基礎的研究を行うものである。本年度は遺構調査研究事業の第5次5カ年計画の4年度として、静岡県遠江国府国分寺跡、同伊豆国府・国分寺跡、宮城県仙台市郡山遺跡、宮崎町壇の越遺跡、築館町伊治城跡、矢本町赤井遺跡、河化町新出東遺跡等の調査データを収集した。さらに従来収集した各地のデータを整理し、多賀城跡及び桃生城跡と比較し検討を行った。

(5) 発掘調査図面のデジタル化事業

当研究所がこれまでに調査して蓄積してきた遺構実測図をデジタルデータとしてCDに記録保存することにより、発掘調査資料の恒久的な保存と、デジタル情報としての積極的な活用を可能とした。総事業費は800千円(緊急地域雇用特別基金事業)である。

(6) その他

1. 現地説明会の開催

発掘調査の成果を一般に公開するために、下記の現地説明会を開催した。

白鳥良一・阿部恵・吾妻俊典	「桃生城跡第10次調査について」	平成13年9月15日
白鳥良一・後藤秀一・古川一明・白崎恵介	「多賀城跡第72次調査について」	平成13年10月6日

2. 各機関・委員会などへの協力

白鳥良一 胆沢城跡整備指導会議 秋田市秋田城跡環境整備指導委員 払田柵跡保存管理計画策定指導委員 盛岡市志波城跡整備委員 仙台市郡山遺跡発掘調査指導委員 多賀城市文化財保護委員 多賀城市環境 審議委員 古川市名生館官衙遺跡発掘調査・環境整備指導委員 史跡「山王囿遺跡」整備指導委員会委員 角田市郡山遺跡発掘調査指導委員 新世紀・みやぎ国体実行委員会式典専門委員会大会旗・炬火リレー部会委員 古代城柵官衙遺跡検討会代表世話人

佐藤和彦 青森県史編さん委員会古代部会専門委員
古川一明 高清水町史編さん委員
吾妻俊典 女川町文化財保護委員
白崎恵介 古川市名生館官衙遺跡発掘調査・環境整備指導委員 文化庁史跡等整備の在り方に関する調査研究会協力委員

3. 講演会などへの協力

白鳥良一「原始・古代の一日」	一迫町郷土史講座(春期)	平成13年5月11日
————	「北の政庁・多賀城」福岡市埋蔵文化財センター考古学講座「鴻臚館の時代9」	平成13年8月18日
————	「うるしと縄文人」山王囿遺跡国指定30周年記念企画フォーラム	平成13年9月16日
————	「特別史跡多賀城跡の歴史的意義」高等学校及び特殊教育諸学校高等部初任者研修	平成13年10月2日
————	「多賀城と大宰府」平成13年度第12回史跡案内ボランティア養成講座	平成13年10月25日
————	「特別史跡多賀城跡の歴史的意義」小中学校及び特殊教育諸学校小中学部初任者研修	平成13年11月6日
————	「多賀城時代の税と人々の暮らし」多賀城市納税貯蓄組合長研修会	平成13年11月2日
————	「伊治城と古代蝦夷」平成13年度栗原地区高等学校社会科教育研究会例会	平成13年11月28日
————	「多賀城と大宰府、そして平城宮」平成13年度多賀城歴史探訪会学習会	平成13年12月18日

佐藤和彦「壺の碑(多賀城碑)」平成13年度東北歴史博物館開放講座 平成13年10月21日
 古川一明「栗原の古墳時代」宮城県栗原郡文化財保護委員連絡協議会研修会 平成13年5月17日
 吾妻俊典「古代石巻地域の歴史ー桃生城ー」普通科ガイダンス講話 宮城県飯野川高等学校 平成13年11月2日
 ————「洛中洛外図屏風にみる都のくらし」河北地区教育員会文化財セミナー河北地区教育委員会 平成14年2月23日
 ————「荘園に生きる人々のくらし」河北地区教育員会文化財セミナー 河北地区教育委員会 平成14年3月9日
 ————「桃生城時代の人々のくらし」河北地区教育員会文化財セミナー 河北地区教育委員会 平成14年3月16日
 ————「米沢の史跡巡り」河北地区教育員会文化財セミナー移動講座 河北地区教育委員会 平成14年3月23日

4. 研究発表・執筆など

後藤・古川・白崎「多賀城跡第72次調査の概要」宮城県発掘調査成果発表会 平成14年1月19日
 ————「多賀城跡第72次調査の概要」第28回古代城柵官衙遺跡検討会 平成14年2月9日
 後藤・吾妻・白崎「2000年度宮城県内主要発掘紹介」『宮城考古学』第3号 宮城県考古学会 平成13年5月12日
 吾妻俊典「宮城県における古墳時代前期から中期への土器様式の変化」第13回研究会宮城県考古学会古墳時代研究部会
 平成13年4月28日
 ————「2000年の考古学界の動向 古代(東北)」『月刊考古学ジャーナル』臨時増刊号No.473 平成13年5月30日
 ————「東北地方における須恵器の様相」古代の土器研究会 第101回例会 平成13年6月9日
 ————「桃生城跡の発掘調査からみた宝亀5年における海道蝦夷の蜂起」
 2001年度東北史学会・米沢史学会合同大会 平成13年10月7日
 ————「多賀城跡周辺における須恵器製作技法の変化」
 『古代の土器研究ー律令的土器様式の西東6 須恵器製作技法とその転換ー』古代の土器研究会
 平成13年11月23日
 白崎恵介「塩竈市の水道施設」『宮城県の近代化遺産』宮城県教育委員会 平成14年3月30日

5. 自治体職員協力の事業

協力交流研修員、中華人民共和国・敦煌研究院考古研究所館員 王平先
 多賀城跡と桃生城跡の発掘調査および遺物整理を通して、所員が次のような指導を行った。

- ・発掘調査の流れ
- ・報告書作成について
- ・多賀城跡関連遺跡について
- ・多賀城跡と古代東北について
- ・遺跡整備について

6. 連携大学院

東北大学大学院文学研究科長と宮城県多賀城跡調査研究所長の協定に基づき、文学研究科文化財科学専攻の大学院生の研究と指導にあたった。

白鳥良一(客員教授) 文化財科学研究演習Ⅰ「史跡の保存整備と活用(1)」
 文化財科学研究演習Ⅱ「史跡の保存整備と活用(2)」
 課題研究
 後藤秀一(客員助教授) 文化財科学研究実習Ⅱ「発掘調査の実際」
 課題研究

2. 組織と職員

〈宮城県教育委員会行政組織規則(抄)〉

第13条の四 文化財保護課の分掌事務は、次のとおりとする。

四 多賀城跡調査研究所及び歴史博物館に関すること。

第21条 特別史跡多賀城跡附寺跡(これに関連する遺跡を含む。以下同じ)の発掘、調査及び研究を行うため、地方機関として多賀城跡調査研究所を設置する。

2 多賀城跡調査研究所の名称及び位置は次のとおりとする。

名 称	位 置
宮城県多賀城跡調査研究所	多賀城市

3 多賀城跡調査研究所の所掌事務は、次のとおりとする。

一 特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘に関すること。

二 特別史跡多賀城跡附寺跡の出土品の調査及び研究に関すること。

三 特別史跡多賀城跡附寺跡の環境整備に関すること。

四 庶務に関すること。

第24条 必要と認めるときは、多賀城跡調査研究所に次の表の上欄に掲げる職を置き、その職務は、当該下欄に定めるとおりとする。

職	職 務
上席主任研究員	上司の命を受け、重要かつ高度な調査研究に従事し、主任研究員、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
副主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、研究員の業務を整理する。
研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事する。

2 上席主任研究員、主任研究員、副主任研究員及び研究員は、技術職員をもつて充てる。

〈職員〉 研究班

	主任研究員 (班長)	阿部 恵
	副主任研究員 (副班長)	後藤 秀一
所長	次長 (総括)・兼副参事	副主任研究員 佐藤 和彦 [博物館兼務]
白鳥 良一	大槻 憲男	副主任研究員 古川 一明
	[博物館兼務]	研 究 員 吾妻 俊典
		技 師 白崎 恵介
	総 務 班	
	主 査	山口英美子 [博物館兼務]
	主 事	伊藤 亮一 [博物館兼務]

3. 沿革と実績

(1) 宮城県多賀城跡調査研究所の沿革

年月	事 項
大正 11. 10	多賀城跡が史蹟名勝天然紀念物保存法(大正 8・4 公布)により史蹟指定、指定名称「多賀城跡附寺跡」
昭和 35	県教委が「多賀城跡発掘調査委員会」を組織して 5 カ年計画で多賀城跡の発掘調査を実施することになり、その初年度事業として多賀城跡と多賀城廃寺跡の地形図を作成
36. 8	多賀城廃寺跡第 1 次発掘調査実施(県教委主体、多賀城町と河北文化事業団共催。調査団長は伊東信雄東北大学教授)
37. 8	多賀城廃寺跡第 2 次発掘調査実施、主要伽藍配置が判明
38. 8	多賀城跡政庁地区発掘調査(第 1 次)開始、以後 40 年 8 月(第 3 次)まで実施、政庁地区の朝堂院的な建物配置が判明
41. 4	多賀城跡附寺跡特別史跡に昇格指定
43. 11	多賀城町が多賀城跡政庁地区の発掘調査(第 4 次)を再開
44. 4	宮城県多賀城跡調査研究所設立
44. 7	多賀城跡調査研究指導委員会設置(委員長伊東信雄) 研究所による多賀城跡調査研究事業開始
44. 10	色麻村日の出山窯跡の発掘調査実施
45. 3	『多賀城跡調査報告 1—多賀城廃寺跡—』刊行
45. 4	研究所による多賀城跡環境整備事業開始
48. 10	金堀地区を対象とした第 21 次調査で計帳様文書断簡を発見
49. 2	外郭西辺地区の追加指定が官報告示
49. 4	多賀城関連遺跡発掘調査事業開始
49. 8	桃生城跡の発掘調査に着手(昭和 50 年度まで継続)
49. 8	プレハブ庁舎から東北歴史資料館の建物に移転
51. 3	特別史跡多賀城跡附寺跡保存管理計画書策定
52. 7	伊治城跡の発掘調査に着手(昭和 54 年度まで継続)
53. 4	研究第一科・同第二科の 2 科制となる、遺構調査研究事業開始
53. 6	漆紙文書の発見を報道発表、これにより研究所が山本壮一郎知事から表彰を受ける
55. 3	『多賀城跡—政庁跡図録編—』刊行
55. 3	館前遺跡の追加指定が官報告示
55. 7	名生館遺跡の発掘調査に着手(昭和 60 年度まで継続)、初年度の調査で 8 世紀初頭の官衙中枢部を検出
57. 1	現状変更に伴う緊急調査(第 40 次)により外郭線南辺築地中央部で木樋発見
57. 3	『多賀城跡—政庁跡本文編—』刊行
58. 11	第 43・44 次調査で政庁南前面の道路遺構発見
59. 3	多賀城跡南面地域の追加指定が官報告示
60. 9	名生館遺跡関連合戦原瓦窯跡発掘調査実施
61. 8	東山遺跡の発掘調査に着手(平成 4 年度まで継続)
62. 8	名生館官衙遺跡の史跡指定が官報告示
62. 11	第 53 次調査で多賀城第 I・II 期の外郭東門を発見
63. 3	特別史跡多賀城跡附寺跡第 2 次保存管理計画書策定
平成 2. 6	柏木遺跡の追加指定が官報告示
2. 11	多賀城跡調査研究指導委員会に南門—政庁間整備活用専門部会を設置
4. 11	日本最古の「かな」漆紙文書について報道発表
5. 8	下伊場野窯跡群の調査を実施し、3 基の多賀城創建瓦窯跡を発見
5. 9	山王千刈田地区の追加指定が官報告示
6. 8	桃生城跡の発掘調査を再開(平成 13 年度まで継続中)、政庁の全貌を解明
7. 6	第 31 回指導委員会において南門—政庁間整備活用計画案承認
9. 11	多賀城碑覆屋の解体修理および碑地下部分の発掘調査を実施
10. 6	多賀城碑の重要文化財(古文書)指定が官報告示
11. 1	東山官衙遺跡の史跡指定が官報告示
11. 4	2 科制が廃され、研究班となる
11. 4	東北歴史博物館の建物に移転
14. 1	「多賀城跡等の発掘調査を通して東北古代史の解明に尽くした功績」により第 51 回河北文化賞を受賞

(2) 事業実績

1) 多賀城跡発掘調査事業の実績

計画	年度	回数	発掘調査地区	発掘面積 (㎡)	経費 (千円)	計画	年度	回数	発掘調査地区	発掘面積 (㎡)	経費 (千円)	
												計画
第1次5カ年計画	昭和44	5次	政庁地区南東部	1,980	9,000	第4次5カ年計画	昭和59	45次	坂下地区	70	29,000	
		6次	政庁地区北東部	2,079				46次	外郭西門地区	750		
		7次	外郭南辺中央部(多賀城碑付近)	264				47次	外郭西辺中央部	1,000		
	昭和45	8次	外郭南辺中央部	350	12,000		昭和60	48次	外郭南門地区	800	29,000	
		9次	政庁地区南西部	2,046				49次	外郭北門推定地区	450		
		10次	外郭西辺中央部	495			昭和61	50次	政庁南地区	900	29,000	
		11次	外郭東辺南部	660				51次	外郭北東隅東地区	500		
	昭和46	12次	外郭中央地区北部	3,795	12,000		昭和62	52次	大畑地区及び東辺外の地区	500	29,000	
		13次	外郭東辺東門付近	1,600				53次	外郭東門北東地区	1,000		
		14次	外郭東地区北部	2,086			昭和63	54次	外郭東門東地区	1,000	29,000	
	昭和47	15次	鴻の池周辺	112	13,000			平成元	56次	大畑地区北半部		1,550
		16次	政庁地区北半部	1,320			57次		外郭東辺南半部(西沢地区)	500		
		17次	外郭北東隅・北西隅	1,729			平成2	58次	大畑地区中央部	1,470	30,000	
		18次	外郭中央地区北部	2,937				59次	大畑地区中央部東側	900		
	昭和48	19次	政庁地区北西部	2,640	17,000		平成3	60次	大畑地区中央部	1,450	30,000	
		20次	外郭南辺中央部	990		61次		鴻の池地区	150			
		21次	外郭西地区中央部	1,485		平成4	62次	大畑地区南半部	1,100	35,000		
		22次	城外南方(高平遺跡)	3,465			63次	大畑地区北半部	1,700			
	第2次5カ年計画	昭和49	23次	外郭東地区北部(宇大畑)	3,300	17,000	第5次5カ年計画	平成5	64次	大畑地区北部	3,000	35,000
			24次	外郭南東隅	2,640				平成6	65次	外郭東門北部 現状変更に伴う調査	
昭和50		25次	多賀城廃寺跡南大門推定地	2,310	22,000	平成7		66次		大畑地区北西部	3,000	35,000
		26次	多賀城廃寺跡中門前方地区	2,310				平成8	67次	大畑地区西部	3,000	
		27次	奏社官西隣市川大久保地区	660		平成9			68次	人畑地区西部 多賀城碑覆屋の解体修理に伴う発掘調査	2,650	36,000
昭和51		28次	五万崎地区	2,310	22,000		平成10	69次	城前地区南部	2,000	36,000	
		29次	五万崎地区	2,310		第7次5カ年計画		平成11	70次	城前地区南部		2,000
昭和52		30次	五万崎地区	1,980	22,000		平成12	71次	城前地区南部	2,000	32,300	
		31次	政庁北方隣接地区	1,980		平成13		72次	南門西側築地堀跡 南門-政庁間道路跡	1,000		28,900
昭和53		32次	政庁北方隣接地区	1,000	22,000		平成14	73次	南門東側築地堀跡 南門-政庁間道路跡			
	33次	外郭西門地区	1,000	平成15		74次		城外南北大路跡と その東側の状況				
第3次5カ年計画	昭和54	34次	雀山地区南低湿地		1,300	30,000	*平成13年度までは実績で、平成14年度以降は計画					
		35次	鴻の池南地区	900								
	昭和55	36次	外郭東地域中央部作貫地区	1,800	30,000							
		37次	多賀城外南地方(砂押川東岸)地区	700								
	昭和56	38次	作貫南端低湿地(緊急調査)	50	35,000							
		39次	外郭東地域中央部作貫地区	2,500								
40次		外郭南辺築地東半中央部(立石地区・緊急)	80									
昭和57	41次	外郭東辺南端部(田屋場東端地区)	1,200	32,000								
	42次	外郭東地域中央部(作貫地区)	500									
昭和58	43次	外郭中央地区中央部(政庁南方)	800	32,000								
	44次	外郭中央地区中央部(政庁南方)	2,500									

2) 多賀城跡附寺跡環境整備事業の実績

	年度	対象地区	主な工事内容	面積 (㎡)	事業費(千円)
第1次 5カ年 計画	昭和45	政庁地区(第1期)	南門翼廊跡・東脇殿跡表示工	3,519	10,000
	昭和46	政庁地区(第2期)	正殿跡・築地塀跡表示工	7,256	20,000
	昭和47	政庁地区(第3期)	西脇殿跡・築地塀跡表示工	14,669	25,000
	昭和48	政庁地区(第4期)	北西門跡・築地塀跡表示工	9,415	20,000
		外郭東門地区	東門跡・竪穴住居跡表示工		
昭和49	六月坂地区	掘立建物跡・倉庫跡・道路跡表示工	8,326	20,000	
第2次 5カ年 計画	昭和50	外郭東南隅地区(第1期)	木質遺構保存施設設置工	3,600	20,000
	昭和51	外郭東南隅地区(第2期)	湿地修景工・園路工	6,400	10,000
	昭和52	鴻の池地区(第1期)	南辺築地塀跡表示工	2,000	16,000
	昭和53	鴻の池地区(第2期)	多賀城碑周辺修景工	2,500	16,000
		南門地区(第1期)	南門跡・築地塀跡保護工		
昭和54	南門地区(第2期)	南門周辺丘陵の地形修復工・緑化修景工	5,200	20,000	
第3次 5カ年 計画	昭和55	南門地区(第3期)	園路工・便益施設工・緑化修景工	7,030	30,000
	昭和56	外郭南築地東半部	緑化修景工	2,149	30,000
		園路(資料館-南門)	園路工・便益施設工・緑化修景工		
	昭和57	外郭南門地区東斜面	園路工	31,831	28,000
		作貫地区(第1期)	遺構保護盛土工・緑化修景工		
	昭和58	作貫地区(第2期)	建物跡表示工・便益施設工・園路工・緑化修景工	54,400	30,000
昭和59	作貫地区(第3期)	土塁跡及び空堀跡表示工・便益施設工・園路工	6,750	27,000	
第4次 5カ年 計画	昭和60	作貫地区(第4期)	遺構露出展示工・便益施設工・園路工・緑化修景工	6,400	27,000
	昭和61	政庁南地区	地形修復工・道路跡復元工・緑化修景工	7,470	27,000
		作貫地区	便益施設工		
		雀山地区	緑化修景工		
	昭和62	作貫地区北部	園路工・緑化修景工・便益施設工	6,130	27,000
		政庁地区	便益施設工・園路工・緑化修景工		
		雀山地区	便益施設工・園路工・緑化修景工		
昭和63	作貫地区北部・丘陵南西裾部	便益施設工・園路工・緑化修景工	8,260	27,000	
平成元	北辺地区南半部	便益施設工・園路工・緑化修景工	6,700	27,112	
第5次 5カ年 計画	平成2	北辺地区北半部(第1期)	便益施設工・園路工・緑化修景工	11,500	30,000
	平成3	北辺地区北半部(第2期)	便益施設工・園路工・緑化修景工	19,000	30,000
	平成4	北辺地区北半部(第3期)	便益施設工	2,900	30,000
		東門・大畑地区東側部(第1期)	地形修復工・園路工・緑化修景工		
	平成5	東門・大畑地区東側部(第2期)	奈良時代東門跡及び掘立建物跡表示工・便益施設工	2,500	35,000
	平成6	東門・大畑地区東側部(第3期)	便益施設工	550	35,000
第6次 5カ年 計画	平成7	東門・大畑地区西側北半部(第1期)	道路跡復元工・築地塀跡及び建物跡表示工・便益施設工・緑化修景工	3,120	30,000
	平成8	東門・大畑地区西側北半部(第2期)	地形修復工・道路跡復元工・緑化修景工	14,250	39,000
	平成9	東門・大畑地区西側北半部(第3期)	道路跡表示工・便益施設工	805	51,000
		南門地区	多賀城碑覆屋解体修理工	50	
	平成10	東門・大畑地区西側北半部(第4期)	道路跡表示工・排水施設工・緑化修景工	12,500	35,000
	平成11	東門・大畑地区西側北半部(第5期)	建物跡表示工・便益施設工・緑化修景工		31,500
第7次 5カ年 計画	平成12	柏木遺跡(第1期)	遺構保護造成工・排水工・法面保護工	3,800	14,400
	平成13	柏木遺跡(第2期)	法面保護工・園路階段工・植栽工・排水工		19,700

3) 多賀城関連遺跡発掘調査事業の実績

計画	年度	遺跡名	事業	内容	発掘面積 (㎡)	経費 (千円)
第1次 5カ年 計画	昭和49	桃生城跡	地形図作成 第1次発掘調査	内郭地区・外郭の調査	500	2500
	昭和50	桃生城跡	第2次発掘調査	同上	850	2,500
	昭和51	伊治城跡	地形図作成		1,020	1,500
	昭和52	伊治城跡	第1次発掘調査	外郭線・郭内の調査	438	3,000
	昭和53	伊治城跡	第2次発掘調査	郭内の調査	780	3,000
第2次 5カ年 計画	昭和54	伊治城跡	第3次発掘調査	同上	1,000	4,000
	昭和55	名生館遺跡	地形図作成 第1次発掘調査	城内地区の調査	1,650	7,000
	昭和56	名生館遺跡	第2次発掘調査	同上	1,960	7,000
	昭和57	名生館遺跡	第3次発掘調査	小館・内館地区の調査	1,156	7,000
	昭和58	名生館遺跡	第4次発掘調査	小館地区の調査	1,020	7,000
第3次 5カ年 計画	昭和59	名生館遺跡	第5次発掘調査	城内地区の調査	1,800	6,300
	昭和60	名生館遺跡 合戦原竈跡	第6次発掘調査	範囲確認調査 関連竈跡調査	1,300	6,300
	昭和61	東山遺跡	第1次発掘調査	遺構確認調査	1,100	7,800
	昭和62	東山遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	1,074	7,000
	昭和63	東山遺跡	第3次発掘調査	官衙中枢部の把握	1,200	7,000
第4次 5カ年 計画	平成元	東山遺跡	第4次発掘調査	同上	562	7,000
	平成2	東山遺跡	第5次発掘調査	同上	600	7,000
	平成3	東山遺跡	第6次発掘調査	同上	2,200	10,000
	平成4	東山遺跡	第7次発掘調査	同上	3,260	12,000
	平成5	下伊場野竈跡	地形図作成 発掘調査	多賀城創建期竈跡調査	600	14,000
第5次 5カ年 計画	平成6	桃生城跡	地形図作成 第3次発掘調査	政庁地区と外郭線の調査	2,300	22,000
	平成7	桃生城跡	第4次発掘調査	同上	730	20000
	平成8	桃生城跡	第5次発掘調査	外郭線の調査	800	17,000
	平成9	桃生城跡	第6次発掘調査	政庁西側官衙の調査	800	17,000
	平成10	桃生城跡	第7次発掘調査	同上	800	17000
第6次 5カ年 計画	平成11	桃生城跡	第8次発掘調査	同上	1,200	15,300
	平成12	桃生城跡	第9次発掘調査	政庁西側丘陵上の調査	1,400	10,500
	平成13	桃生城跡	第10次発掘調査	同上	600	11,400
	平成14	亀岡遺跡	第1次発掘調査			
	平成15	亀岡遺跡	第2次発掘調査			

※平成13年度までは実績で、平成14年度以降は計画

4) 研究成果刊行物

①宮城県多賀城跡調査研究所年報

『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1969』	(第 5・6・7 次調査)	昭和 45 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1970』	(第 7・8・9・10・11 次調査)	昭和 46 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1971』	(第 12・13・14 次調査)	昭和 47 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1972』	(第 15・16・17・18 次調査)	昭和 48 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1973』	(第 19・20・21・22 次調査)	昭和 49 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1974』	(第 23・24 次調査)	昭和 50 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1975』	(第 25・26・27 次調査、東外郭線南端部緊急発掘)	昭和 51 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1976』	(第 28・29 次調査)	昭和 52 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1977』	(第 30・31 次調査)	昭和 53 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1978』	(第 32・33 次調査、環境整備)	昭和 54 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1979』	(第 34・35 次調査、環境整備)	昭和 55 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1980』	(第 36・37 次調査)	昭和 56 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1981』	(第 38・39・40 次調査)	昭和 57 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1982』	(第 41・42 次調査)	昭和 58 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1983』	(第 43・44 次調査)	昭和 59 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984』	(第 45・46・47 次調査、環境整備)	昭和 60 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1985』	(第 46・48・49 次調査)	昭和 61 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1986』	(第 49・50・51 次調査)	昭和 62 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1987』	(第 50・52・53 次調査)	昭和 63 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1988』	(第 53・54・55 次調査)	平成元年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1989』	(第 56・57 次調査)	平成 2 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1990』	(第 58・59 次調査)	平成 3 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991』	(第 60・61 次調査)	平成 4 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1992』	(第 62・63 次調査)	平成 5 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1993』	(第 64 次調査)	平成 6 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1994』	(第 65 次調査、環境整備)	平成 7 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1995』	(第 66 次調査)	平成 8 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1996』	(第 67 次調査)	平成 9 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1997』	(第 68 次調査、多賀城碑覆屋解体修理)	平成 10 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1998』	(第 69 次調査)	平成 11 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1999』	(第 70 次調査)	平成 12 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2000』	(第 71 次調査、環境整備)	平成 13 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2001』	(第 72 次調査)	平成 14 年 3 月

②多賀城関連遺跡発掘調査報告書

『桃生城跡Ⅰ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 1 冊	昭和 50 年 3 月
『桃生城跡Ⅱ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 2 冊	昭和 51 年 3 月
『伊治城跡Ⅰ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 3 冊	昭和 53 年 3 月
『伊治城跡Ⅱ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 4 冊	昭和 54 年 3 月
『伊治城跡Ⅲ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 5 冊	昭和 55 年 3 月
『名生館遺跡Ⅰ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 6 冊	昭和 56 年 3 月
『名生館遺跡Ⅱ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 7 冊	昭和 57 年 3 月
『名生館遺跡Ⅲ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 8 冊	昭和 58 年 3 月
『名生館遺跡Ⅳ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 9 冊	昭和 59 年 3 月
『名生館遺跡Ⅴ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 10 冊	昭和 60 年 3 月
『名生館遺跡Ⅵ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 11 冊	昭和 61 年 3 月
『東山遺跡Ⅰ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 12 冊	昭和 62 年 3 月
『東山遺跡Ⅱ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 13 冊	昭和 63 年 3 月
『東山遺跡Ⅲ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 14 冊	平成元年 3 月
『東山遺跡Ⅳ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 15 冊	平成 2 年 3 月
『東山遺跡Ⅴ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 16 冊	平成 3 年 3 月
『東山遺跡Ⅵ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 17 冊	平成 4 年 3 月
『東山遺跡Ⅶ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 18 冊	平成 5 年 3 月
『下伊場野窯跡』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 19 冊	平成 6 年 3 月
『桃生城跡Ⅲ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 20 冊	平成 7 年 3 月
『桃生城跡Ⅳ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 21 冊	平成 8 年 3 月
『桃生城跡Ⅴ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 22 冊	平成 9 年 3 月
『桃生城跡Ⅵ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 23 冊	平成 10 年 3 月
『桃生城跡Ⅶ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 24 冊	平成 11 年 3 月
『桃生城跡Ⅷ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 25 冊	平成 12 年 3 月
『桃生城跡Ⅸ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 26 冊	平成 13 年 3 月
『桃生城跡Ⅹ』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 27 冊	平成 14 年 3 月

③研究紀要

『研究紀要Ⅰ』	昭和 49 年 3 月
『研究紀要Ⅱ』	昭和 50 年 3 月
『研究紀要Ⅲ』	昭和 51 年 3 月
『研究紀要Ⅳ』	昭和 52 年 3 月
『研究紀要Ⅴ』	昭和 53 年 3 月
『研究紀要Ⅵ』	昭和 54 年 3 月
『研究紀要Ⅶ』	昭和 55 年 3 月

④調査報告書・資料集他

『多賀城と古代日本』	昭和 50 年 3 月
『多賀城漆紙文書』	昭和 54 年 3 月
『多賀城跡—政庁跡図録編—』	昭和 55 年 3 月
『多賀城跡—政庁跡本文編—』	昭和 57 年 3 月
『多賀城と古代東北』	昭和 60 年 3 月

報告書抄録

ふりがな	みやぎけんたがじょうあとちようさけんきゆうしょねんぽう 2001								
書名	宮城県多賀城跡調査研究所年報 2001								
副書名	多賀城跡－第 72 次調査－								
巻次	宮城県多賀城跡調査研究所年報 2001								
シリーズ名	宮城県多賀城跡調査研究所年報								
シリーズ番号	2001								
編著者名	後藤秀一・古川一明・吾妻俊典・白崎恵介								
編集機関	宮城県多賀城跡調査研究所								
所在地	〒985-0862 宮城県多賀城市高崎 1 丁目 22 番 1 号								
発行年月日	西暦 2002 年 3 月 20 日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
特別史跡 たがじょうあと 多賀城跡 第 72 次調査	みやぎけんたがじょうし 宮城県多賀城市 いちかわ うきしま 市川・浮島	04209	004	38 度 18 分 14 秒	140 度 59 分 30 秒	2001.4.24 ～ 2002.2.28	1,000 m ²	調査計画 に基づく 学術調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
特別史跡 多賀城跡	国府・ 城柵遺 跡	奈良時代 ～ 平安時代	築地堀跡	1 条	○瓦(軒丸瓦・軒平 瓦・平瓦・丸瓦・ 鬼瓦) ○鉄製品(鉄鏃・鉄 刀) ○須恵器(埴瓶・壺)	1.外郭南門西側の築地堀跡 の構造と変遷を確認した。 2.外郭南門北側での政庁－ 南門間道路跡の変遷が明ら かとなった。 3.調査区西部の築地堀基礎 整地下で横穴墓を 2 基発見 した。			
			道路跡	1 条					
			横穴墓	2 基					
			土壇	1 基					
			溝など	数条					

写真図版

写真図版 1

調査区遠景
(南上空から)

[フィルム D23178A]



調査区全景
(北西上空から)

[フィルム D23186A]



築地塀跡
(北上空より)

[フィルム D23194A]





築地塀跡
(南より)

[フィルムD23268A]



同上 積み手の違い
(南より)

[フィルムD23272A]



同上
(南より)

[フィルムD23273A]

写真図版 3

築地塀跡断面

A-A` (南西より)

[フィルムD23279A]



同上

B-B` (東より)

[フィルムD23291A]



同上

C-C` (南より)

[フィルムD23306A]



写真図版 4



築地塀跡断面C-C` (南より)
〔フィルムD23313A〕



築地塀跡e補修 (北東より)
〔フィルムD23274A〕



南門と築地塀跡の位置関係 (東より) 〔フィルムD23341A〕

写真図版 5

S D2657 溝断面
(北より)

[フィルムD23208C]



S D2658 溝断面
(北より)

[フィルムD23212C]



S X2664 整地層
(南より)

[フィルムD23243A]

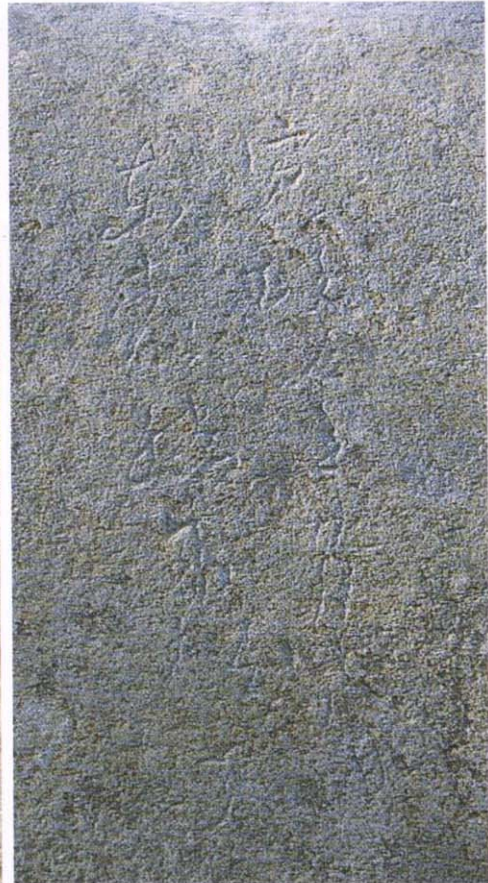




調査区東部（西上空より） [フィルムD23198A]



調査区東部（西より）
[フィルムD23235A]



积文
寛政五年九月十八日
東 □^(都カ)
□^(秋カ)
尔 □^(観カ)
□^(来カ)

近世の碑文（東より）
[フィルムD23439A]

写真図版 7

横穴墓
(西より)

[フィルムD23225A]



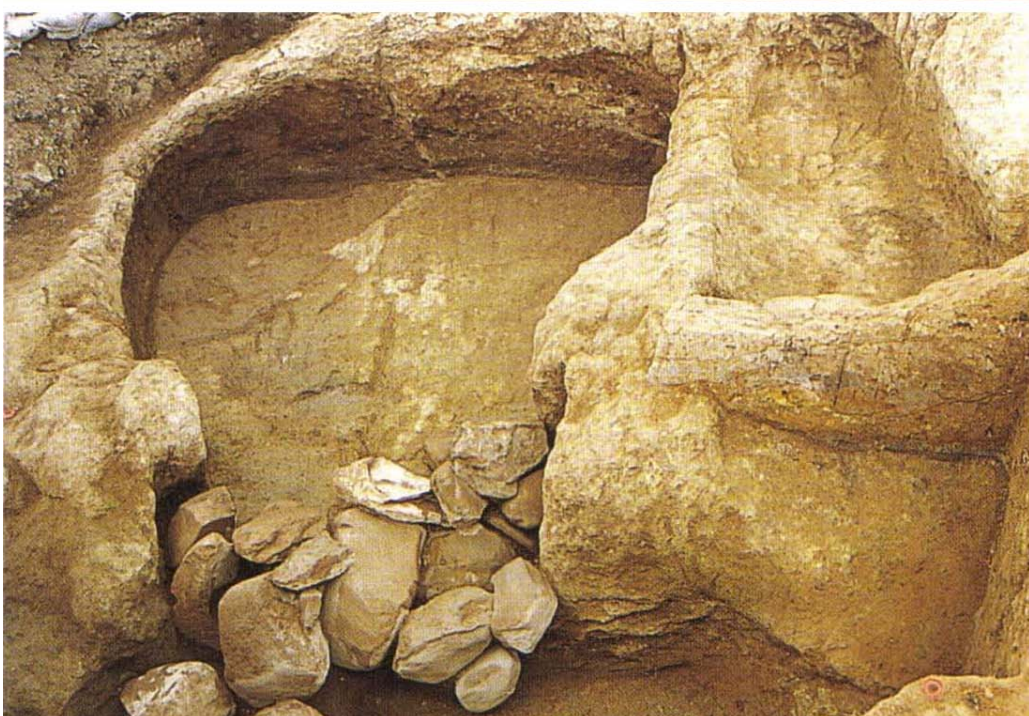
横穴墓と基礎整地
(北より)

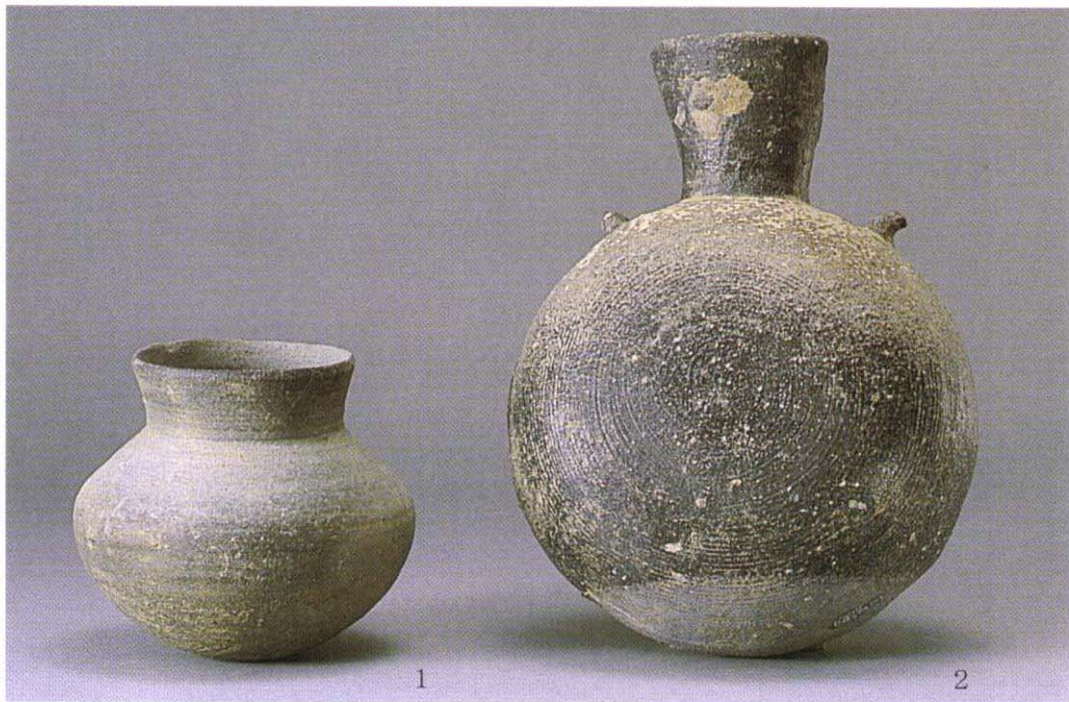
[フィルムD23221C]



S K2665 土壇
(南より)

[フィルムD23228A]

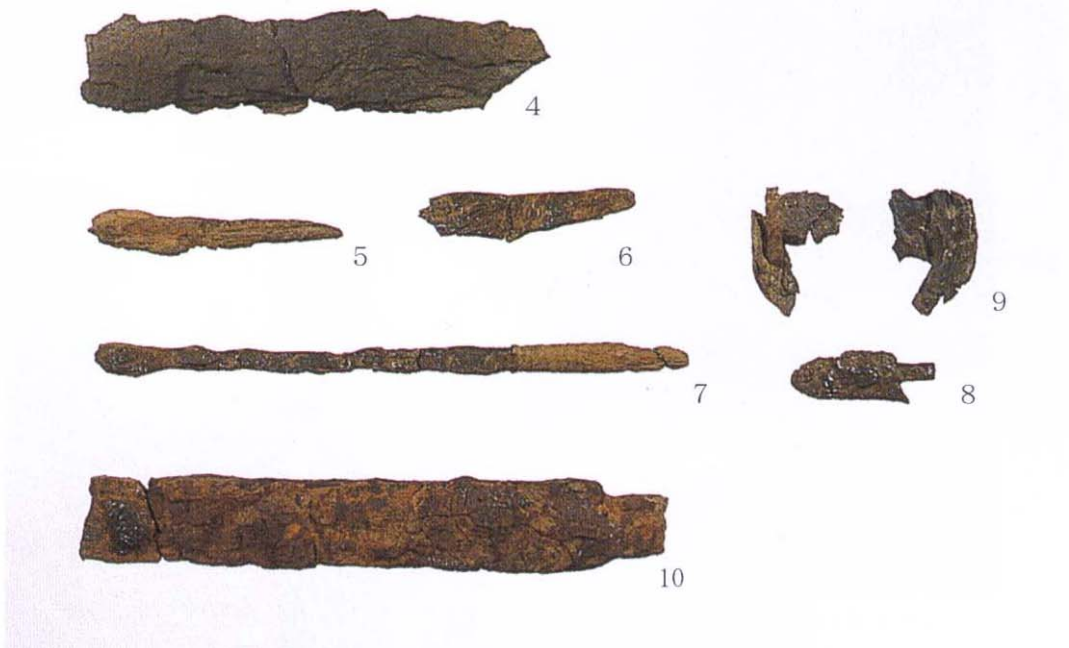




S P 2661 横穴墓出土 須恵器壺・提瓶 [フィルムD23373A]



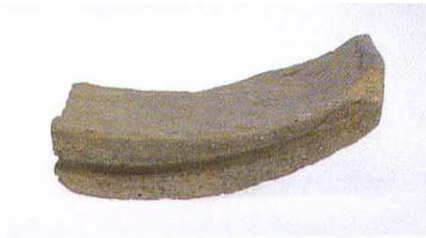
S P 2661 横穴墓出土直刀 [フィルムD23418]



S P 2661 横穴墓出土直刀 4・刀子 5、6・鉄鍬 7、8・鏝 9
S X 2664 整地層出土直刀 10 [フィルムD23417]



1. S F 202e 瓦積
640 単弧文軒平瓦
〔フィルムD23384〕



2. 南第 10 層
(S F 202e 崩壊土) 出土
640 単弧文軒平瓦
〔フィルムD23387〕



3. S F 202e
瓦積平瓦 (凸面稲妻状叩)
〔フィルムD23378〕



4. 南第 10 層
(S F 202e 崩壊土) 出土
221~223 軒丸瓦
〔フィルムD23403〕



5. 南第 10 層
(S F 202e 崩壊土) 出土
311 か 313 軒丸瓦
〔フィルムD23404〕



6. 南第 10 層
(S F 202e 崩壊土) 出土
平瓦 II C 類凹面記号 +
〔フィルムD23435〕



7. 南第 10 層
(S F 202e 崩壊土) 出土
243 軒丸瓦
〔フィルムD23401〕



8. 南第 10 層
(S F 202e 崩壊土) 出土
953 鬼瓦
〔フィルムD23405〕



10. S F 202e 瓦積
平瓦 II B 類 a タイプ
凹面刻印「丸」-A 〔フィルムD23377〕



9. 南第 10 層 (S F 202e 崩壊土) 出土
243 軒丸瓦、裏面刻印「伊」 〔フィルムD23423・23424〕





1. S X 2664 整地層出土
450 陰刻花文軒丸瓦か
〔フィルムD23408〕



2. S X 2675 整地層出土
451 陰刻花文軒丸瓦か
〔フィルムD23406〕



3. S X 2664 整地層出土
420 宝相華文軒丸瓦か
〔フィルムD23407〕



4. S X 2675 整地層出土
721 軒平瓦か
〔フィルムD23428〕



5. S X 2664 整地層出土
660 均整唐草文軒平瓦
〔フィルムD23389〕



6. S X 2675 整地層出土
721A 軒平瓦か
〔フィルムD23385〕



7. 表土出土 軒棧瓦
〔フィルムD23392〕



8. 表土出土 953 鬼瓦 〔フィルムD23425・23426〕



9. 表土出土 三巴文軒丸瓦
〔フィルムD23416〕



10. 表土出土
連珠三巴文軒丸瓦
〔フィルムD23402〕



11. 表土出土
唐草文軒平瓦
〔フィルムD23393〕

写真図版 11

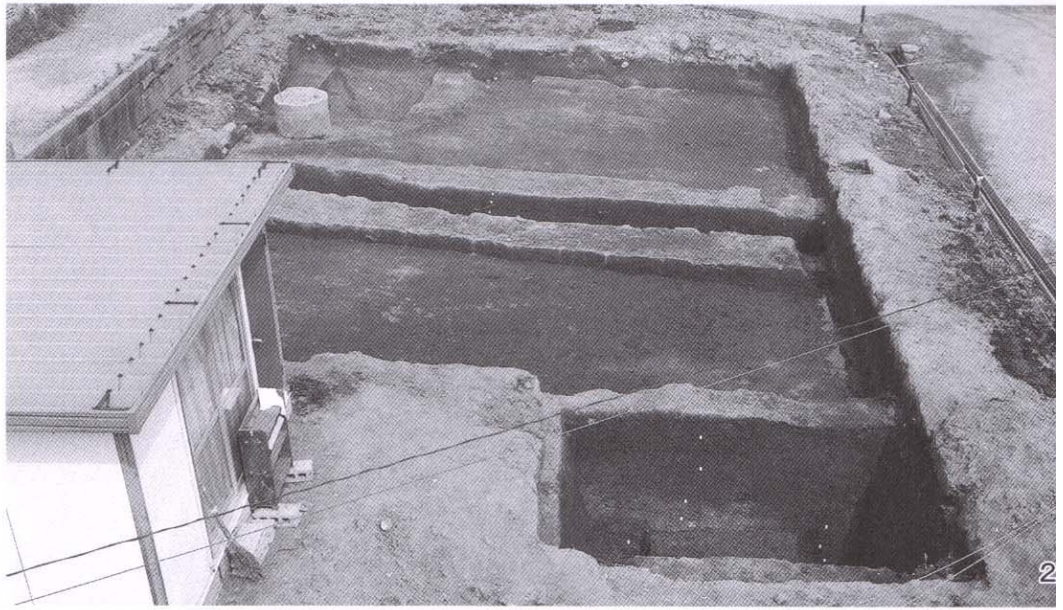
1. 鈴木清任宅の発掘調査
(西から)

[フィルムA1675-2]



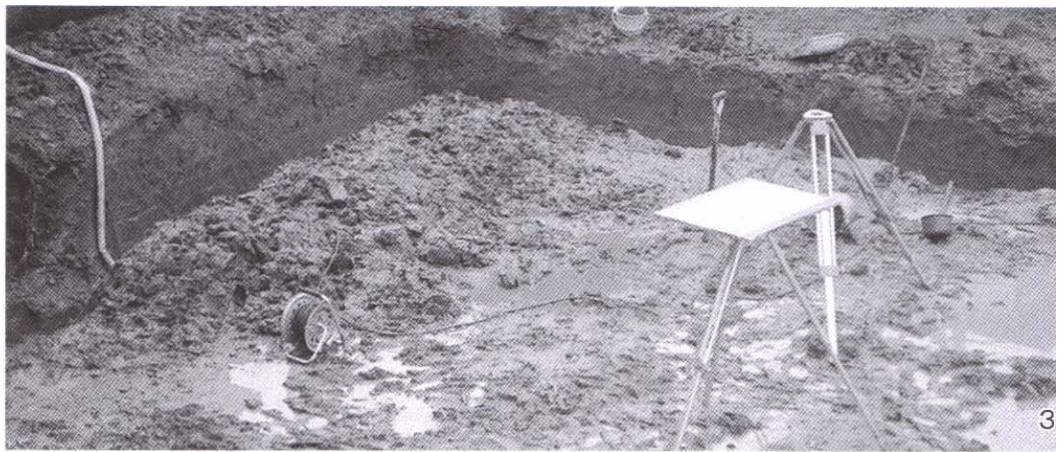
2. 亀山安雄宅の発掘調査
(西から)

[フィルムB10831]



3. 佐藤文男宅の発掘調査

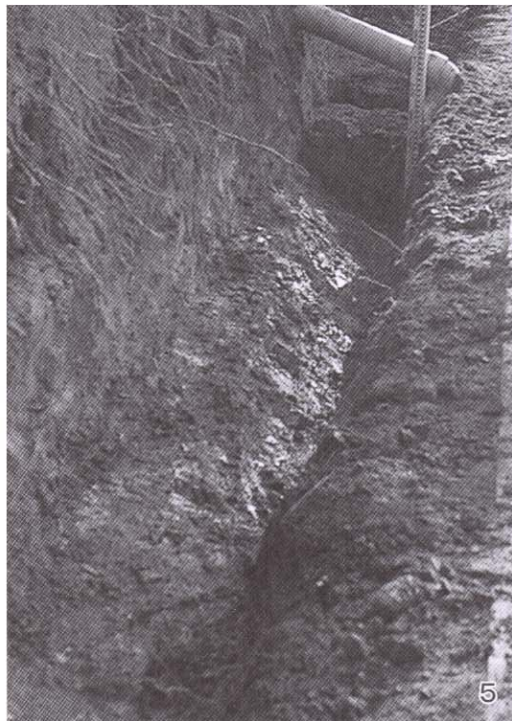
[フィルムA1569-11]



4. 菊池傳吉宅の発掘調査
西区⑦断面図
(西から)

[フィルムD21471A]





5. 開山今朝夫宅の発掘調査
(東から)

[フィルムD22035A]

6. 多賀城廃寺地区の発掘調査
(南から)

[フィルムD21507A]



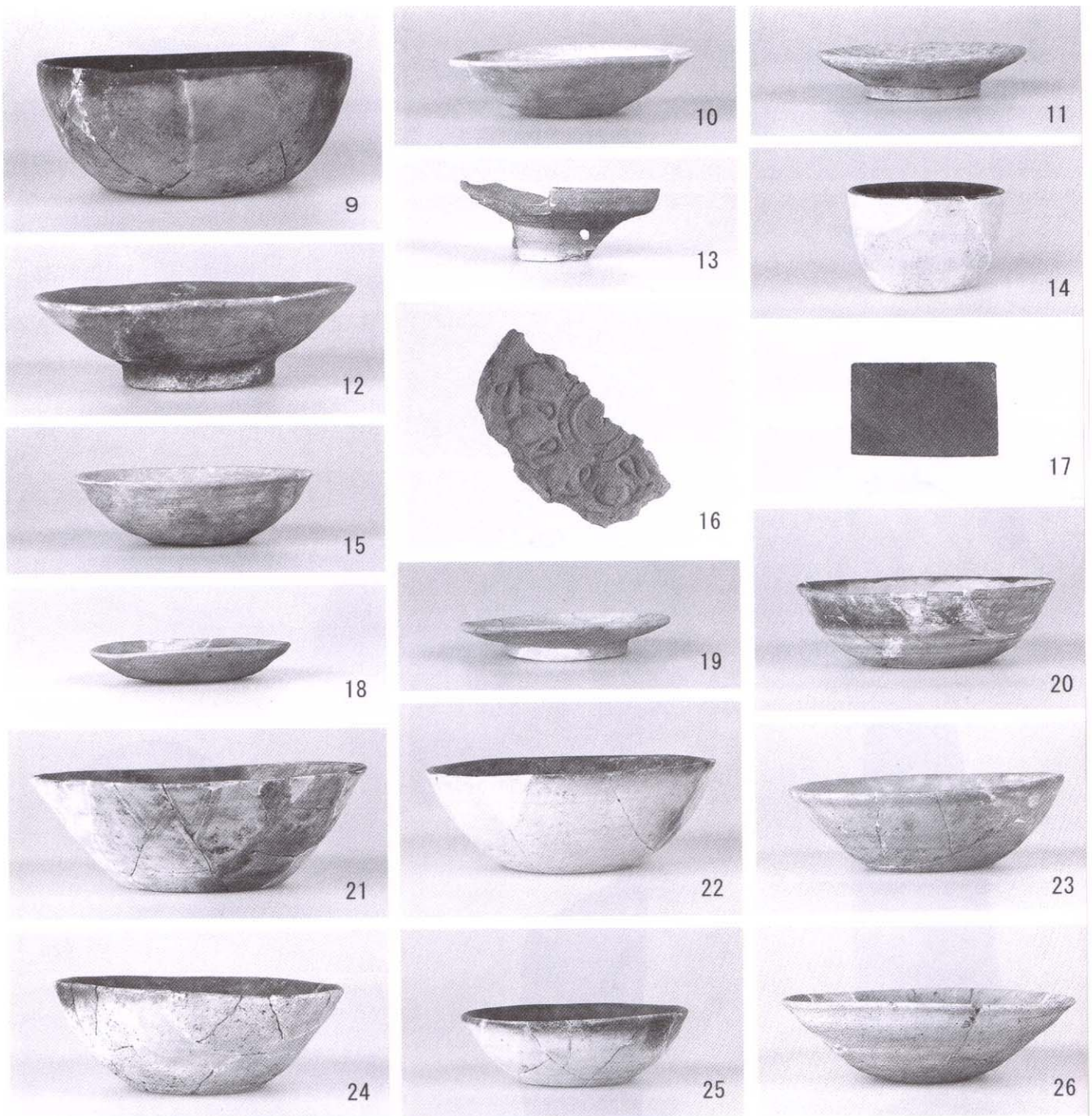
7. 佐藤茂登子宅の発掘調査
(南西から)

[フィルムA1604-33]



8. 佐藤みつ子宅の発掘調査
(北から)

[フィルムD21479A]

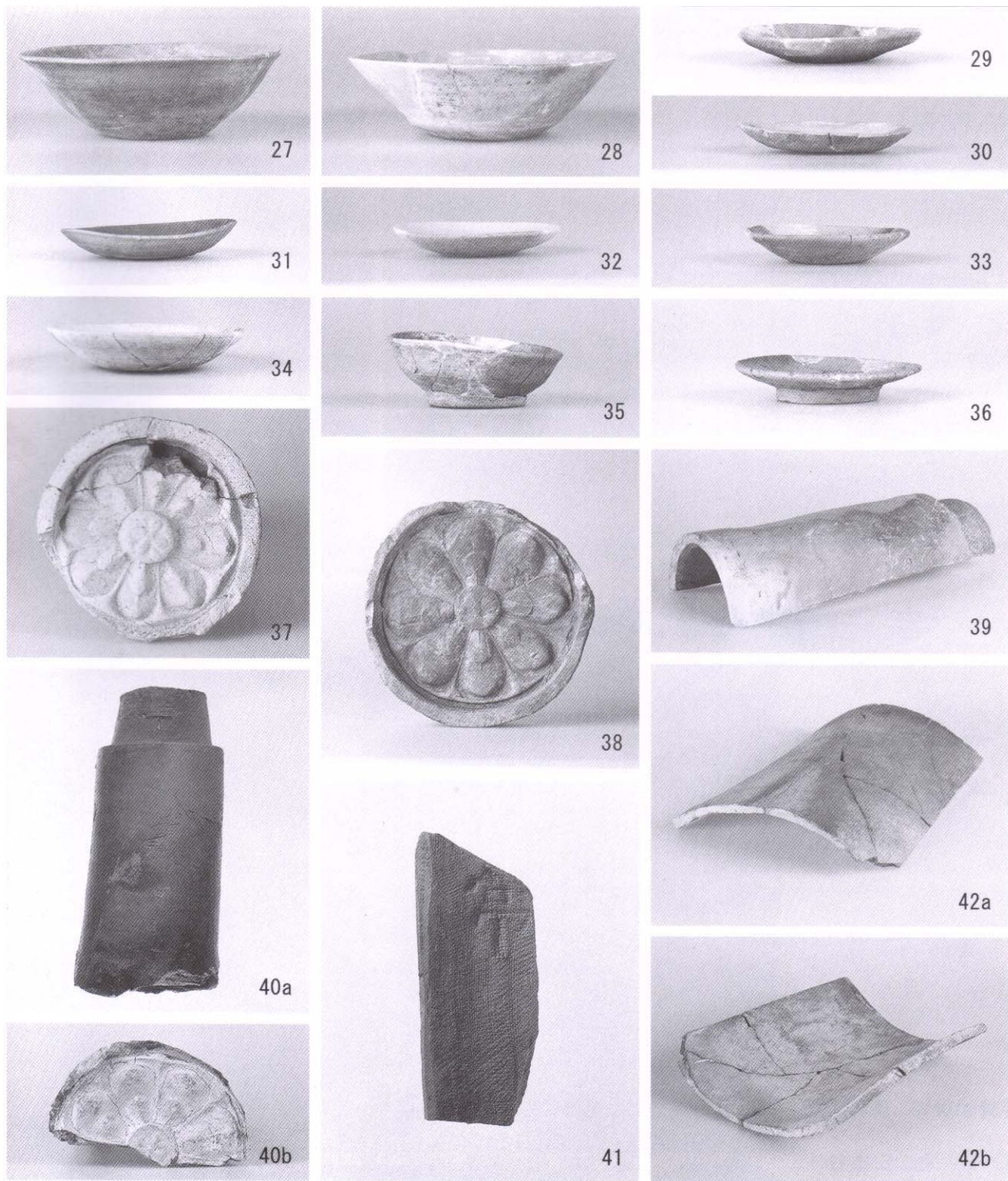


写真図版 13 現状変更 (1995~1998) 出土遺物 (1)

9~17 亀山安雄宅 (9 : 11 層、10 : 6 層、11・12 : 4 層、13 : 3 層、14~17 : 2 層)

18~26 佐藤茂登子宅 (18・19 : SK2581 土壙、20 : 8 層、21~23 : 7 層、24~26 : 6 層)

- | | | | |
|-------------|----------------|-------------|----------------|
| 9、土師器坏 | [フィルム B 11074] | 18、須恵系土器坏 | [フィルム B 11088] |
| 10、須恵系土器坏 | [フィルム B 11070] | 19、須恵系土器高台坏 | [フィルム B 11089] |
| 11、須恵系土器高台坏 | [フィルム B 11071] | 20、須恵器坏 | [フィルム B 11079] |
| 12、須恵系土器高台坏 | [フィルム B 11072] | 21、土師器坏 | [フィルム B 11080] |
| 13、須恵器高台坏 | [フィルム B 11073] | 22、土師器坏 | [フィルム B 11082] |
| 14、土師器坏 | [フィルム B 11075] | 23、須恵器坏 | [フィルム B 11081] |
| 15、須恵系土器坏 | [フィルム B 11076] | 24、土師器坏 | [フィルム B 11087] |
| 16、軒丸瓦 | [フィルム B 11078] | 25、土師器坏 | [フィルム B 11086] |
| 17、石帯の巡方 | [フィルム B 11077] | 26、須恵系土器坏 | [フィルム B 11083] |



写真図版 14 現状変更 (1995~1998) 出土遺物 (2)

27~36、佐藤茂登子宅 (27・28 : 6 層、29~36 : 3 層)

37~42、多賀城廃寺跡北東の道路側溝改良工事 (37~41 : SD2448-5 層、42 : SD2448 堆積層)

- | | | | |
|-----------|---------------|-------------|---------------------|
| 27、須恵系土器坏 | [フィルム B11084] | 35、須恵系土器高台碗 | [フィルム B11092] |
| 28、須恵系土器坏 | [フィルム B11085] | 36、須恵系土器高台坏 | [フィルム B11097] |
| 29、須恵系土器坏 | [フィルム B11094] | 37、軒丸瓦 | [フィルム B11059] |
| 30、須恵系土器坏 | [フィルム B11095] | 38、軒丸瓦 | [フィルム B11062] |
| 31、須恵系土器坏 | [フィルム B11090] | 39、丸瓦 | [フィルム B11066] |
| 32、須恵系土器坏 | [フィルム B11096] | 40、軒丸瓦 | [フィルム B1065・11063] |
| 33、須恵系土器坏 | [フィルム B11093] | 41、平瓦 | [フィルム B11069] |
| 34、須恵系土器坏 | [フィルム B11091] | 42、平瓦 | [フィルム B11068・11067] |

宮城県多賀城跡調査研究所年報 2001
多賀城跡

平成14年3月20日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市高崎一丁目22-1
TEL (022)368-0102
FAX (022)368-0104
印刷所 東杜印刷株式会社
